下ノ中原遺跡
一本木遺跡

長野県上伊那郡長谷村大字非持

県営圃場整備事業担い手育成型非持地区工事
に伴う埋蔵文化財緊急発掘報告書

2001年

長野県上伊那地方事務所
長谷村教育委員会

下ノ中原遺跡・一本木遺跡
県営圃場事業担い手育成型非持地区工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘報告書
2001年
長野県上伊那地方事務所
長谷村教育委員会

下ノ中原遺跡
一本木遺跡

長野県上伊那郡長谷村大字非持

県営圃場整備事業担い手育成型非持地区工事
に伴う埋蔵文化財緊急発掘報告書

2001年

長野県上伊那地方事務所
長谷村教育委員会

下ノ中原遺跡空撮

一本木遺跡空撮

口絵　2

一本木遺跡 T3　トレンチ壁面

一本木遺跡 T5　トレンチの御岳第１軽石
（On-Pm1）

一本木遺跡 T1　トレンチ壁面

一本木遺跡第３号　住居址石芯粘土窯

一本木遺跡第２号址集石

一本木遺跡第４号址集石

口絵　4

一本木遺跡第1号址から出土墨書土器

一本木遺跡第1号址から出土墨書土器

一本木遺跡第3号址から出土天目茶碗

発刊にあたって

この報告書は長谷村が平成12年７月初めから1週間実施した下ノ中原遺跡と10月下旬から１ヶ月間実施した一本木遺跡の緊急発掘調査をまとめたものであります。

両遺跡のある非持山地区は標高が800m付近あり、鹿塩沢が山室川と合流する地点に発達した独立の扇状地に立地している。

今回の調査の結果、下ノ中原遺跡では土壙12基の発見があり、一本木遺跡では縄文時代の住居址が２軒、平安時代の住居址が４軒発見され、その他にも中世の建物址が３基発見された。残念なことに本遺跡においても、これまでの長谷村内での発掘調査と同様に一部が今までの土地改良工事などで切り取られてしまい、全容を知ることはできませんでした。しかし、長谷村内において今回のように中世の建物址がまとまって発見されたことは無く、今後の研究資料となる大変貴重かつ重要な役割を果たす遺跡であると確信しております。

今回の調査にあたり、快く調査の実施にご協力いただきました土地所有者の方々、また発掘調査のご指導、出土品の整理、報告書作成にご尽力いただいた発掘調査団長の友野良一先生をはじめ、発掘作業に意欲的にご協力いただいた作業員の方々に心からの感謝を申し上げるとともに、本報告書が今後の発掘調査の研究活動に大いに活用されることを願い発刊の言葉と致します。

平成13年3月

長谷村教育委員会 教育長　伊　東　耕　平

例　　言

1．報告書は、平成12年度実施した県営圃場整備事業担い手育成型非持地区整備事業に伴う、埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．この緊急発掘調査は、長谷村役場の委託により長谷村教育委員会が実施した。

3．本報告書は、短期間にまとめるよう要求されているため、調査によって検出された遺構、遺物はより多く図示、図版化することに重点を置き、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。

4．第３章第２節中遺物分布については、下記のとおり図示した。

凡例　⊙土器　▣土師器　▲石器　○須恵器　□灰釉
△黒曜石　×鉄器　☆その他

5．本報告書の執筆者及び図版制作者は次のとおりである。

○本文執筆者　友野良一、中山善郎、伊東耕平

○図版制作者　友野良一、奥田静子、春日美佐子、鈴木和恵、松本ひろみ

○写真撮影　　友野良一、中山善郎、小松勝

6．本報告書の編集は主として長谷村教育委員会が行った。

7．遺物及び実測図類は長谷村教育委員会が保管している。

目　　次

口　絵
発刊にあたって
例　言
目　次

第１章　発掘調査の経緯…… 1
　第１節　発掘調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　調査会の組織…… 1
　第３節　発掘調査の経過…… 1

第２章　遺跡の環境…… 4
　第１節　遺跡の位置…… 4
　第２節　地形及び地質…… 7
　第３節　歴史的環境……13

第３章　遺構と遺物……14
　第１節　調査の概要……14
　第２節　遺構と遺物……16
　（１）下ノ中原遺跡……16
　　第１,２号土壙……16
　　第３,４号土壙……17
　　第５，６，７号土壙……18
　　第８,９号土壙……19
　　第10,11,12号土壙……20
　（２）一本木遺跡……21
　　第１号住居址……21
　　第２号住居址……22
　　第３号住居址……24
　　第４号住居址……26
　　第５号住居址……28
　　第６号住居址……29
　　第１号址……31
　　第２号址……34
　　第３号址……35
　　第４号址……37
　　第５号址……38
　　第６号址……41
　　第７号址……43
　　第８号址……44
　　土壙群……46
　　トレンチ調査遺物……48
まとめ（参考文献含）……49
遺物一覧表……51
写真図版……55

挿　図　目　次

第１図　下ノ中原遺跡及び一本木遺跡の位置…… 4
第２図　下ノ中原遺跡及び一本木遺跡と周辺の遺跡分布図…… 5
第３図　非持山扇状地の地形面区分…… 7
第４図　下ノ中原地区Ｔ１・Ｔ２トレンチ柱状断面図…… 8
第５図　一本木地区Ｔ３トレンチ柱状断面図……10
第６図　一本木地区Ｔ４・Ｔ５トレンチ柱状断面……11
第７図　下ノ中原遺跡遺構分布図……14
第８図　一本木遺跡遺構分布図……15
第９図　第１号土壙実測図……16
第10図　第１号土壙石器実測図…… 16
第11図　第２号土壙実測図…… 16
第12図　第２号土壙拓影実測図…… 16
第13図　第３号土壙実測図…… 17
第14図　第４号土壙実測図…… 17
第15図　第５号土壙実測図…… 18
第16図　第６号土壙実測図…… 18
第17図　第７号土壙実測図…… 18
第18図　第８号土壙実測図…… 19
第19図　第９号土壙実測図…… 19
第20図　第10号土壙実測図…… 20
第21図　第11号土壙実測図…… 20
第22図　第12号土壙実測図…… 20
第23図　第１号住居址実測図・遺物分布図…… 21
第24図　第１号住居址遺物実測図…… 22
第25図　第２号住居址実測図…… 22
第26図　第２号住居址遺物分布図…… 23
第27図　第２号住居址遺物実測図…… 23
第28図　第３号住居址実測図…… 24
第29図　第３号住居址遺物分布図…… 25
第30図　第３号住居址遺物実測図…… 26
第31図　第４号住居址実測図…… 26
第32図　第４号住居址遺物分布図…… 27
第33図　第４号住居址遺物実測図…… 27
第34図　第５号住居址実測図・遺物分布図…… 28
第35図　第５号住居址遺物実測図…… 29
第36図　第６号住居址実測図…… 29
第37図　第６号住居址遺物分布図…… 30
第38図　第６号住居址遺物実測図…… 30
第39図　第１号址実測図・遺物分布図…… 31
第40図　第１号址遺物実測図…… 32
第41図　第１号址遺物実測図…… 33
第42図　第２号址実測図・遺物分布図…… 34
第43図　第２号址遺物拓影実測図…… 34
第44図　第３号址実測図…… 35

第45図　第３号址遺物分布図 …… 36
第46図　第３号址遺物実測図 …… 36
第47図　第４号址実測図・遺物分布図 …… 37
第48図　第４号址遺物実測図 …… 38
第49図　第５号址実測図 …… 38
第50図　第５号址遺物分布図 …… 39
第51図　第５号址遺物実測図 …… 40
第52図　第６号址実測図 …… 41
第53図　第６号址遺物分布図 …… 42
第54図　第６号址遺物実測図 …… 42
第55図　第７号址実測図・遺物分布図 …… 43
第56図　第７号址遺物実測図 …… 44
第57図　第８号址実測図 …… 44
第58図　第８号址遺物分布図 …… 45
第59図　第８号址遺物拓影実測図 …… 45
第60図　土壙群実測図(縮尺1/250) …… 46
第61図　土壙群遺物実測図 …… 47
第62図　トレンチ調査図 …… 48
第63図　トレンチ調査遺物実測図 …… 48

表１　長谷村内遺跡一覧表…… 6
表２　下ノ中原地区トレンチ砂粒分析結果…… 9
表３　一本木地区トレンチ砂粒分析結果…… 11. 12

写１　駒形…… 13

図　版　目　次

図版１　上　下ノ中原遺跡　第１土壙…… 56
中　下ノ中原遺跡　第２土壙
下　下ノ中原遺跡　第３土壙
図版２　上　下ノ中原遺跡　第４土壙…… 57
中　下ノ中原遺跡　第５土壙
下　下ノ中原遺跡　第６土壙
図版３　上　下ノ中原遺跡　第７土壙…… 58
中　下ノ中原遺跡　第８土壙
下　下ノ中原遺跡　第９土壙
図版４　上　下ノ中原遺跡　第10土壙 …… 59
中　下ノ中原遺跡　第11土壙
下　下ノ中原遺跡　第12土壙
図版５　上　一本木遺跡　第１号住居址…… 60
下　一本木遺跡　第２号住居址
図版６　上　一本木遺跡　第３号住居址…… 61
下　一本木遺跡　第４号住居址
図版７　上　一本木遺跡　第５号住居址…… 62
下　一本木遺跡　第６号住居址

図版８　上　一本木遺跡　第１号址……63
　　下　一本木遺跡　第２号址
図版９　上　一本木遺跡　第３号址……64
　　下　一本木遺跡　第４号址
図版10　上　一本木遺跡　第５号址……65
　　下　一本木遺跡　第６号址
図版11　上　一本木遺跡　第７号址……66
　　下　一本木遺跡　第８号址
図版12　上　下ノ中原遺跡土壙遺物……67
　　下　一本木遺跡第１，２，３号住居址遺物
図版13　上　一本木遺跡第４号住居址遺物……68
　　下　一本木遺跡第５号住居址遺物
図版14　上　一本木遺跡第６号住居址遺物……69
　　下　一本木遺跡第１号址遺物
図版15　上　一本木遺跡第１，２，３号址遺物……70
　　下　一本木遺跡第４，５，６号址遺物
図版16　上　一本木遺跡第７,８号址遺物……71
　　下　一本木遺跡土壙,トレンチ遺物
図版17　上　上・中　発掘状況……72
　　下　発掘に参加いただいた皆さん

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

県営圃場整備事業担い手育成型非持山地区の遺跡の調査は、同圃場整備事業地区内に埋蔵文化財包蔵箇所があるので、事業実施に先立ち、本格的な発掘調査を行い記録保存する必要が生じた。

下ノ中原遺跡に関しては、平成12年７月21日、上伊那地方事務所長と長谷村長との間で埋蔵文化財発掘事業委託契約書を締結、同日下ノ中原遺跡発掘調査団を結成し、発掘作業を遂行することになった。調査団は友野良一団長以下10名で構成された。７月24日、教育長、長谷村文化財専門委員、作業員等が現地に参集して、安全祈願を行い発掘調査開始。

一本木遺跡に関しては、平成12年10月17日、上伊那地方事務所長と長谷村長との間で埋蔵文化財発掘事業委託契約書を締結、同日南原遺跡発掘調査団を結成し、発掘作業を遂行することになった。調査団は友野良一団長以下13名で構成された。10月24日、教育長、長谷村文化財専門委員、作業員等が現地に参集して、安全祈願を行い発掘調査開始。

第２節　調査会の組織

○長谷村教育委員会

教育委員長	中山汎圃
同職務代理	渋谷市郎
教育委員	伊藤文雄
	宮下公平
教育長	伊東耕平
教育次長	池上直彦
生涯学習係長	黒河内浩人
同係	小松　勝

○下ノ中原遺跡発掘調査団

団　長	友野良一（日本考古学協会委員）
副団長	中山善郎（長谷村文化財専門委員長）
調査員	松島信幸（第四紀学会員）
	寺平　宏（第四紀学会員）

第３節　発掘調査の経過

発　掘　日　誌

下ノ中原遺跡

2000

7.24　友野調査団長以下13名により安全祈願を挙行。団長より発掘業務に関する指示を受け、発掘道具の運び込み終了後、下ノ中原遺跡の現場作業を開始。F-4、F-5メッシュ中間付近よりトレンチ法による試掘を開始。第１トレンチのF-6メッシュ付近より土壙らしきものが２つ出土、それぞれ第１号土壙、第２号土壙とした。第1号土壙より石垂らしいものと打製石斧らしきもの出土。第２号土壙より曽利Ⅱ式土器が出土した。

7.25　雨天のため発掘作業は中止。

7.26　第２、３、４、５、６トレンチを開ける。第６トレンチより第４、５、６、７号土壙が出土、土壙には遺物は見つからなかった。第３トレンチより第３号土壙が出土。それぞれの土壙の整理清掃後、土壙の実測と写真撮影をする。

7.27　第４トレンチD-6付近に第８、９号土壙が、同トレンチE-6付近に第10、11号土壙が出土。

どの土壙にも遺物は見つからなかった。それぞれの土壙を整理清掃後、土壙の実測と写真撮影をする。

7.28　第7、8、9、10トレンチを開ける。第9号トレンチより第12号土壙が出土。すべてのトレンチ断面図を作成して、最後に出土した土壙の実測及び写真撮影ですべての発掘作業を終了。
午後発掘道具の片づけを行い､下ノ中原遺跡の発掘作業の全日程を終了。

一本木遺跡

2000

10.24　友野調査団長以下13名により安全祈願を挙行。団長より発掘業務に関する指示を受け、発掘作業の準備をする。午後より一本木遺跡の現場作業を開始。K-5、L-5メッシュ中間付近より発掘作業を開始。K-5メッシュ付近より第1号土壙が出土さらにその約1m北側より第2号土壙が出土。土壙近辺より内黒の土器片が数点出土した。

10.25　雨天の為発掘作業中止。

10.26　N-3メッシュ付近より畑全面を発掘。M-4メッシュ付近から平安時代の炉らしきものが出土したためここを第1号住居址とする。更にその少し北側にも炉らしきものを確認し、周りを整理したところ住居址を確認できたため、これを第2号住居址とする。第3～14号土壙が出土。第10号土壙の中より押型文土器を含め数点の遺物が出土した。

10.27　前日に引き続き同じ畑を発掘。第15～19号土壙が出土。第1～14号土壙までを整理清掃後、記録保存のための写真撮影をする。第1号土壙付近の清掃をしたとき、炉らしきものを確認したが住居址とは断定できないため第1号址とする。

10.30　M-6メッシュ付近より北側に向け第1トレンチを開ける。第1号住居址の記録保存のための実測と写真撮影をする。第20～27号土壙が出土。

10.31　K-6メッシュ付近より第2トレンチ、L-10付近より第3トレンチを開ける。第2、3トレンチ両方の中心付近から遺構らしきものが出土した。第2住居址及び第1号址を記録保存のための実測と写真撮影をする。

11.1　雨天の為発掘作業中止。

11.6　M-13、L-13付近に第4トレンチ、第5トレンチを開ける。第15～27号土壙の記録保存のための写真撮影をする。

11.7　I-6、J-6の真中付近より第6トレンチを、H-6付近に第7、8トレンチを開ける。第6トレンチ中心付近に遺構の床面を確認したのでその付近を拡張したところ、2つの遺構を確認できた。ひとつは住居址と確認できたため第3号住居址とし、もうひとつの遺構は住居址と断定できなかったので第2号址とする。

11.8　I-9、J-9の真中付近から北に向かい第9、10、11トレンチを開ける。第10トレンチ中央付近に遺構らしきもの出土、その為その付近を拡張したところ2つの遺構を確認、それぞれ第4号址、第5号址とする。第3号住居址と第2号址を整理清掃後、記録保存のための実測をする。第2号址横より平出Ⅲ号土器が出土した。

11.9　I-11付近から北に向かい第12、13、14トレンチを開ける。第13トレンチのH-12付近に遺構が出土、その付近を拡張して、遺構を確認、住居址の断定はできないので、第6号址とする。第3号住居址と第2号址の記録保存のための実測と写真撮影をする。

11.10　I-14付近から北に向かい第15、16、17トレンチを開ける。第3号址を整理清掃後、記録保存のための実測をする。第4号址より内耳土器の破片が出土。

11.13　第3号址の写真撮影。第6号址を整理清掃後、記録保存のための実測と写真撮影をする。第6号址を整理した際、内耳土器の破片が出土。

11.14　第4、5号址を整理清掃後、記録保存のための実測と写真撮影をする。第2、3トレンチの遺構周辺を拡張し、第4号住居址と第7、8号址を第2トレンチに、第5号住居址を第3トレンチに確認。午後は発掘の妨げになる休憩所のテントを移設。

11.15　第4号住居址を整理清掃後、記録保存のための実測と写真撮影をする。午後は雨天の為発掘作

業中止。

11.16　Ⅰ-5メッシュ付近に第18トレンチを、L-3メッシュ付近に第19トレンチを開ける。第7、8号址整理清掃後、記録保存のための実測と写真撮影をする。午後は雨天の為発掘作業中止。

11.17　雨天の為発掘作業中止。

11.20　雨天の為発掘作業中止。

11.21　松島先生、寺平先生が来村して、地層地質の調査。バックホーにて調査区域内の3箇所を3m程掘り下げて地層地質調査のためのサンプルの採取。

11.22　午前中は空撮に備えて、遺構の上にかぶせたシートを退かし、午後より峰コンサル立会いのもと空中撮影を実施。

12.2　午後1時半より、現地説明会を行なう。

12.4　午前中に発掘道具の片づけを行い、発掘調査の全日程を終了。

『発掘調査に参加していただいた方々(順不同・敬称略)』

池上　明博　　伊東　栄人　　伊東　好一　　宮下　彦二　　小松　正人　　中山　源一
中山喜与子　　倉田　栄子　　中山緋佐子　　松本ひろみ　　春日美佐子
㈲東部建設　　㈱峰コンサル

第２章　遺跡の環境

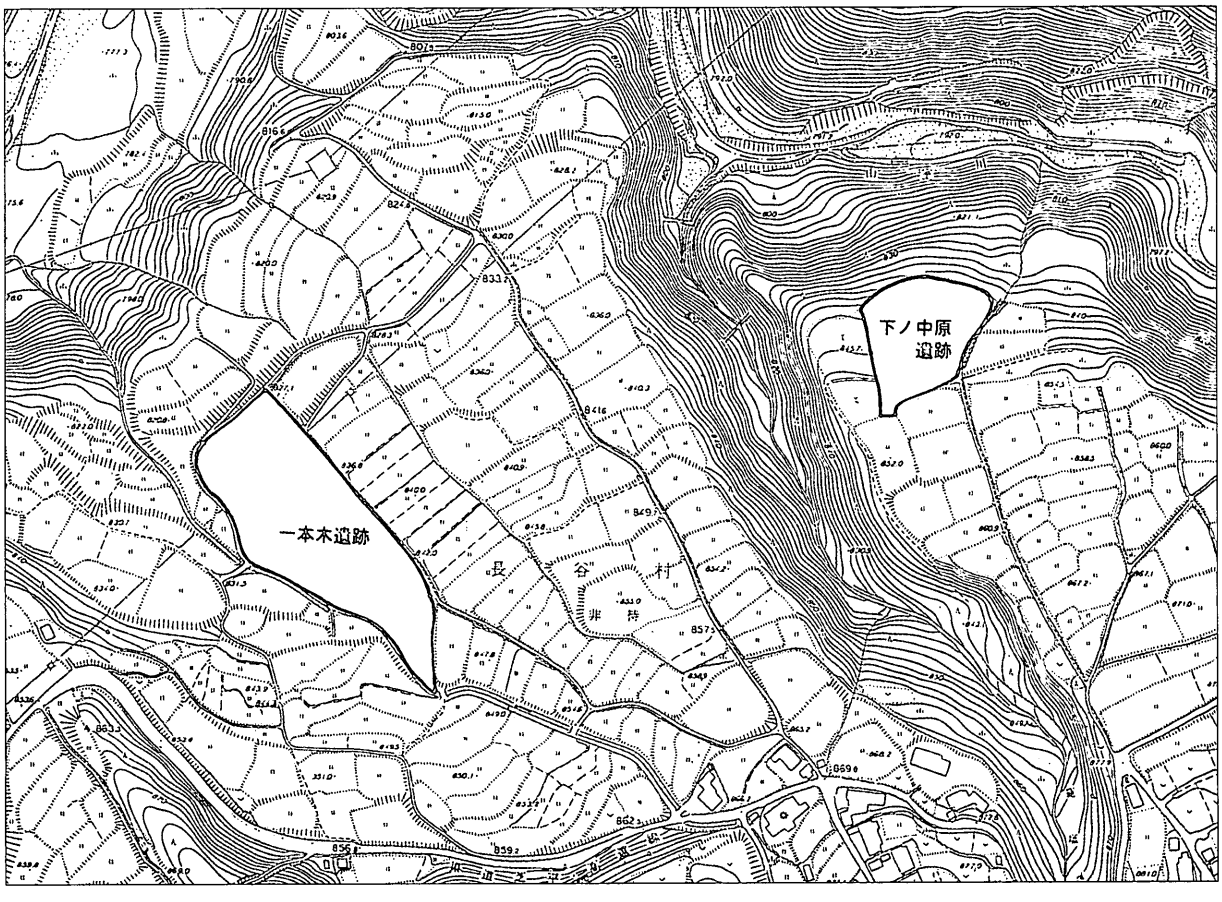
第１節　遺跡の位置

今回の発掘調査地である下ノ中原遺跡は長野県上伊那郡長谷村非持3389-1番地外に所在する、地理的位置は、東経138度05分47秒、北緯35度49分17秒である。この遺跡はJR伊那市駅から国道361号線で高遠町に至り、更に152号線を南へ２kmの地点にある遺跡である。また、中央東線茅野駅から杖突街道（国道152号線）にて至ることもできる。

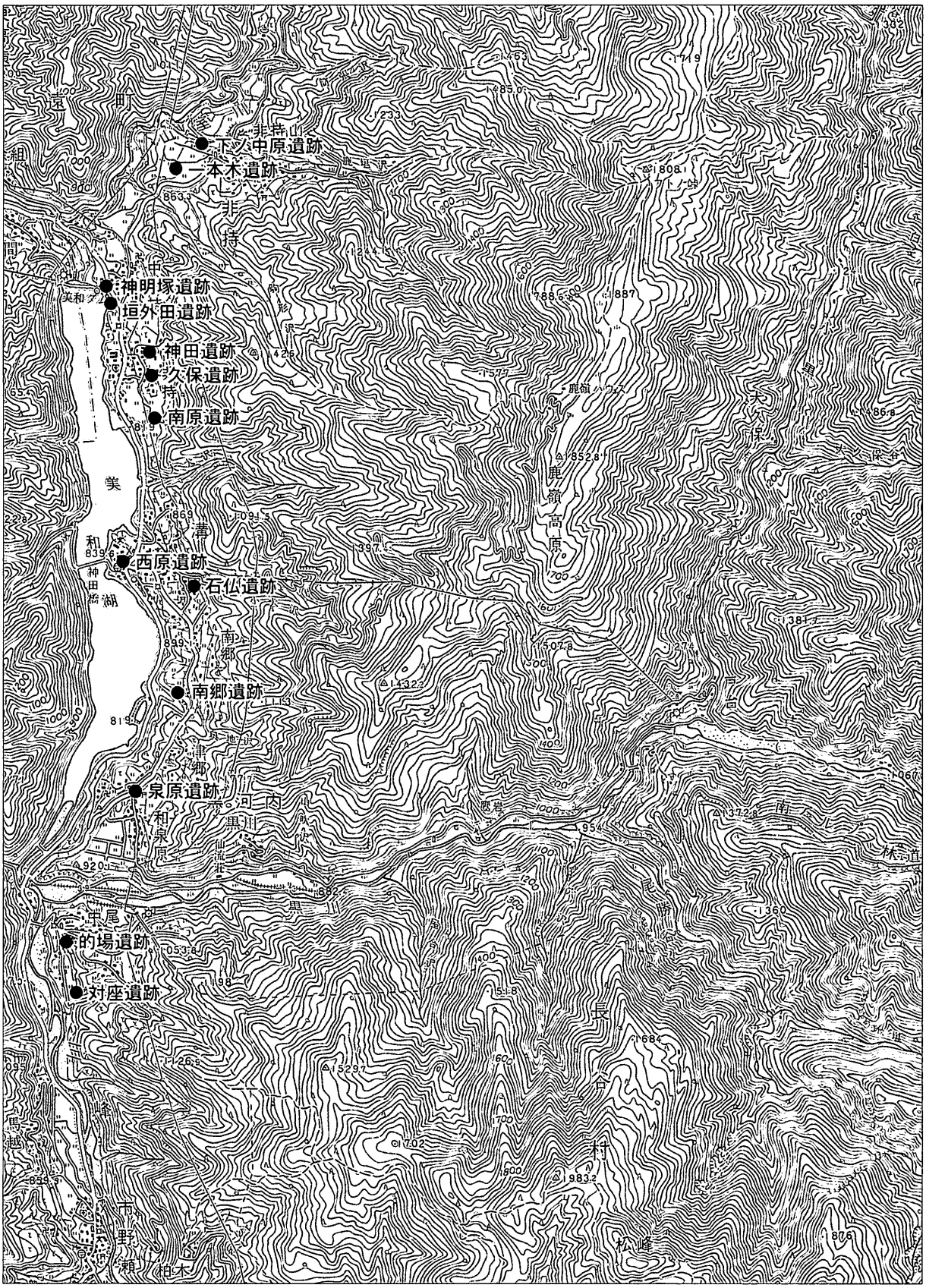
下ノ中原遺跡は鹿塩沢と山室川に挟まれた扇央地帯に位置しており、標高は846m内外である。

もう一つの、一本木遺跡は長野県上伊那郡長谷村非持2262-1番地外に所在する、地理的位置は、東経138度05分21秒、北緯35度49分11秒である。この遺跡はJR伊那市駅から国道361号線で高遠町に至り、更に152号線を南へ1.5kmの地点にある遺跡である。また、中央東線茅野駅から杖突街道（国道152号線）にて至ることもできる。

一本木遺跡は山室川の河原に広がった扇央地域に位置しており、標高は833m内外である。



第１図　下ノ中原遺跡及び一本木遺跡の位置



第２図　下ノ中原遺跡及び一本木遺跡と周辺の遺跡分布図

表１　長谷村内遺跡一覧表

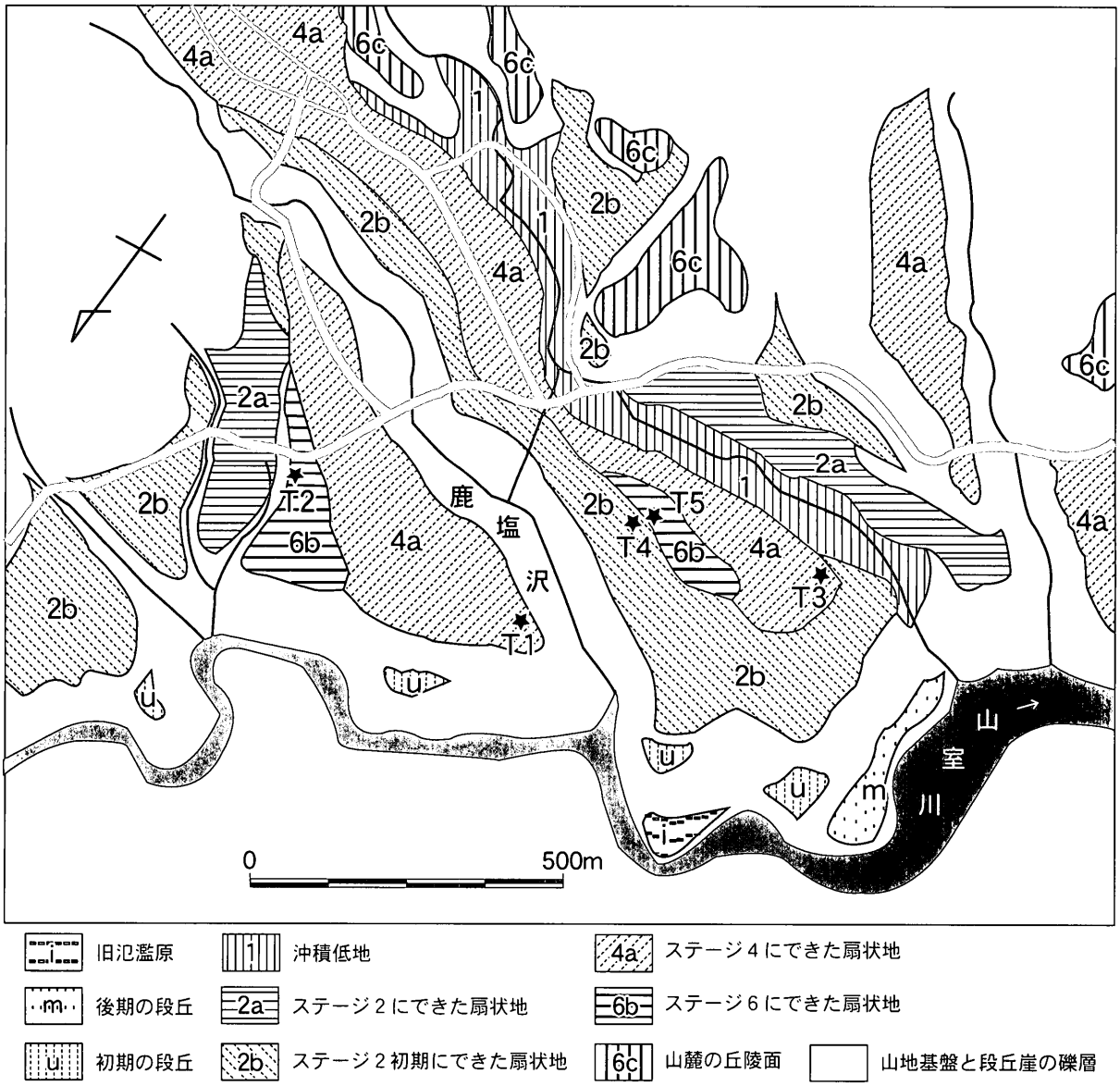
種　別	時　　代	名　称	所在地	地　目	発　掘　歴	有無
散布地	古墳・奈良・平安・中世・近世	荒神沢遺跡	非持山	山　麓		
散布地	縄文中期・古墳・平安・中世・近世	狐塚遺跡	非持山	段丘斜面		
集落跡	縄文中期・平安・中世・近世	一本木遺跡	非持山	扇　央	住居址：縄文２軒・平安４軒	有
散布地	縄文中期、後期・平安・中世・近世	中原遺跡	非持山	扇　頂		
集落跡	縄文中期、後期・平安・中世・近世	下ノ中原遺跡	非持山	扇　央	土壙：12基	有
散布地	縄文中期、後期・古墳・奈良・平安・中世・近世	中非持遺跡	中非持	段丘中央		
散布地	縄文中期、後期・平安・近世	垣外田遺跡	中非持	段丘中央		
散布地	縄文中期・奈良・平安	神明塚遺跡	中非持	段丘縁部		
散布地	縄文中期、後期・平安・中世・近世	神田遺跡	中非持	扇　央		
散布地	縄文中期、後期・平安・中世・近世	観音寺畑遺跡	非　持	扇　央		
散布地	縄文中期、後期・平安・中世・近世	久保遺跡	南非持	扇　央		
集落跡	縄文中期、後期・弥生・平安・中世・近世	南原遺跡	南非持	段丘斜面	住居址：縄文中期12軒・弥生１軒・平安２軒	有
散布地	縄文中期・中世・近世	西原遺跡	溝　口	段丘中央		
集落跡	縄文中期	石仏遺跡	溝　口	段　丘	住居址：縄文中期７軒	有
集落跡	縄文中期・平安・近世	南郷遺跡	溝　口	段丘中央	住居址：縄文中期１軒・平安８軒	有
集落跡 城　址	縄文中期、後期・弥生(前、後期)・奈良・平安	泉原遺跡	黒河内	扇　央	住居址：縄文中期23軒、後期４軒・平安４軒	有
散布地	中世・近世	和泉原遺跡	黒河内	段丘中央		
散布地	縄文中期、後期	的場遺跡	中　尾	段丘中央		
散布地	縄文中期、後期・平安・近世	対座遺跡	中　尾	段丘中央		
散布地	縄文中期、後期・平安・近世	市野瀬遺跡	市野瀬	扇　央		
散布地	縄文中期、後期・平安・中世・近世	熊ノ森遺跡	市野瀬	段丘斜面		
散布地	旧石器・縄文	入笠山南遺跡	黒河内	山　麓		

第２節　地形及び地質

１．非持山の扇状地と調査地

非持山地区は鹿塩沢が山室川と合流する地点に発達した独立の扇状地に立地している。長谷村では、非持山以外の集落が三峰川に沿っているのに対して最北端にある本集落のみが三峰川の支流にあたる山室川に面している。非持山の扇状地を作っている鹿塩沢は三峰川と小黒川とを隔てる鹿嶺の山稜から流れ下ってくる大きな支流で、末端に形成期が異なる複数の扇状地が重なり合って複雑な合成扇状地ができている。

調査地の下ノ中原は右岸側（右翼）で、一本木は鹿塩沢の左岸側（左翼）にある。扇状地の形成は右岸、左岸とも同時に進行している関係上両調査地をまとめて記述していく。表層地質の調査で実施したトレンチは下ノ中原側でＴ１、右翼北端の露頭Ｔ２であり、一本木側がＴ３、Ｔ４、Ｔ５である。以上の場所は第３図に示し、それぞれの柱状断面図を第４、５、６図に示す。



第３図　非持山扇状地の地形面区分

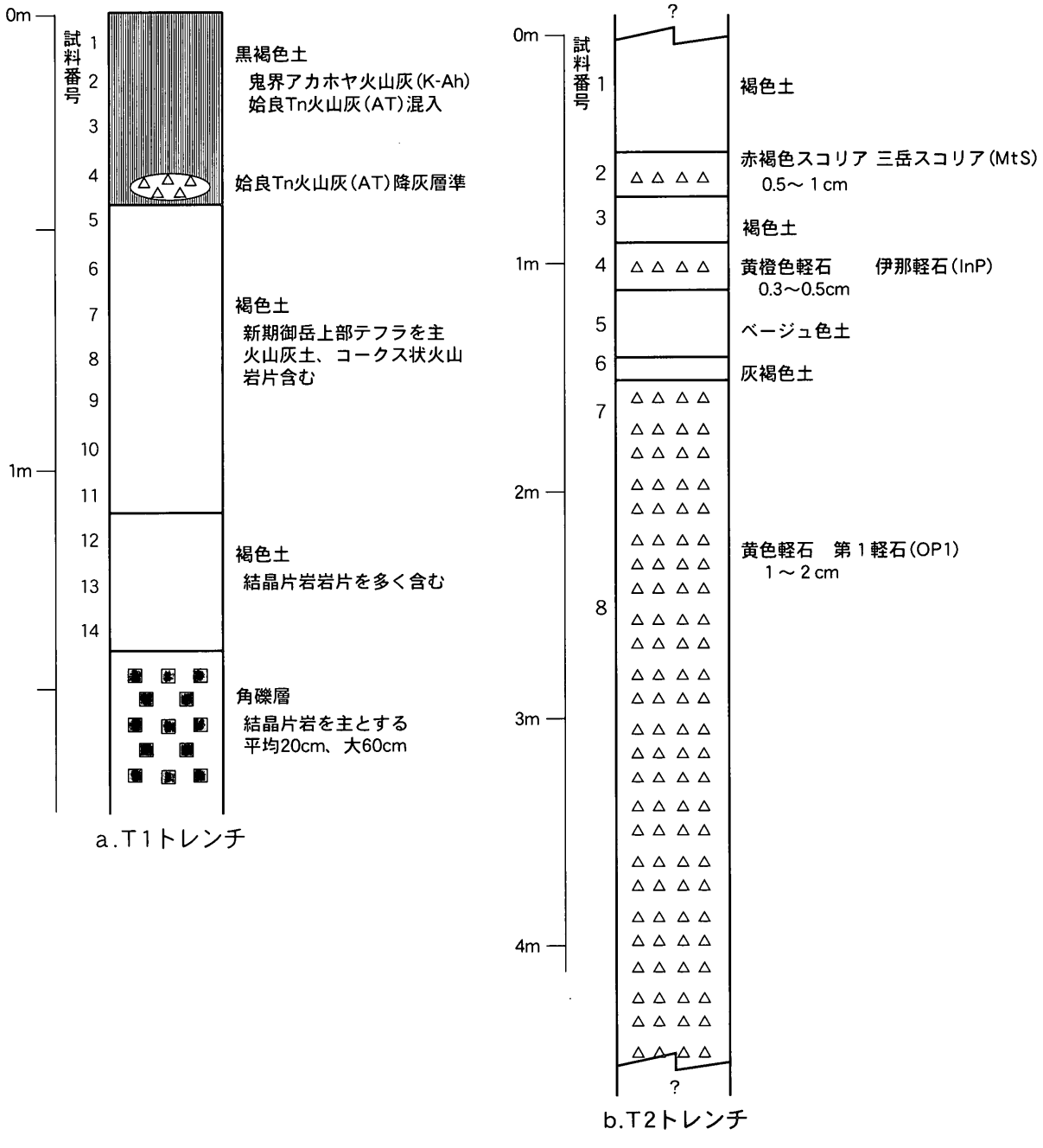
２．表層地質の説明（トレンチ調査を中心に）

（１）下ノ中原地区

Ｔ１トレンチの位置は鹿塩沢の右岸で鹿塩沢に面した段丘状の台地の山室川に近い先端部である。第３図、第４図ａ、表２ａを参照。Ｔ１トレンチの最上部は黒褐色土から始まり深さ20cmまではK-AhとAT

が混入する。その下位はATだけとなり30～40cmでATの混じりが最大になるから、この付近がATの降下層準にあたる。これより下は褐色火山灰土である。結晶片岩岩片がやや多く混入してきており再堆積性の部分もある。80cmくらいから礫の混入が出始めて100cmからは礫径１cm程度の結晶片岩礫が増える。基質部分の火山結晶には斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱、角閃石の他コークス状火山岩片が目立ち、新期御嶽火山活動の上部テフラを示している。これらからＴ１はＴ３に対比できる。140cmより下位は突然に最大礫径50cmもある結晶片岩角礫を含む礫層になる。

Ｔ２の観察、非持山扇状地は右翼側が高い台地になっている。その北縁部は圃場整備の工事のため重機による露頭が現れていた。第４図ｂ、表２ｂ参照。ここでは５～６ｍの地層断面が観察できる。上部は褐色火山灰層、続いて赤褐色の三岳スコリア層、褐色火山灰層、黄橙色の伊那軽石層、ベージュ色火山灰層、灰褐色火山灰層、黄色の御嶽第１軽石層、赤褐色の高森古土壌、赤褐色風化半ぐさり砂礫層が露出している。これらの地層は非持山扇状地を最初に形成した当時の扇状地堆積物と、扇状地が離水した後に扇状地面を覆った風成層である。本扇状地は高森古土壌より以前の時期に完成していたことがわかる。



第４図　下ノ中原地区Ｔ1・Ｔ2トレンチ柱状断面図

表２　下ノ中原地区トレンチ砂粒分析結果

a.Ｔ１　トレンチ砂粒分析結果

試料No	採取地点（ｃｍ）	産　状	火　山結晶％	火　山ガラス％	岩片他％	鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	0～10	黒褐色土	40	15	45	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw,br－gl	御岳テフラ>結晶片岩片>AT･K-AH
2	10～20	黒褐色土	45	10	45	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw,br－gl	御岳テフラ>結晶片岩片>AT･K-AH
3	20～30	黒褐色土	65	5	30	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫結晶片岩片>AT
4	30～40	褐色土	60	15	25	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫結晶片岩片>AT
5	40～50	褐色土	60	10	30	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫結晶片岩片>AT
6	50～60	褐色土	60	5	35	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫結晶片岩片>AT
7	60～70	褐色土	75	5	20	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫結晶片岩片>AT
8	70～80	褐色土	80	0	20	opx,mt,cpx,ho,fl,結晶片岩岩片		御岳テフラ≫結晶片岩片
9	80～90	褐色土やや硬質、0.5～1.0cm結晶片岩礫混入	60	1	39	opx,mt,cpx,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫結晶片岩片≫AT
10	90～100	褐色土やや硬質、0.5～1.0cm結晶片岩礫混入	50	0	50	opx,mt,cpx,ol,fl,結晶片岩岩片,コークス状火山岩片		御岳上部テフラ≧結晶片岩片
11	100～110	褐色土0.5～1.0cm結晶片岩礫混入	50	0	50	opx,mt,cpx,ol,fl,結晶片岩岩片,コークス状火山岩片		御岳上部テフラ≧結晶片岩片
12	110～120	褐色土0.5～1.0cm結晶片岩礫混入	45	0	55	opx,mt,cpx,ol,fl,結晶片岩岩片,コークス状火山岩片		結晶片岩片>御岳上部テフラ
13	120～130	褐色土0.5～1.0cm結晶片岩礫混入	40	0	60	opx,mt,cpx,ol,fl,結晶片岩岩片,コークス状火山岩片		結晶片岩片>御岳上部テフラ
14	130～140	褐色土0.5～1.0cm結晶片岩礫混入	40	0	60	opx,mt,cpx,ol,fl,結晶片岩岩片,コークス状火山岩片		結晶片岩片>御岳上部テフラ

b.Ｔ２　トレンチ砂粒分析結果

試料No	採取地点（ｃｍ）	産　状	火　山結晶％	火　山ガラス％	岩片他％	鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	0～50	褐色土	70	0	30	opx,mt,cpx,fl,ob コークス状火山岩片		御岳上部テフラ
2	50～70	赤褐色スコリア	95	0	5	mt,opx,cpx,fl,(灰色火山岩片)		三岳スコリア(Mt.S)
3	70～90	褐色土	90	0	10	mt,opx,ho,fl,(灰色火山岩片)		御岳テフラを主とする火山灰土
4	90～110	黄橙色軽石	95	0	5	opx,mt,fl,(灰色火山岩片)		伊那軽石(InP)
5	110～140	ベージュ色土	10	0	90	mt,opx,fl,白～灰色火山岩片		潟町軽石(KtP)?
6	140～150	灰褐色土	10	1	89	mt,opx,fl,qt,(β－qt),白～灰色火山岩片	bw	bw火山ガラスとβ－qtは鬼界葛原テフラ(K－Tz)?
7	160	黄色軽石	50	45	5	ho,mt,bi,fl,灰色火山岩片	pm(fib)	御岳第１軽石(On－Pml)
8	260	黄色軽石	50	45	5	ho,mt,bi,fl,灰色火山岩片	pm(fib)	御岳第１軽石(On－Pml)

凡　例

鉱物・岩片等　opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ol：かんらん石，mt：磁鉄鉱，ho：角閃石，bi：黒雲母，ve：バーミキュライト，fl：長石，qt：石英，β－qt：高温石英，ob：黒曜石

火山ガラスの形態他　bw：泡壁型，pm：軽石型(fib：ファイバー型，spo：スポンジ型)，br-gl：褐色ガラス

（2）一本木地区

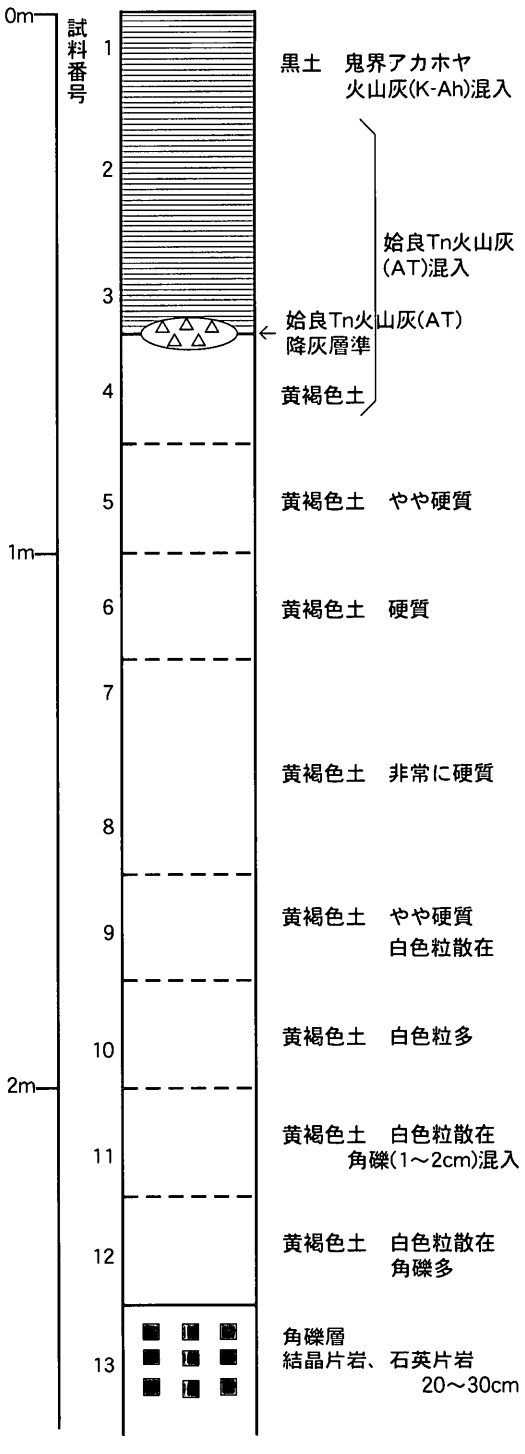
T3トレンチの位置は非持山扇状地左翼の鹿塩沢と荒神沢との間に挟まれ、馬の背状にやや台地化した部分、山室川を見下ろす西よりの先端部にあたる。ここを掘削すると2.5mで礫層に達した。この礫層が非持山扇状地を作っており、礫種はすべて結晶片岩類であり、鹿塩沢が鹿嶺山稜方面から運び出した礫である。礫層の上に厚さ2.4mの被覆層が載っている。説明は第5図、表3aによる。

黒土の上部には鬼界アカホヤ火山灰（以下K-Ahと記す）が混入する。黒土の全層と黒土直下の黄褐色土最上部まで姶良Tn火山灰（以下ATと記す）が混入する。ATが比較的に集中する層準は深さ60～80cmであり、この付近がATの降下期にあたると考える。ここでの表層堆積物は火山起源の結晶が多く含まれ風成層として堆積した地層である。黒土の下位から深さ2m付近までは黄褐色火山灰土である。含まれる砂粒は圧倒的に火山結晶が多く、内容が斜方輝石、単斜輝石、角閃石、かんらん石、コークス状火山岩片で、とくに、かんらん石とコークス状火山岩片は新期御嶽上部テフラに特有の鉱物である。したがって、黄褐色火山灰層は御嶽火山終末期の噴出物からなる風成層で、いわゆる赤土である。ここまでの地層は非持山扇状地が離水した後の被覆層にあたる。

深さ2.2mから黄褐色土中に結晶片岩の風化岩片が多くなり、さらに結晶片岩の角礫が入ってくる。扇状地上に上流から流れてきて堆積した黄褐色土である。2.4mより完全な礫層になる。

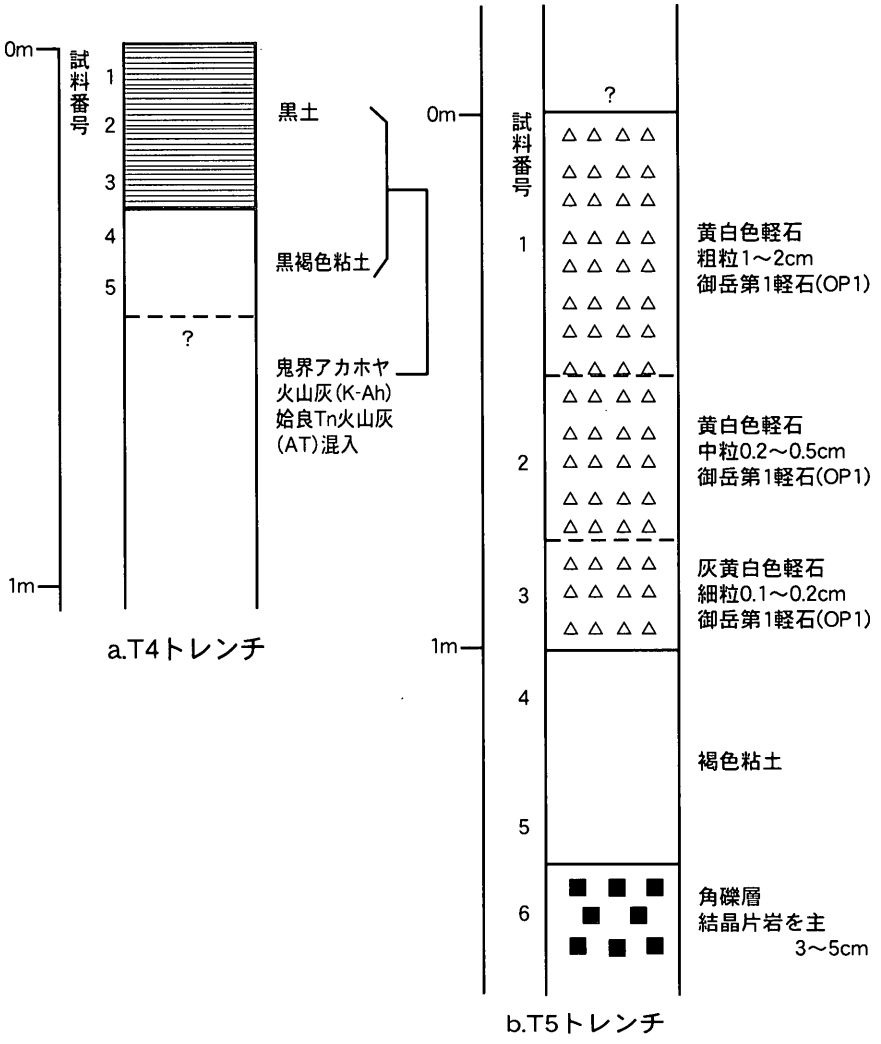
T4トレンチの位置は鹿塩沢に面した扇状地上で、T3とT4の間は馬の背状の高まりがある。T4トレンチの面を山室川に向かって追跡すると先端部ではT3面より低くなる。地形観察ではT3の面はT4の面より新しいことが明瞭である。以下第6図a、表3b、をもとに説明する。

T4トレンチは礫層の上に数10cmの黒土と黒褐色土を載せている。最上部の黒土部分にK-Ahが混入し、ATは黒土と黒褐色土共に混入する。黒土の上半部は風成層で、下半部と黒褐色土は再堆積性の地層である。



第5図　一本木地区T3トレンチ柱状断面図

T5トレンチの位置はT4に隣接していて、丸山と呼ばれる一段高い尾根状の頂上部である。第6図b、表3cを参照。水田耕作土を剥ぐといきなり御嶽第1軽石が現れた。軽石層は粘土化（カオリン）した白土の部分と、粘土化しなくて黄色の大きな軽石粒が残る部分もある。全体は黄白色を呈し、一目で第1軽石とわかる。厚さは1mに達し、柱状断面図に示したように上部は粗粒、中部は中粒、下部は細粒である。こうした逆級化は御嶽第1軽石層の特徴である。1mより下は褐色の粘土層で高森古土壌にあたる。風成層であるが火山起源ではない。氷期の寒冷気候下で裸地化した山地から飛散した風成塵と周辺山地からの風化岩片が再堆積した地層である。



第6図　一本木地区T4・T5トレンチ柱状断面図

表3　一本木地区トレンチ砂粒分析結果

a.T3　トレンチ砂粒分析結果

試料No	採取地点（cm）	産　状	火山結晶%	火山ガラス%	岩片他%	鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	0～20	黒土	50	10	40	mt,opx,ho,cpx,bi,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫風化岩片>AT·K-Ah
2	20～40	黒土	60	10	30	mt,opx,ho,cpx,bi,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫風化岩片>AT·K-Ah
3	40～60	黒土	60	12	28	opx,mt,ho,cpx,bi,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫風化岩片>AT·K-Ah
4	60～80	黄褐色土	60	12	28	opx,mt,ho,cpx,bi,fl,結晶片岩岩片	bw	御岳テフラ≫風化岩片>AT
5	80～100	黄褐色土	80	2	18	opx,mt,ho,cpx,bi,fl	bw	御岳テフラ≫風化岩片>AT
6	100～120	黄褐色土	85	0	15	opx,mt,ho,cpx,ol,fl,コークス状火山岩片、風化岩片		御岳上部テフラ>風化岩片
7	120～140	黄褐色土	90	0	10	opx,mt,ho,cpx,fl,コークス状火山岩片、風化岩片		御岳上部テフラ>風化岩片
8	140～160	黄褐色土	90	0	10	opx,mt,ho,cpx,fl,風化岩片		御岳上部テフラ>風化岩片
9	160～180	黄褐色土	85	0	15	opx,mt,ho,cpx,fl,コークス状火山岩片、風化岩片		御岳上部テフラ>風化岩片
10	180～200	黄褐色土	90	0	10	opx,mt,ho,cpx,ol,fl,コークス状火山岩片、風化岩片 ol目立		御岳上部テフラ>風化岩片
11	200～220	黄褐色土	70	0	30	mt,opx,ho,cpx,bi,ol,fl,風化岩片、コークス状火山岩片		風化岩片>御岳テフラ
12	220～240	黄褐色土	40	0	60	opx,mt,ho,fl,風化岩片、(結晶片岩)		風化岩片>御岳テフラ
13	240～	角礫	5	0	95	opx,mt,ho,fl,風化岩片、(結晶片岩)		風化岩片≫御岳テフラ

b.T4　トレンチ砂粒分析結果

試料No	採取地点（cm）	産　状	火　山結晶%	火　山ガラス%	岩片他%	鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	0～10	黒土	30	3	67	mt,opx,fl 風化岩片（結晶片岩）	bw	風化岩片>御岳テフラ>AT･K－Ah
2	10～20	黒土	30	5	65	mt,opx,fl 風化岩片（結晶片岩）	bw,br－gl pm	風化岩片>御岳テフラ>AT･K－Ah
3	20～30	黒土	10	2	88	mt,opx,ho,fl, 風化岩片（結晶片岩）	bw	風化岩片≫御岳テフラ≫AT
4	30～40	黒褐色土	5	2	93	mt,opx,fl 風化岩片（結晶片岩）	bw	風化岩片≫御岳テフラ≫AT
5	40～50	黒褐色土	3	1	96	mt,opx,fl 風化岩片（結晶片岩）	bw	風化岩片≫御岳テフラ≫AT

c.T5　トレンチ砂粒分析結果

試料No	採取地点（cm）	産　状	火　山結晶%	火　山ガラス%	岩片他%	鉱物・岩片等	火山ガラスの形態他	特徴・対比その他
1	0～50	黄白色軽石	98	2	0	ho,mt,bi,fl,qt	pm(spo)	御岳第１軽石(On－Pml)
2	50～80	黄白色軽石	95	0	5	ho,mt,bi,fl,qt, 火山岩片		御岳第１軽石(On－Pml)
3	80～100	灰黄白色軽石	10	0	90	灰色火山岩片≫ mt,ho,ve,結晶片岩なし		御岳第１軽石(On－Pml)
4	100～120	褐色粘土	2	0	98	風化岩片≫ mt,ho,結晶片岩少ない		
5	120～140	褐色粘土	2	0	98	風化岩片≫ mt,ho,結晶片岩多い		東方山地の基盤岩風化岩片
6	140～	礫層マトリックス	2	0	98	風化岩片≫ mt,ho,結晶片岩多い		東方山地の基盤岩風化岩片

凡　例
鉱物・岩片等　opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ol：かんらん石，mt：磁鉄鉱，ho：角閃石，bi：黒雲母，
ve：バーミキュライト，fl：長石，qt：石英，β－qt：高温石英，ob：黒曜石
火山ガラスの形態他　bw：泡壁型，pm：軽石型(fib：ファイバー型，spo：スポンジ型)，br-gl：褐色ガラス

3　非持山扇状地ができるまでと、段丘化の過程

非持山扇状地は鹿塩沢がその末端で山室川と合流する地点を扇端として、鹿塩沢に沿って長さ２kmに達する大きな扇状地である。地形は県道より下が開析されて段丘化しており、全域が水田である。県道より上は非持山集落がある場所で鹿塩沢の谷を埋める扇状地が広がり開析はあまり進んでいない。

県道より上の鹿塩沢左岸の山麓部には鹿塩沢と平行するように荒神沢がある。荒神沢より山よりの山麓部に小規模な丘陵が付いている。その上には御嶽第１軽石や伊那軽石が載っており、その下に風化礫層がある。県道の直上の丘陵先端部が一番広い面積で残っており、その上流側に３地点存在する。御嶽第１軽石の下にある礫層は非持山で最初にできた扇状地を示している。その後の侵食で分断され、一部分が丘陵面として残っている。

丘陵面の次に、鹿塩沢末端に広い扇状地が発達した。これが現在の非持山扇状地の主体をつくった。ここが離水して風成の高森古土壌や御嶽第1軽石を載せた。これ以後は、また扇状地が侵食される。三度、扇状地の拡大が始まりT1トレンチの下ノ中原面やT3トレンチの一本木面が形成された。その後、小規模侵食期があって、また、扇状地の拡大期を迎えてできた面は、テフラを欠き黒土だけを載せる扇状地をつくった。その後は全域が侵食され鹿塩沢や山室川による顕著な掘り下げが始まり、複数の段丘面ができた。

4　扇状地の消長は気候変動による

非持山扇状地を構成する砂礫層はすべて鹿塩沢上流から運び出された三波川結晶片岩類と御荷鉾緑色岩類である。しかも、角礫で不淘汰礫であり、一気に押し出された土石流堆積物である。急激に砂礫が供給される原因は鹿塩沢の上流部で岩屑の生産が顕著であったことによる。気候の寒冷化によって植生が失われ、裸地化した結果である。一方、扇状地が侵食解体されるのは気候の温暖化による植生の復活と、降水

量の増加による侵食力の復活である。こうした繰り返しが少なくとも4回あったことが読み取れる。

最初の扇状地拡大は第３図の６ｃ面にあたる山麓面の形成である。次の扇状地拡大は第３図の６ｂ面であり、このときの扇状地拡大が一番大きかった。その年代は高森古土壌より前であるから14～15万年前であり、酸素同位体ステージ６の氷期にあたる。３回目の拡大は図３の４ａ面を形成した時期で、５～６万年前でステージ４にあたる。５回目の拡大は図３の２ｂ、２ａ面の形成で、1.5～３万年前でステージ２の最終氷期にあたる。なお、この間の地盤運動は継続的に隆起上昇していた。現在は温暖期にあたる侵食の時代である。

第３節　歴史的環境

下ノ中原遺跡

「下ノ中原」の地名を村内外にある史料から検証してみると、元禄３年御検地水帳（1690）によれば、中原という地名が記載されている。現在の通称「下ノ中原」は現代（明治以後）の俗称である。中世の地名は史料がないので不詳である。当該地の非持山集落の最北に位置し「ツッパリ沢」を境とし高遠町三義地区になる、「鹿塩沢」、「山室川」に挟まれた地域であり10万年前頃すでに土砂の沈殿するところとなり、やや南西に面している。鹿塩沢に面した遺跡エリア外に涌水がみえる。建武３年（1336）非持山集落の玄立寺は天台宗であったが、後・永禄８年（1565）日蓮宗に改めたという。興国５年（1344）春・天台座主であった宗良親王はこの地を経て伊那郡大河原へ寄留したという。山室川、鹿塩沢の度々の氾濫にこの地の住民は東方の山沿いに移住したものと考えられる。

一本木遺跡

非持山集落の西方標高834.7m付近、荒神沢北側14,000㎡範囲の地域にして平成11年春長谷村内の遺跡分布調査によって再発見された遺跡である。北側に説話による比丘長者屋敷だといわれる丸山と言われる場所がある。中世の頃の鹿塩道の上部にこの遺跡があり、非持集落との境になる細沢沿いの道を経て駒形社（以前は森の中にあった）に至る。この社の祭神は白山氏女命（加賀国「石川県」尾口村の白山比咩神社の祭神は白山比咩命）この神は中国江南地方から朝鮮半島を経て出雲への渡来人の祖ではないかと言う説もあり、また非持検校も渡来したと言う説もあることから、５世紀頃かそれ以前に日本に渡来し縄文人に融合し入野谷人になったとも考えられる。ともかくこの遺跡から出土した９世紀の墨書土器、14世紀頃の内耳土器、15世紀頃の天目茶碗の破片など庶民でない階級の人々が住んでいたことが考えられる。縄文時代早期の約8,000年前の押型文土器破片など発見されていることから人々が暮らすには良い環境の土地であったと考えられる。

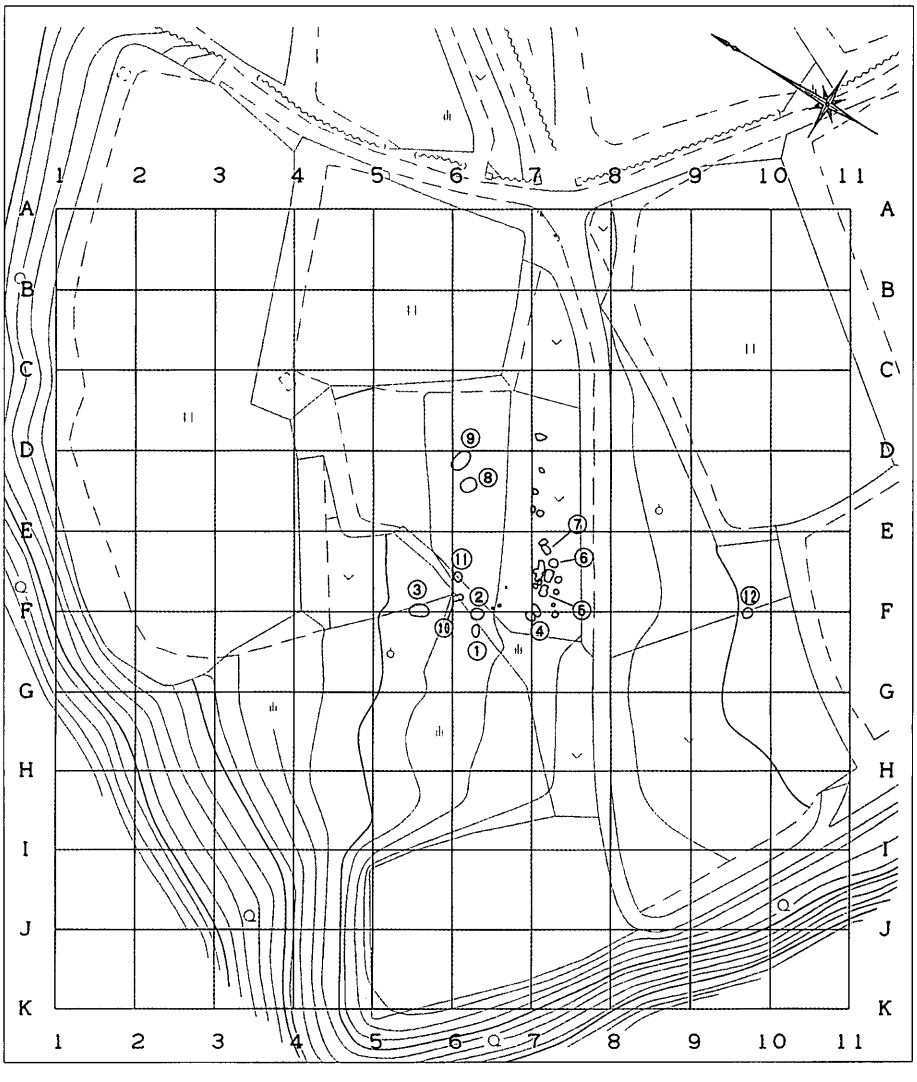
第３章　遺構と遺物

第１節　調査の概要

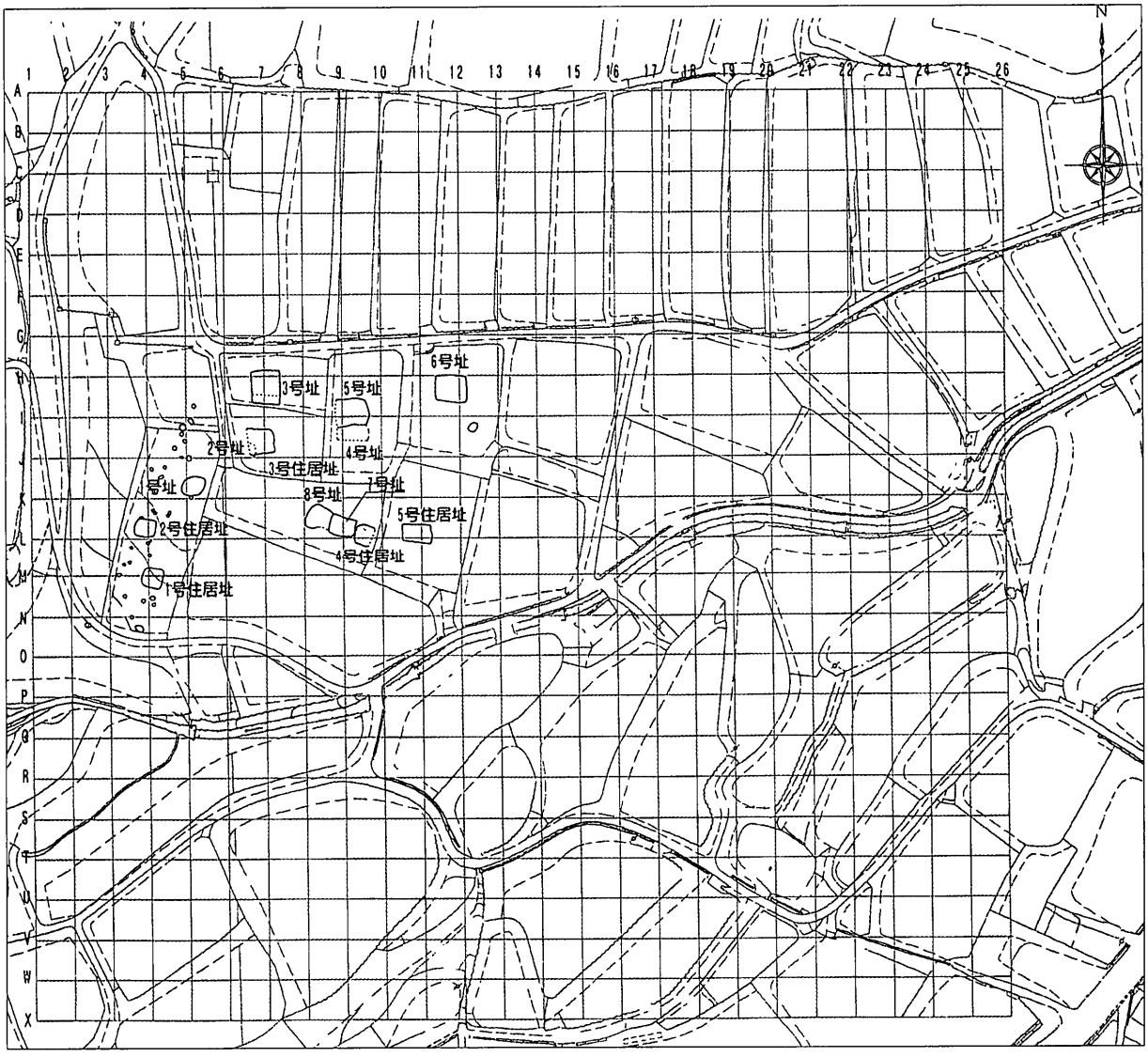
今回の調査は、県営圃場整備事業担い手育成型非持山地区下ノ中原工事及び一本木工事に伴う埋蔵文化財記録保存のため、実施した調査である。調査地は、下ノ中原遺跡については長野県上伊那郡長谷村大字非持3389-1付近の地区、一本木遺跡については長野県上伊那郡長谷村大字非持2262-1付近の地区が調査の対象となった。

調査は、下ノ中原遺跡については平成12年７月24日から７月28日まで実施した。実施面積は約2,000㎡である。一本木遺跡については平成12年10月25日から11月25日まで実施した。実施面積は約14,000㎡である。

両遺跡とも事前調査として巾２ｍのトレンチを設け試掘を行い、その結果により本調査を実施した。本発掘で調査された遺構は、下ノ中原遺跡については土壙12基であった。また、縄文時代の石器３点の遺物を回収することができた。一本木遺跡については縄文時代の住居址２軒、平安時代の住居址４軒、平安時代の建物址３軒、中世の掘立建物址５軒であった。また、縄文時代の土器片他318点の遺物を回収することができた。



第７図　下ノ中原遺跡遺構分布図



第８図　一本木遺跡遺構分布図

第２節　遺構と遺物

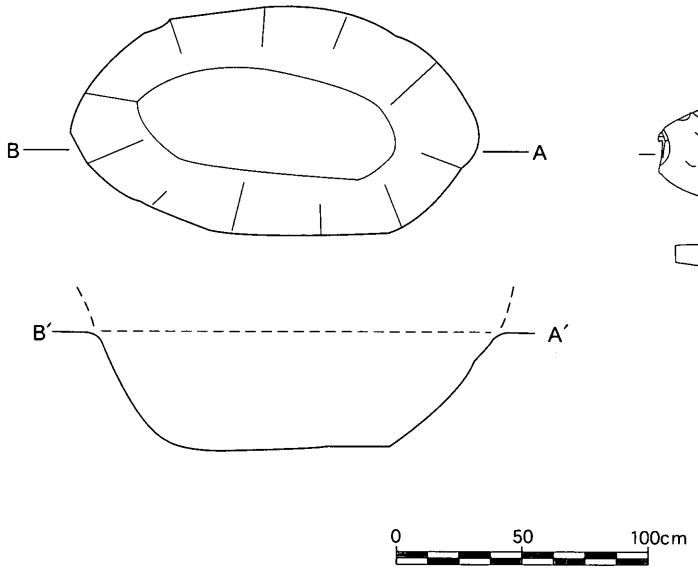
（１）下ノ中原遺跡

第１号土壙（第９図・図版１上）

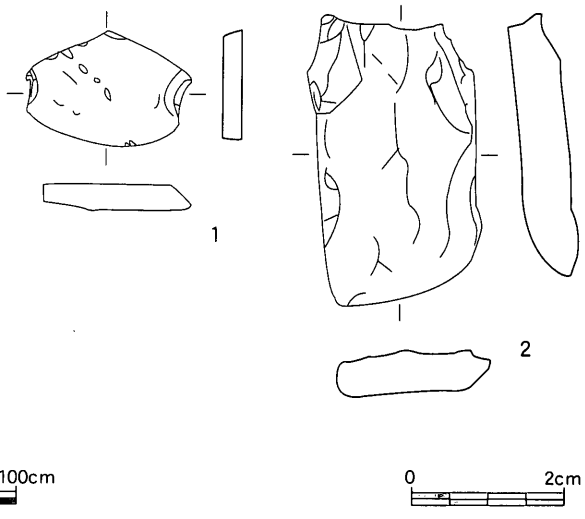
本遺構は、調査区第1号トレンチF-7メッシュに発見された遺構である。耕作土（赤褐色土）を剥ぐと土壙の輪郭が明らかになった。その規模は長径165cm、短径90cm、深さ40cmを測る。

遺物（第10図・図版12上）

１は石垂（小型で緑色岩）、２は打製石斧で緑色岩



第９図　第１号土壙実測図



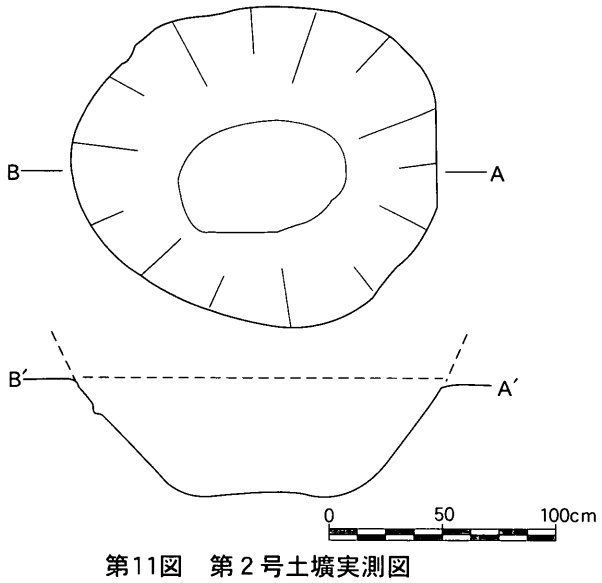
第10図　第１号土壙石器実測図

第２号土壙（第11図・図版１中）

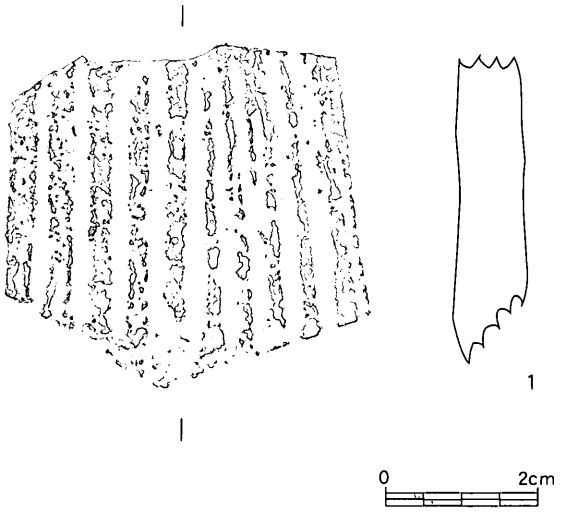
本遺構は、第１号土壙に接していた。調査区第１号トレンチＦ-６メッシュに発見された遺構で、その規模は長径166cm、短径142cm、深さ49cmを測る。

土器（第12図・図版12上）

１は並行沈線文の曽利Ⅱ式土器。



第11図　第２号土壙実測図

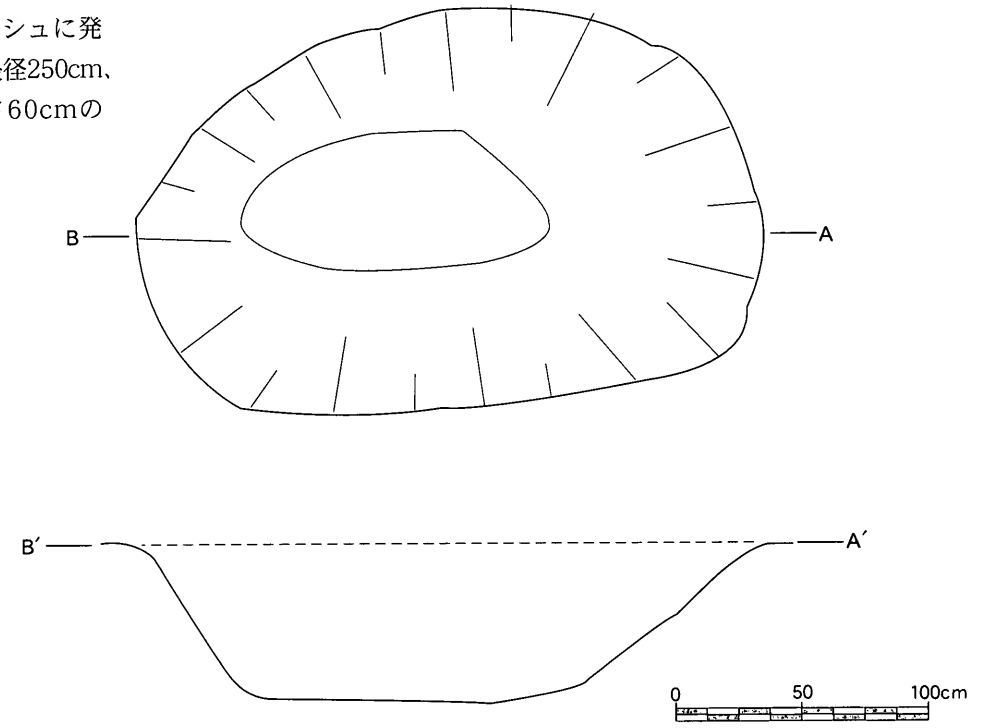


第12図　第２号土壙遺物拓影実測図

第３号土壙

（第13図・図版１下）

本遺構は、調査区第４号トレンチＦ-６メッシュに発見された遺構で、長径250cm、短径152cm、深さ60cmの土壙である。

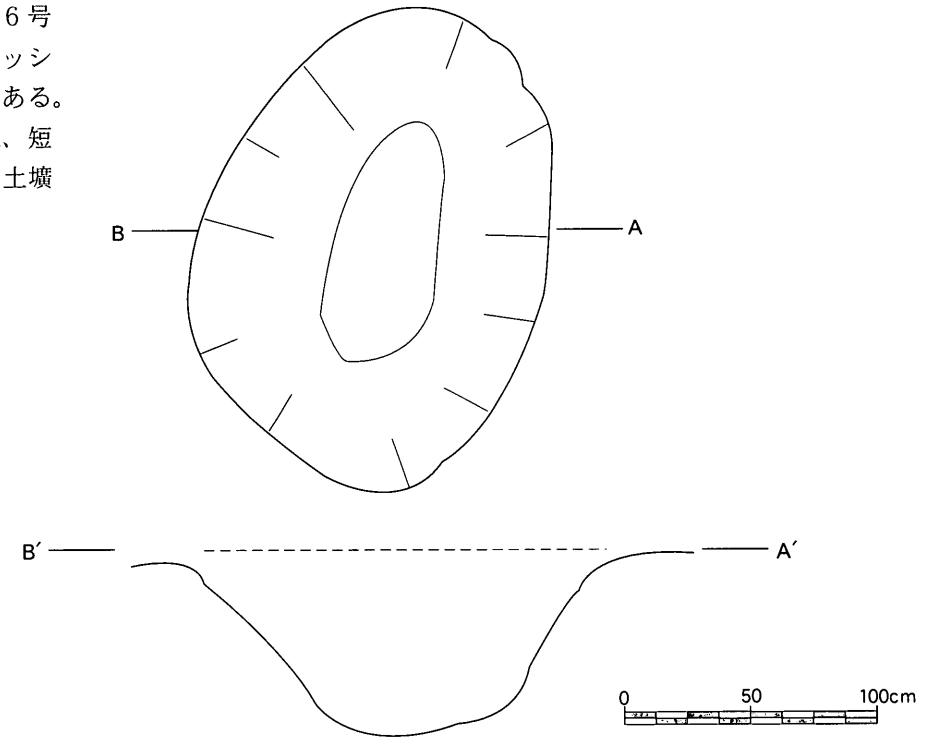


第13図　第３号土壙実測図

第４号土壙

（第14図・図版２上）

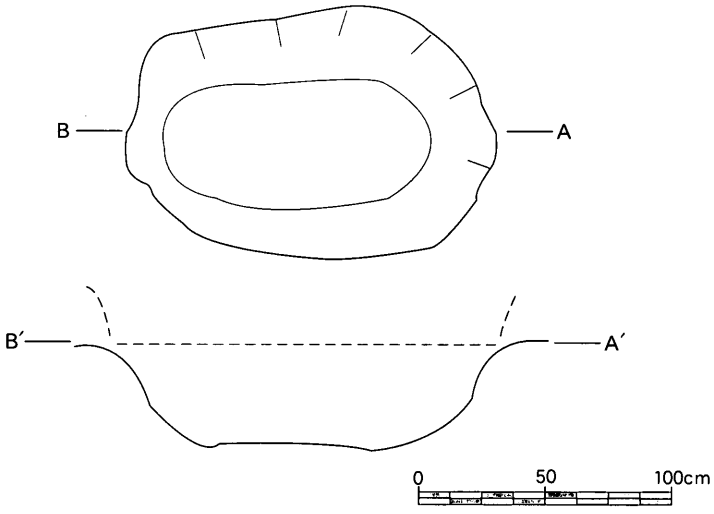
本遺構は、調査区第６号トレンチＦ・Ｇ-７のメッシュに発見された遺構である。その規模は長径133cm、短径98cm、深さ47cmの土壙である。



第14図　第４号土壙実測図

第５号土壙（第15図・図版２中）

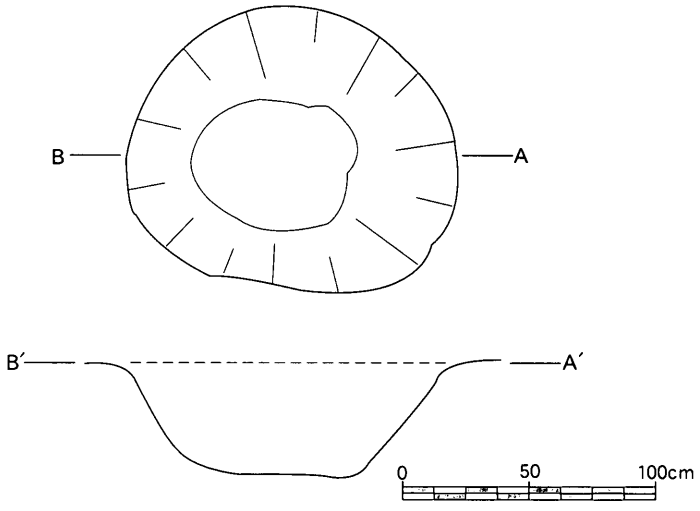
本遺構は、調査区第６号トレンチのE-7メッシュに発見された遺構である。その規模は長径148cm、短径108cm、深さ40cmの土壙である。



第15図　第５号土壙実測図

第６号土壙（第16図・図版２下）

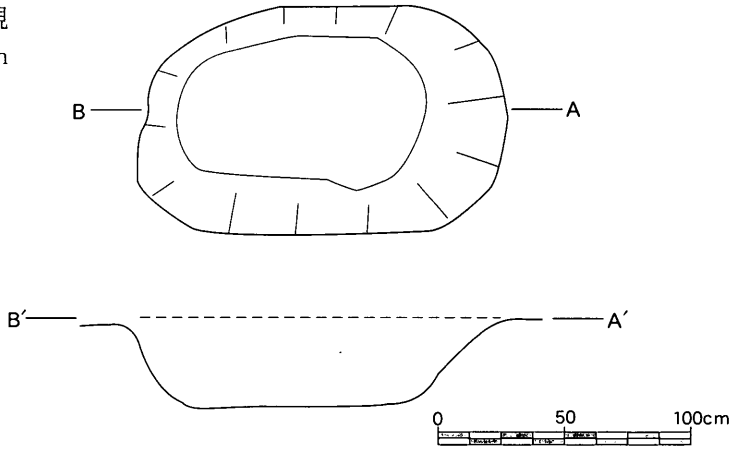
本遺構は、調査区第６号トレンチのE-7メッシュに発見された土壙である。土壙の規模は、長径120cm、短径100cm、深さ40cmの土壙である。



第16図　第６号土壙実測図

第７号土壙（第17図・図版３上）

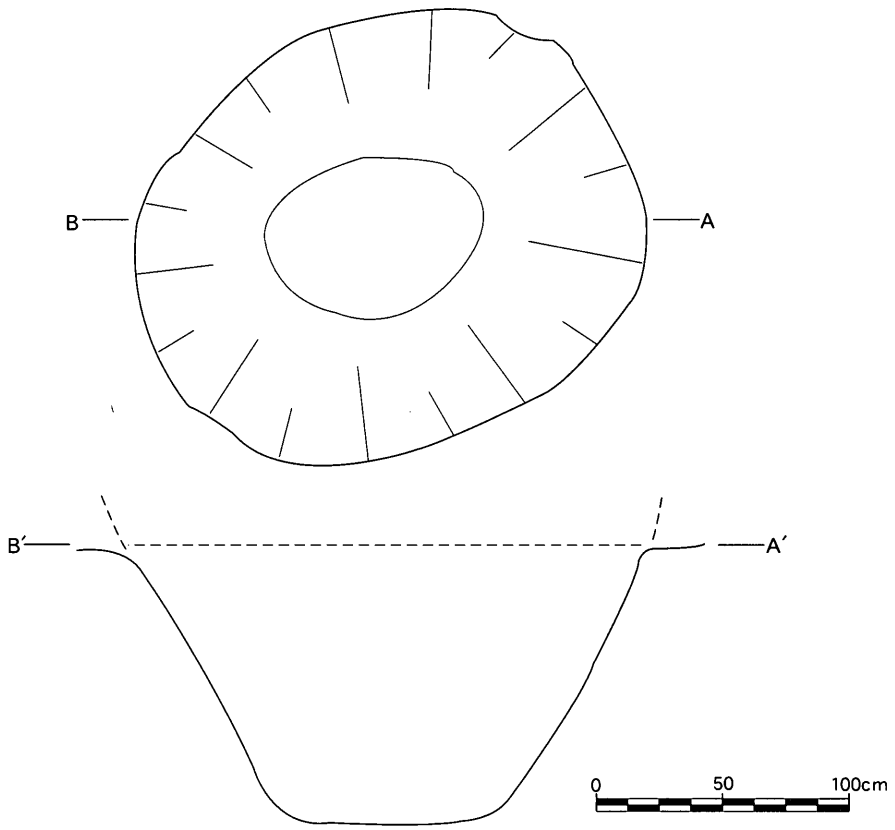
本遺構は、調査区第６号トレンチのE-7メッシュに発見された土壙である。その規模は長径130cm、短径80cm、深さ30cmの土壙である。



第17図　第７号土壙実測図

第８号土壙
（第18図・図版３中）

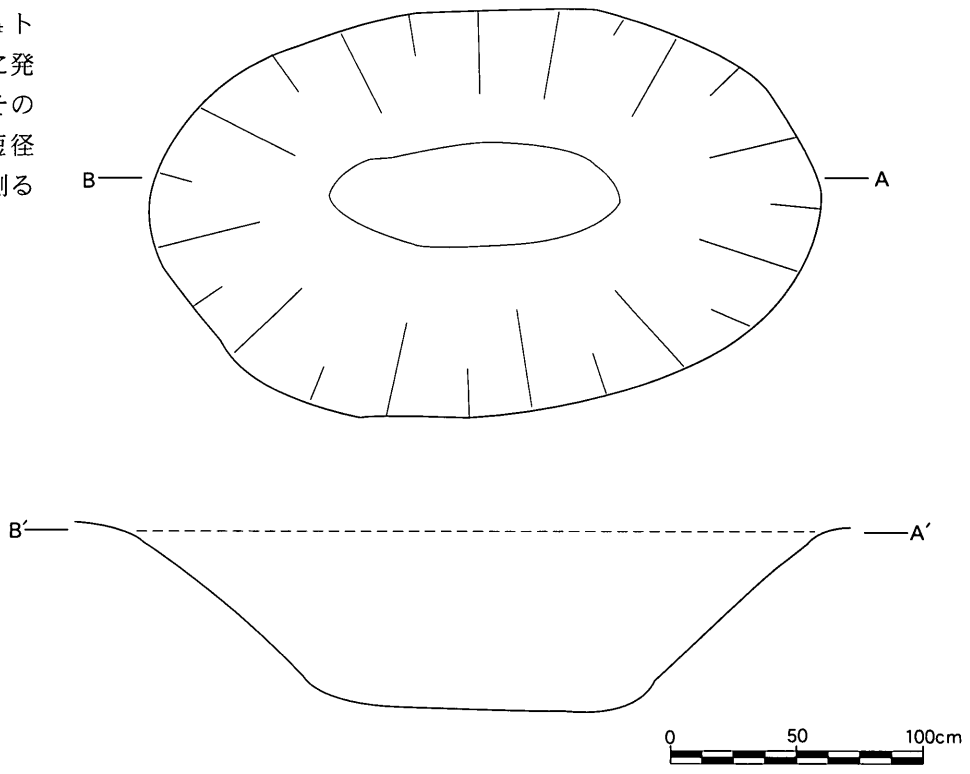
本遺構は、調査区第４トレンチのD-6メッシュに発見された土壙である。その規模は長径200cm、短径170cm、深さ100cmを測る楕円形のの土壙である。



第18図　第８号土壙実測図

第９号土壙
（第19図・図版３下）

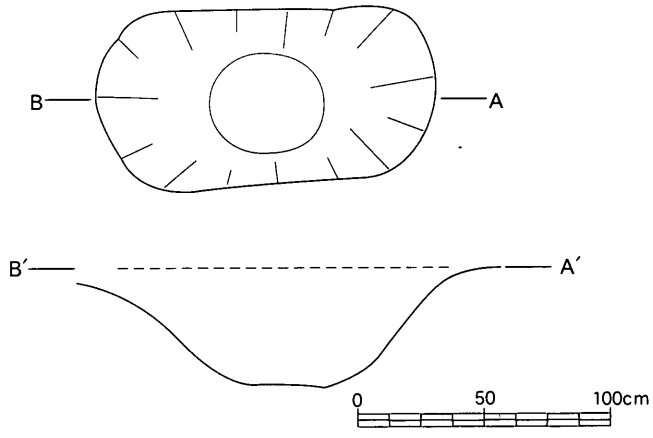
本遺構は、調査区第４トレンチのD-6メッシュに発見された土壙である。その規模は長径280cm、短径170cm、深さ75cmを測る楕円形の土壙である。



第19図　第９号土壙実測図

第10号土壙（第20図・図版４上）

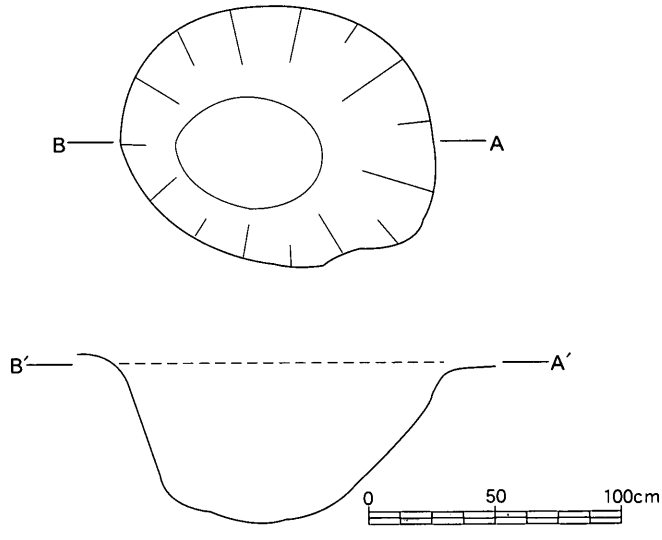
本遺構は、調査区第４号トレンチのE-6メッシュに発見された遺構である。その規模は長径135cm、短径70cm、深さ44cmの土壙である。



第20図　第10号土壙実測図

第11号土壙（第21図・図版４中）

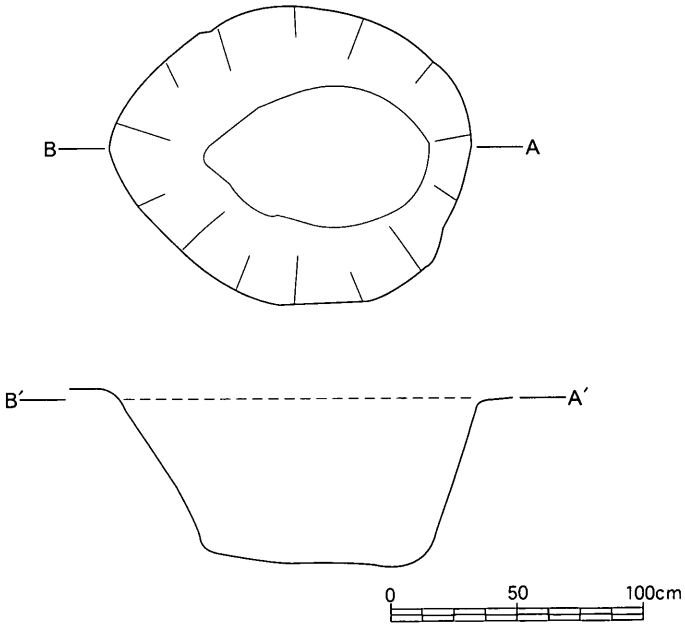
本遺構は、調査区第4、5号トレンチのE-6メッシュに発見された遺構である。その規模は長径125cm、短径100cm、深さ64cmを測る土壙である。



第21図　第11号土壙実測図

第12号土壙（第22図・図版４下）

本遺構は、調査区第１号トレンチの東端、第10号トレンチとの交差地点に発見された土壙である。その規模は長径162cm、短径119cm、深さ68cmを測る土壙である。



第22図　第12号土壙実測図

（２）一本木遺跡

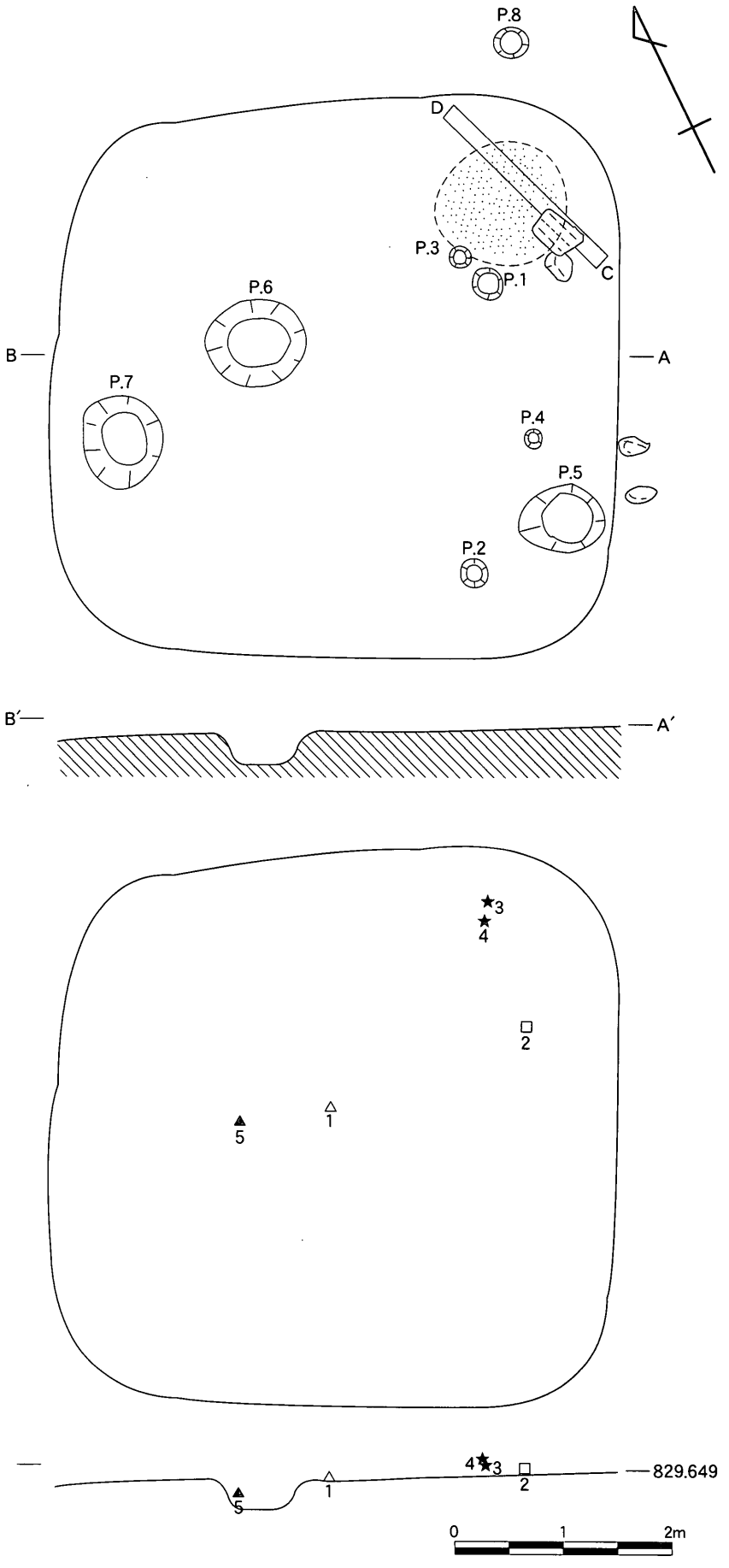
第１号住居址

（第23図・図版５上）

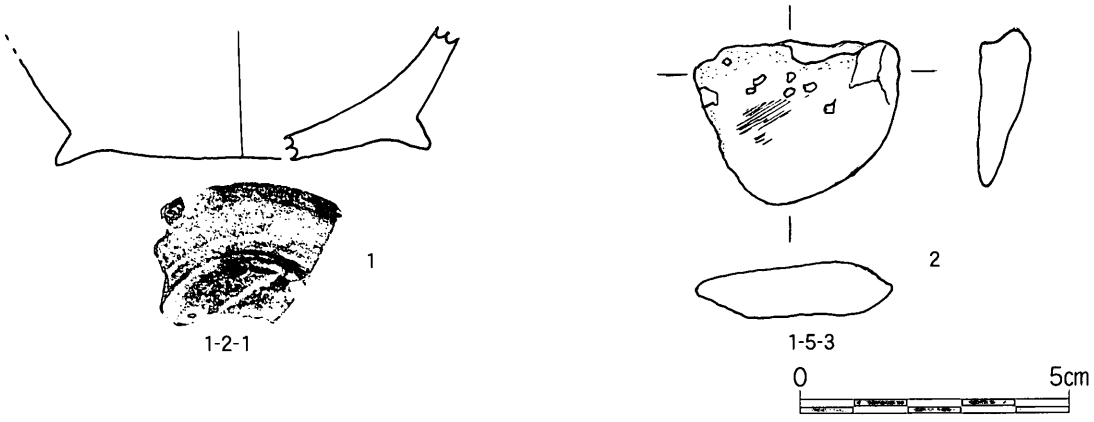
本址は遺構分布図Ｎ・Ｍ-３・４に発見された遺構である。本址の規模は東西5.3m、南北5.0m、深さはこれまでの改田工事で表面を剥ぎ取られ、わずかに残す程度であった。よって壁面は不明である。床面は一部認められた。Ｐ.1、Ｐ.2、Ｐ.4は主柱穴で、大きさは径20～30cmあり、柱穴と柱穴の間は1.5m、その他は不明であるが、土壙かと考えられる穴が、Ｐ.5、Ｐ.6、Ｐ.7とあった。大きさは80cm程度あった。その他に径80～100cmの石芯粘土窯があった。このことから平安の住居址と考えられる。

遺物（第24図・図版12下）

１は高台付きの灰釉陶器。台を付けた後に削った陶器で、時期は平安時代。２は打製石器の先。



第23図　第１号住居址実測図・遺物分布図



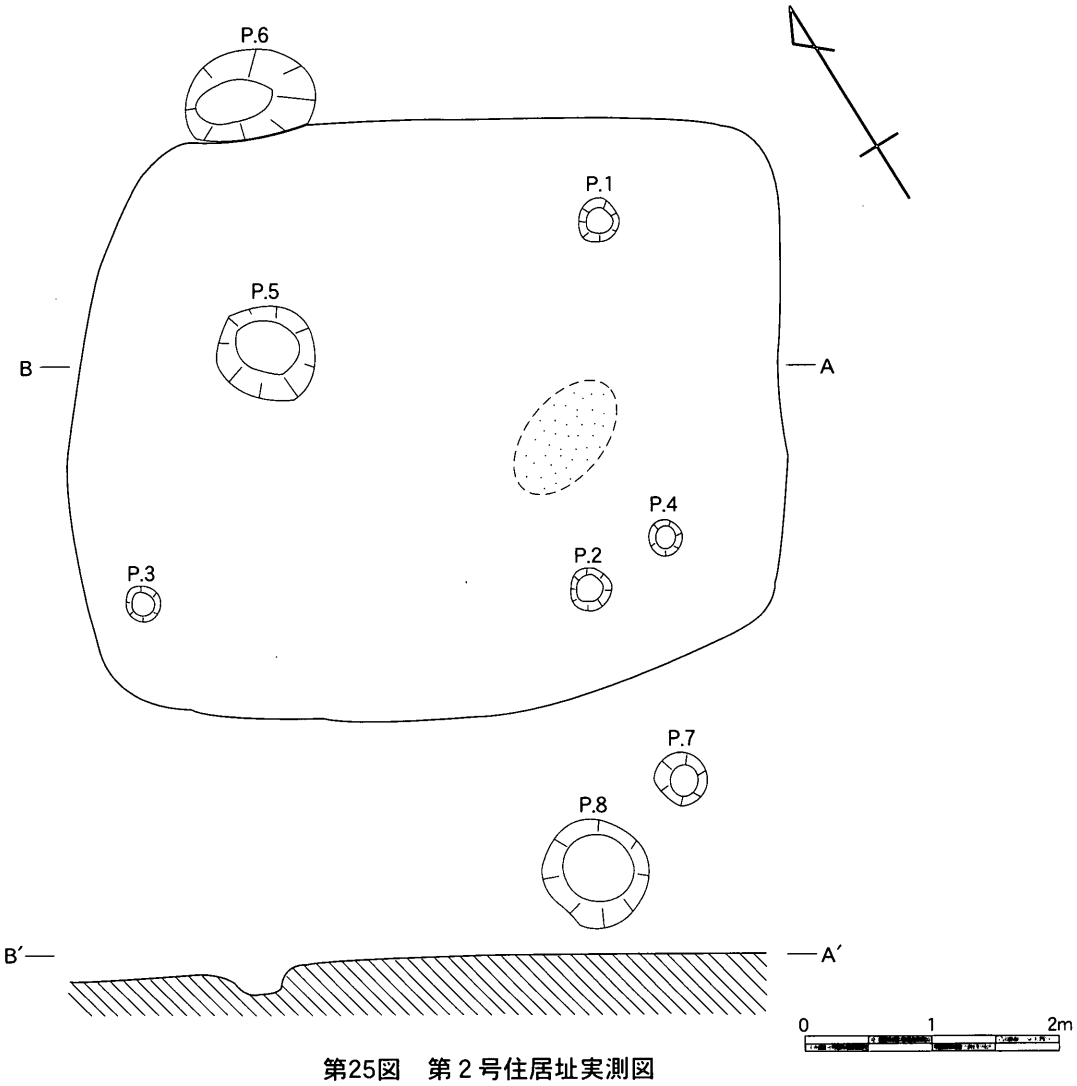
第24図　第１号住居址遺物実測図

第２号住居址（第25、26図・図版５下）

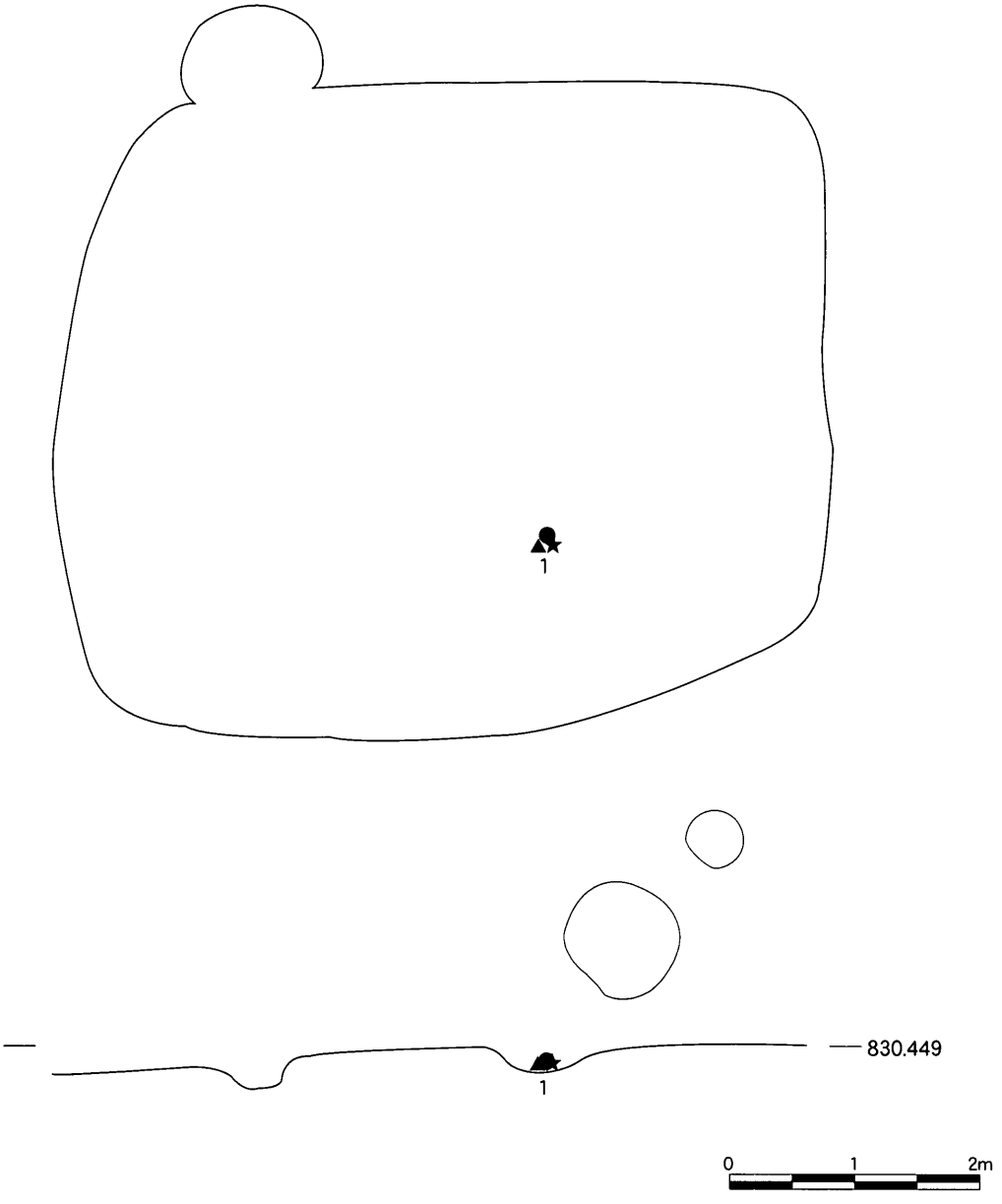
本址は遺構分布図K-４・５に発見された遺構である。本址の規模は、東西5.4m、南北4.4mの楕円形。柱穴と考えられるのはP.１、P.２、P.３、P.４、P.７で、P.５とP.６は土壙ではないかと考えられる。本址の床面と考えられるものは殆ど残っていなかった。本址の中央部に焼土がわずかに認められたため、縄文中期後葉の住居址と考えられる。

遺物（第27図・図版12下）

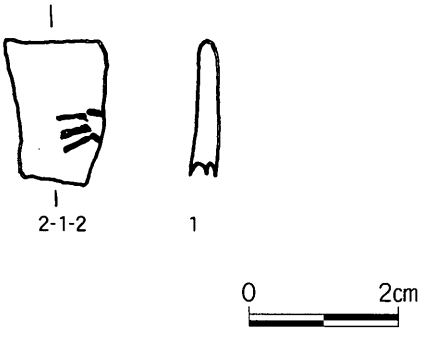
１は染付けの陶器、時期は江戸時代か。



第25図　第２号住居址実測図

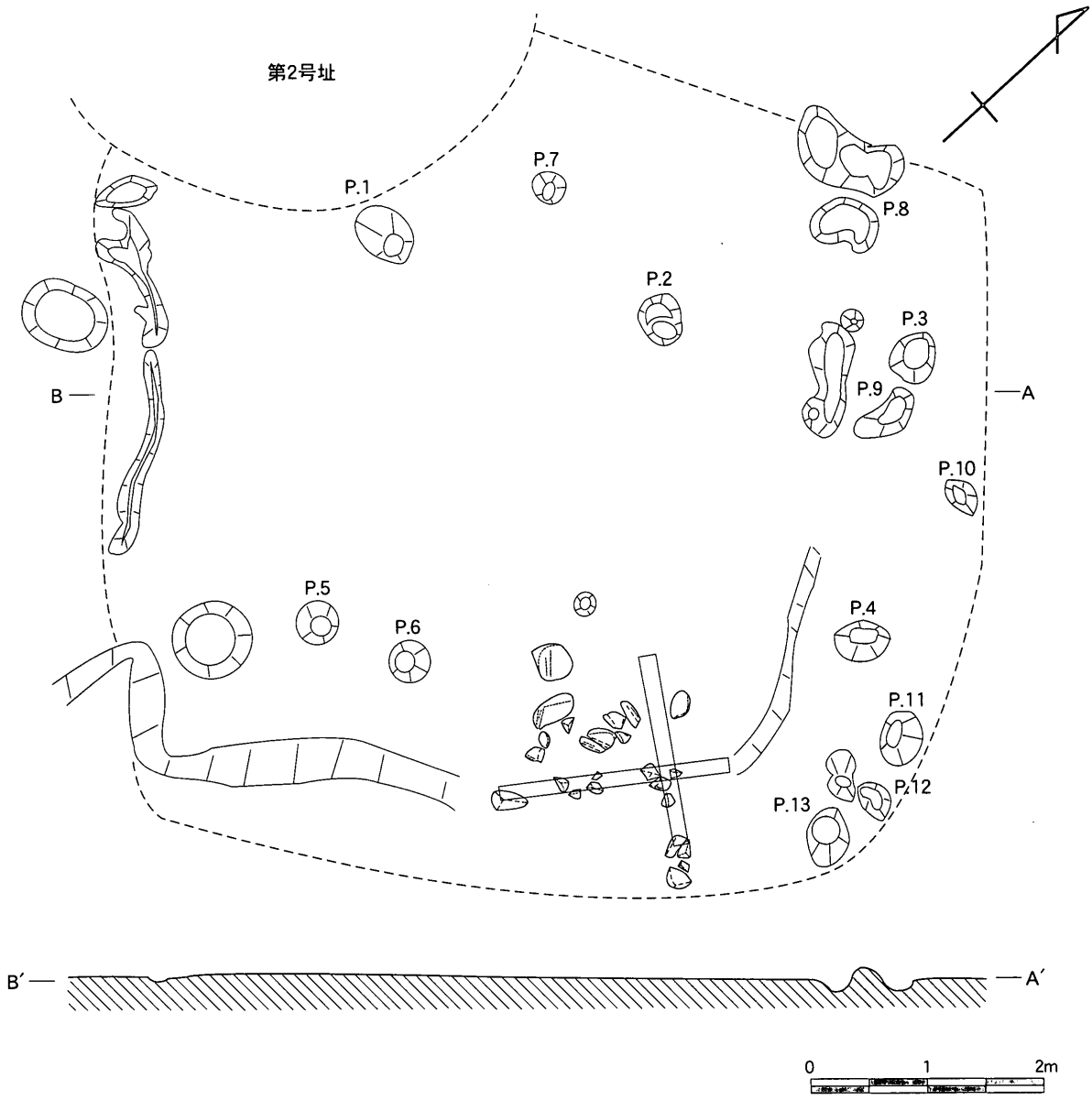


第26図　第２号住居址遺物分布図



第27図　第２号住居址遺物実測図

第３号住居址（第28、29図・図版６上）

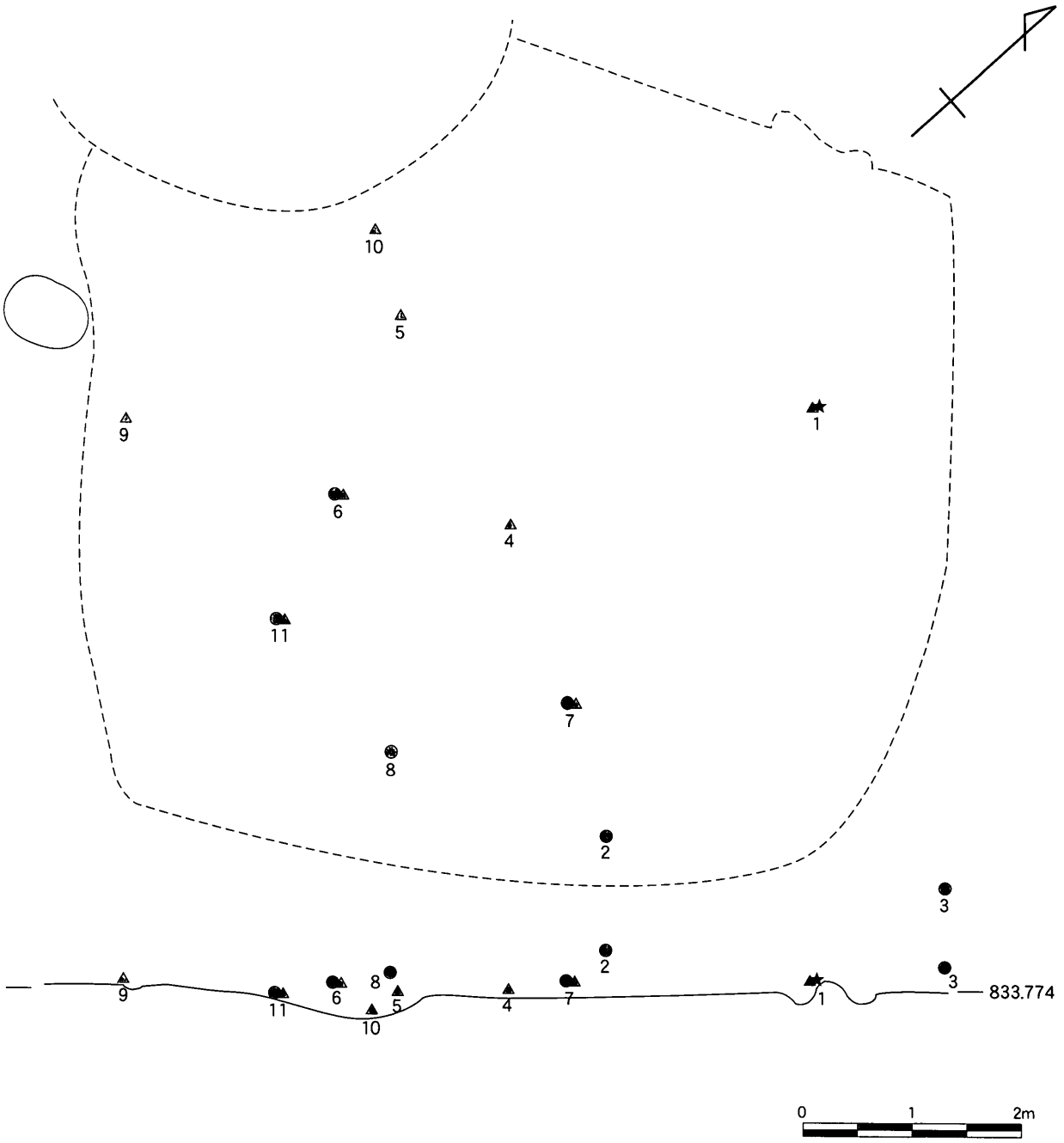


第28図　第３号住居址実測図

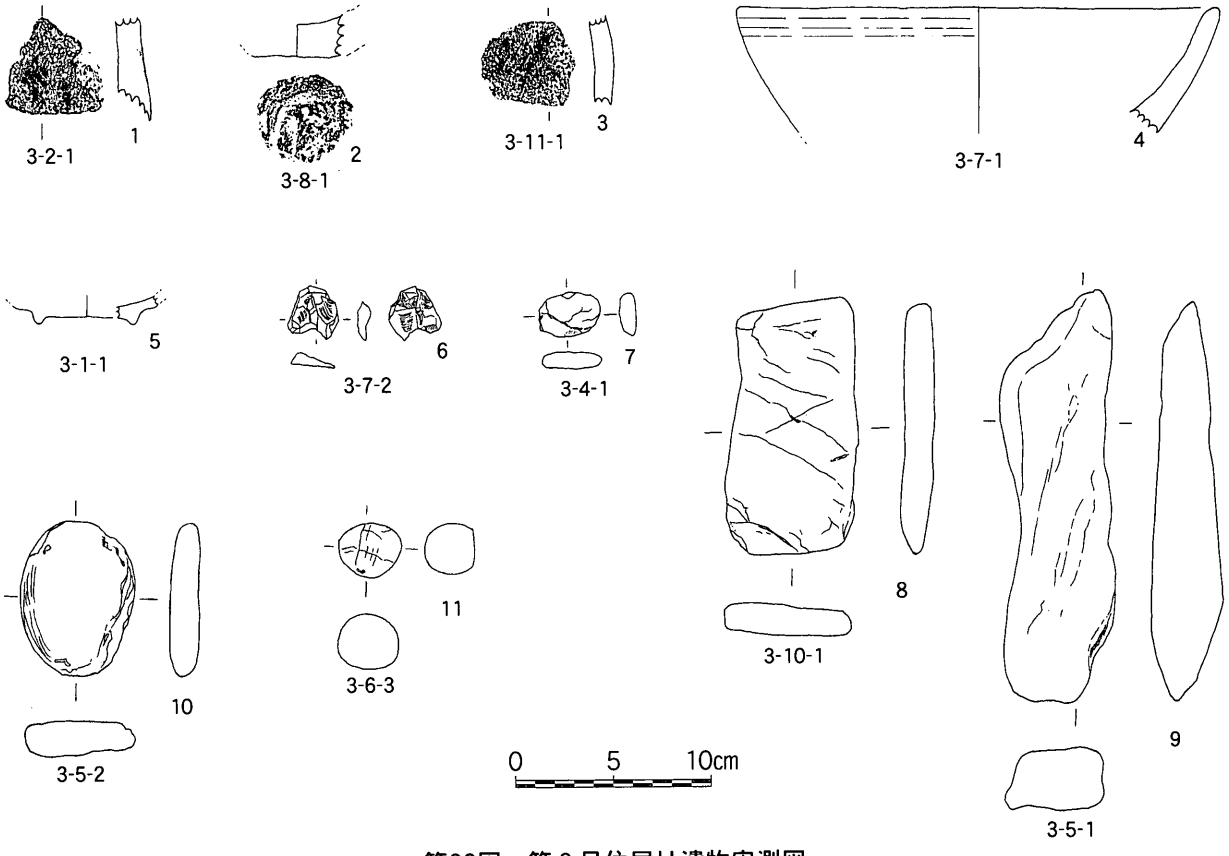
本址は遺構分布図Ⅰ・Ｊ-７に発見された平安時代の遺構である。本址の規模は大型であり東７～８m、南北７～８mと考えられる。本址の主柱穴はP.１、P.２、P.３、P.４、P.５ではないかと考えられる。また本址には南東の位置に窯が残存していた。この窯は１～２mの石芯粘土窯であったため、平安の住居址と考えられる。

遺物（第30図・図版12下）

１は縄文中期後葉の土器。２は土器の底部、穀物らしきものの痕がみられる。時期は弥生時代。３はかき目痕と思われる、時期は不明。４は浅鉢である、時期は不明。５は染付けの陶器、時期は江戸時代。６は黒曜石の石鏃。７は石灰石の石。８は打製石器。９は打製石斧。10はすり石。11は玉石。



第29図　第３号住居址遺物分布図



第30図　第３号住居址遺物実測図

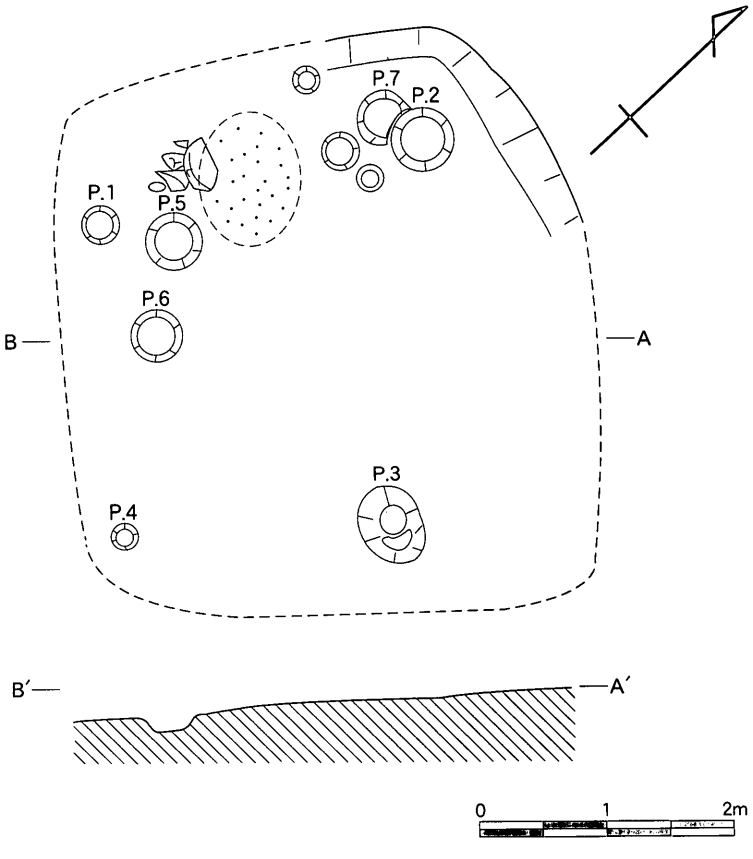
第４号住居址

（第31、32図・図版６下）

本址は遺構分布図Ｌ-９・10に発見された平安時代の遺構である。本址の規模は東西4.3m、南北4.5mを測る。そのうち、北角にわずかに壁面が残っていた。本址の窯はＰ.１のところに発見された石芯粘土窯であった。本遺構の主柱穴はＰ.１、Ｐ.２、Ｐ.３、Ｐ.４が主柱穴と考えられる。その径は20～30cmが主である。その他は補助穴と考えられる。

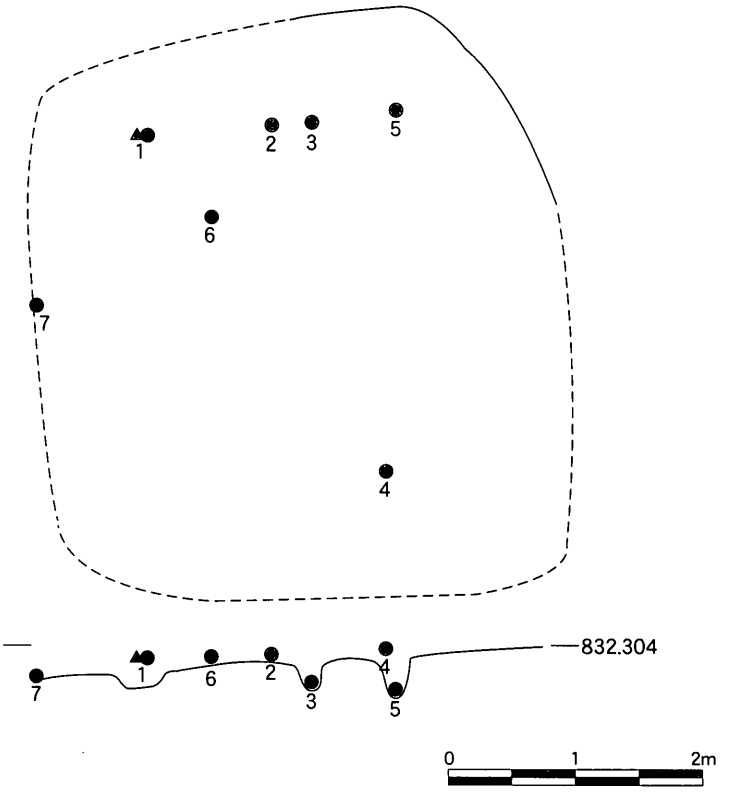
遺物（第33図・図版13上）

１は斜縄文の縄文中期後葉頃の土器。２は縦横に沈線文の縄文土器。３は土師のかき目土器。４は土師器の口縁部、口径17cmを測る、かき目痕が見られる。５は４と同様の土器、口径17cmを測る。６は土師器皿、口径13cmを測る。７は内黒の土師器、口径14.5cmを測る。８は内黒の土

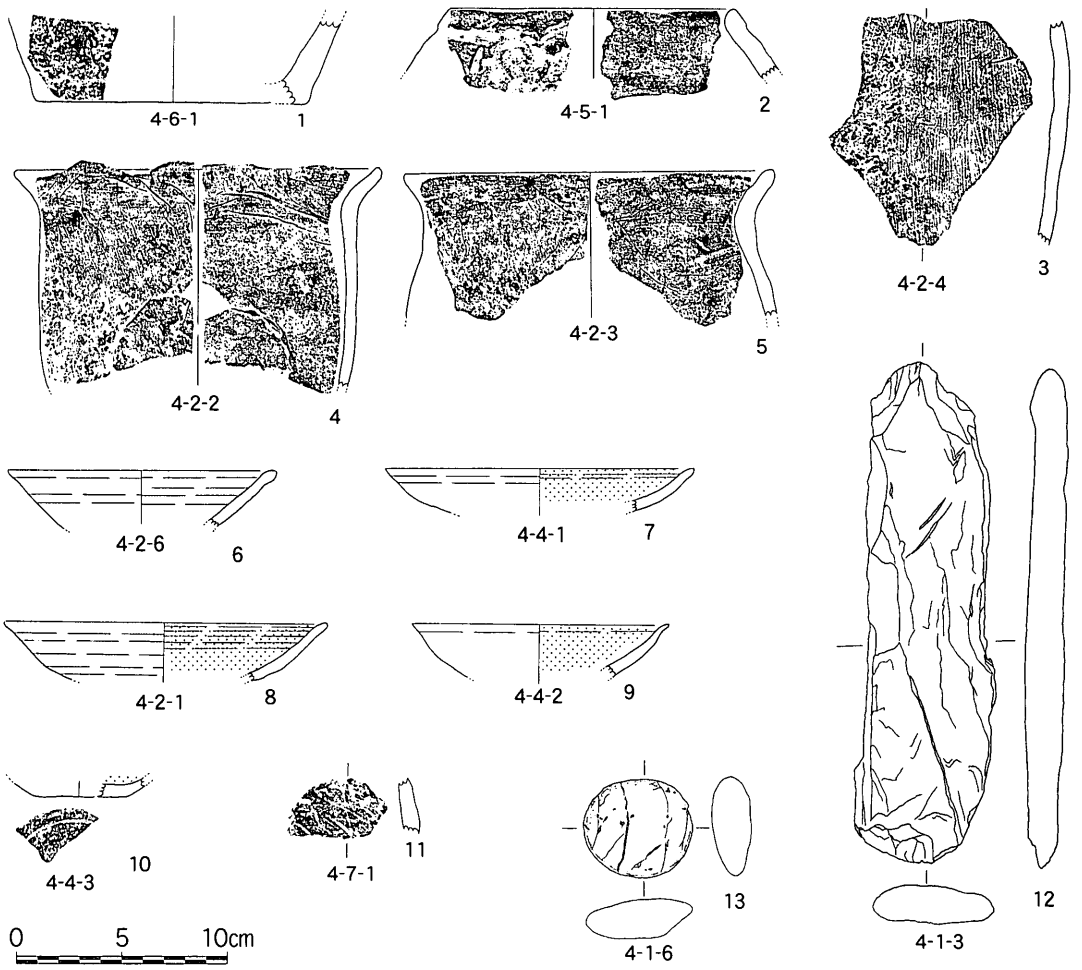


第31図　第４号住居址実測図

師器、口径15cmを測る。9は内黒の土師器、口径12cmを測る。10は内黒の土師器の底部。以上3～10の時期は平安時代。11は斜こん土器、時期は不明。12は石質不明の打製石斧。13は硬砂岩のすり石。



第32図　第４号住居址遺物分布図



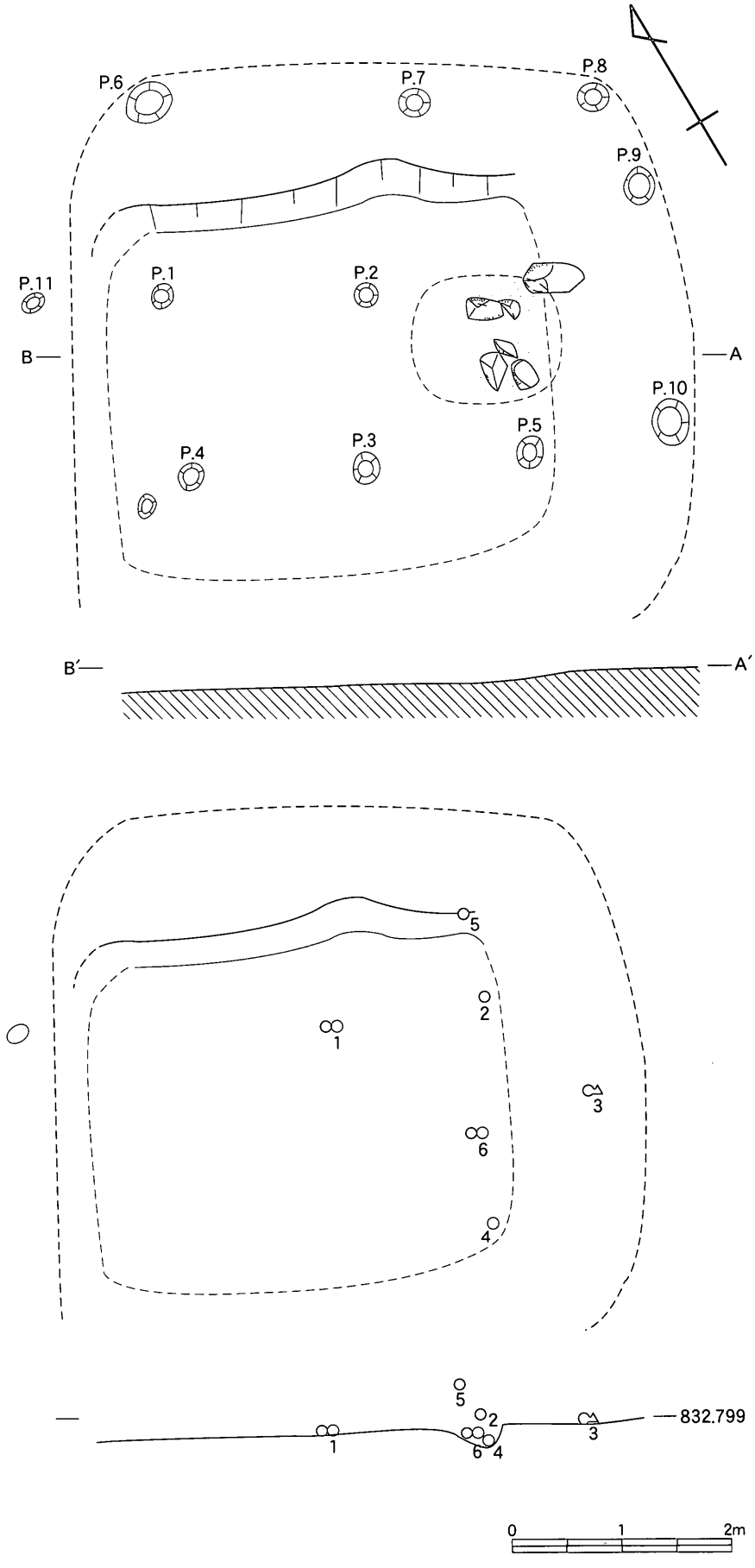
第33図　第４号住居址遺物実測図

第５号住居址
（第34図・図版７上）

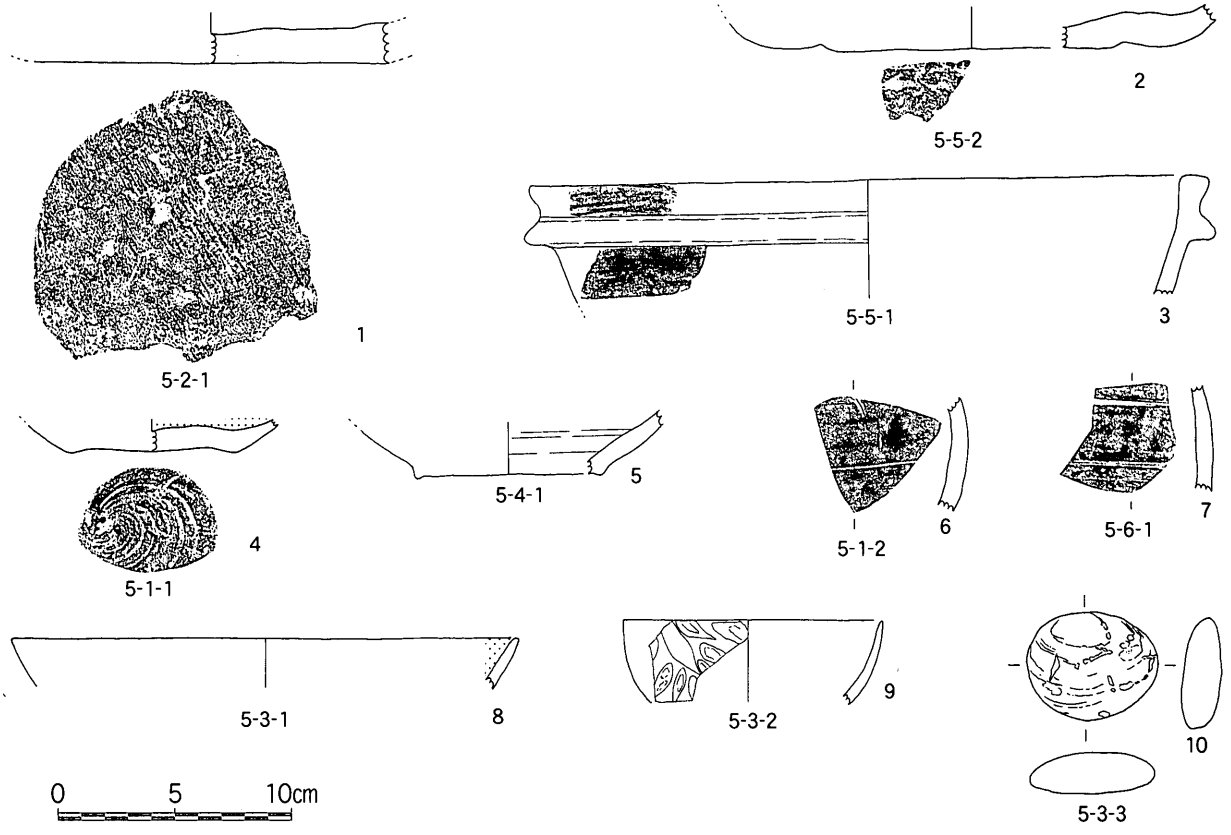
本址は遺構分布図のＬ-11に発見された平安時代の遺構である。本址の規模は東西5.7m、南北５m内外と考えられる。本址も土地改良工事のため壁は殆ど残らなかったが、一部北側に残っている。その壁には特別なものは無かった。床面には東に大きさ約１mの石芯粘土窯があり、本址の主柱穴はＰ.1、Ｐ.2、Ｐ.3、Ｐ.4と考えられる。本址の外側にはＰ.５～Ｐ.10の母屋柱の穴が残っていた。

遺物（第35図・図版13下）

１は甕の底部、穀物の實の痕が見られる。時期は不明。２は甕の底部、文様、時期共に不明。３は隆帯のある土器、時期は縄文時代中期後葉か。４は内黒の土師器の底部、横切れの糸切痕。時期は平安時代頃。５は須恵器の皿の底。時期は奈良～平安時代頃。6は須恵器で器種不明。時期は奈良～平安時代頃。７は６と同様。８は内黒の土器。時期は奈良～平安時代頃。９は陶器碗で現代の物。10はすり石。



第34図　第５号住居址実測図・遺物分布図



第35図　第５号住居址遺物実測図

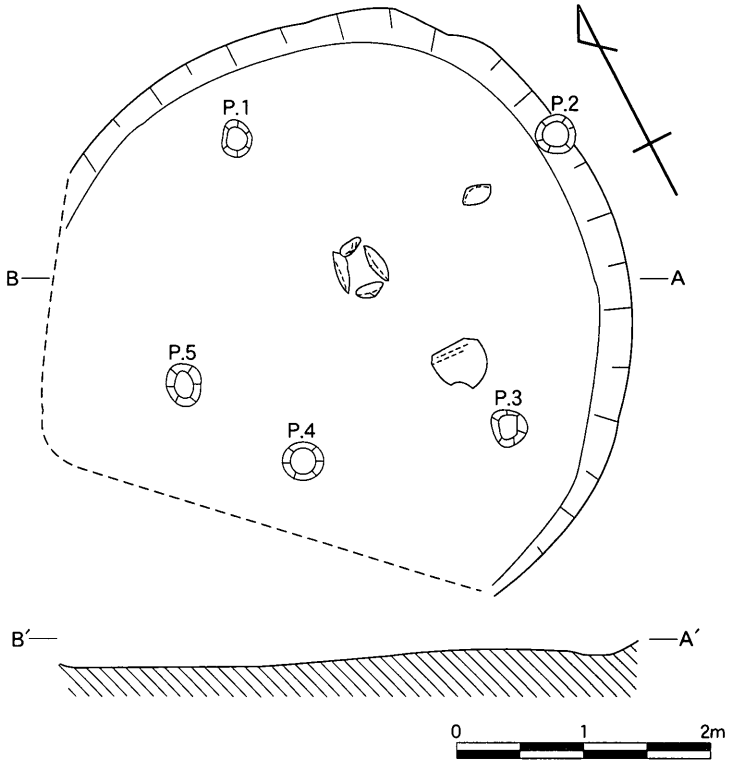
第６号住居址

（第36、37図・図版７下）

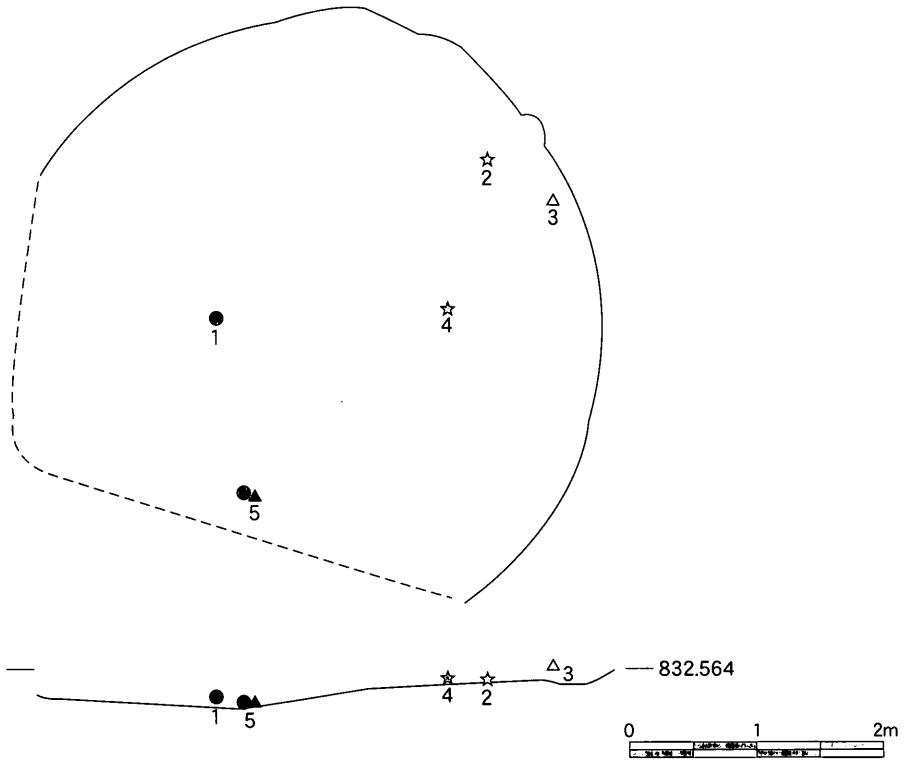
本址は遺構分布図Ｌ-10・11に発見された遺構である。本址の規模は東西4.5m、南北５mの縄文時代の住居址である。本址の周溝は北東にわずかではあるが第５号住居址を切って残存していたが、大方はこの前の土地改良工事で失われていた。床面には40×45cmの石囲炉が認められた。

遺物（第38図・図版14上）

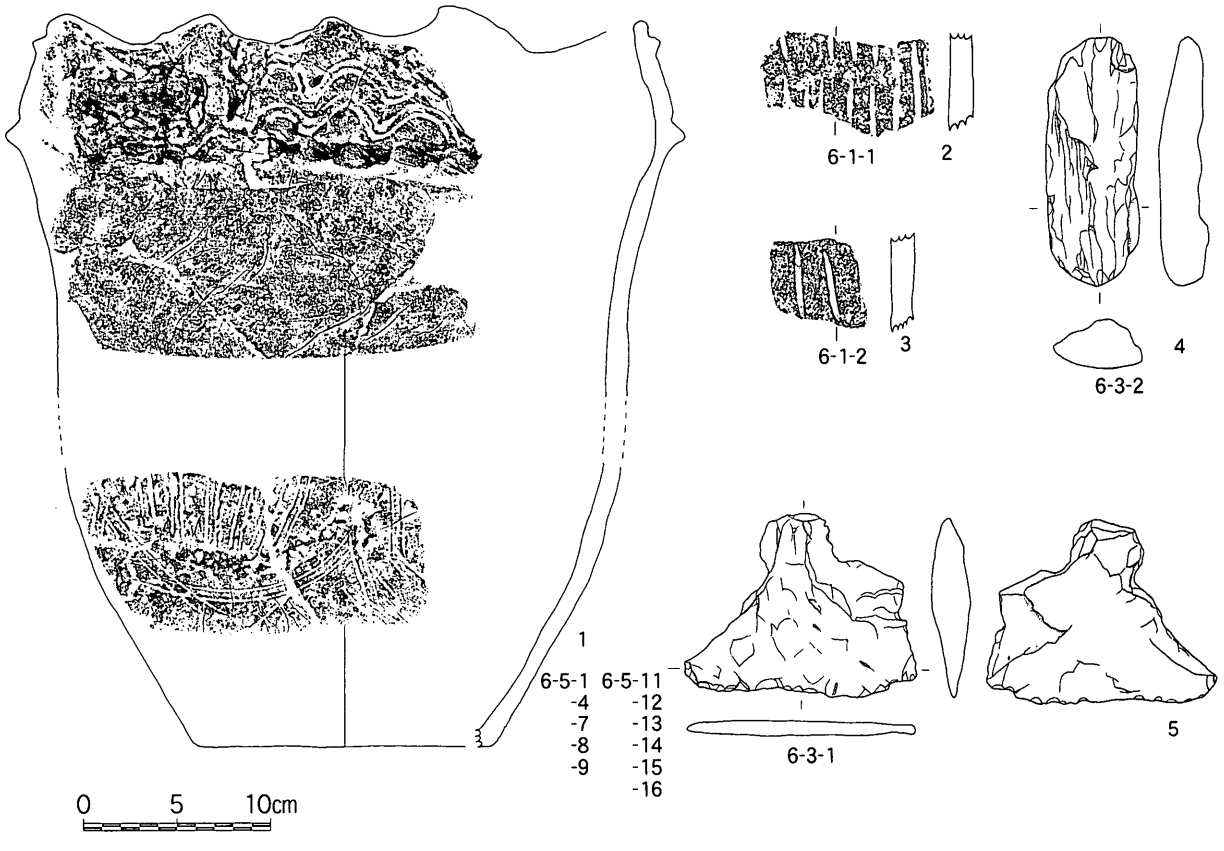
１は深鉢形土器、時期は縄文中期。２、３は深鉢形土器、時期は縄文中期後葉。４は打製石斧。５は横刃の石匙。



第36図　第６号住居址実測図



第37図　第６号住居址遺物分布図



第38図　第６号住居址遺物実測図

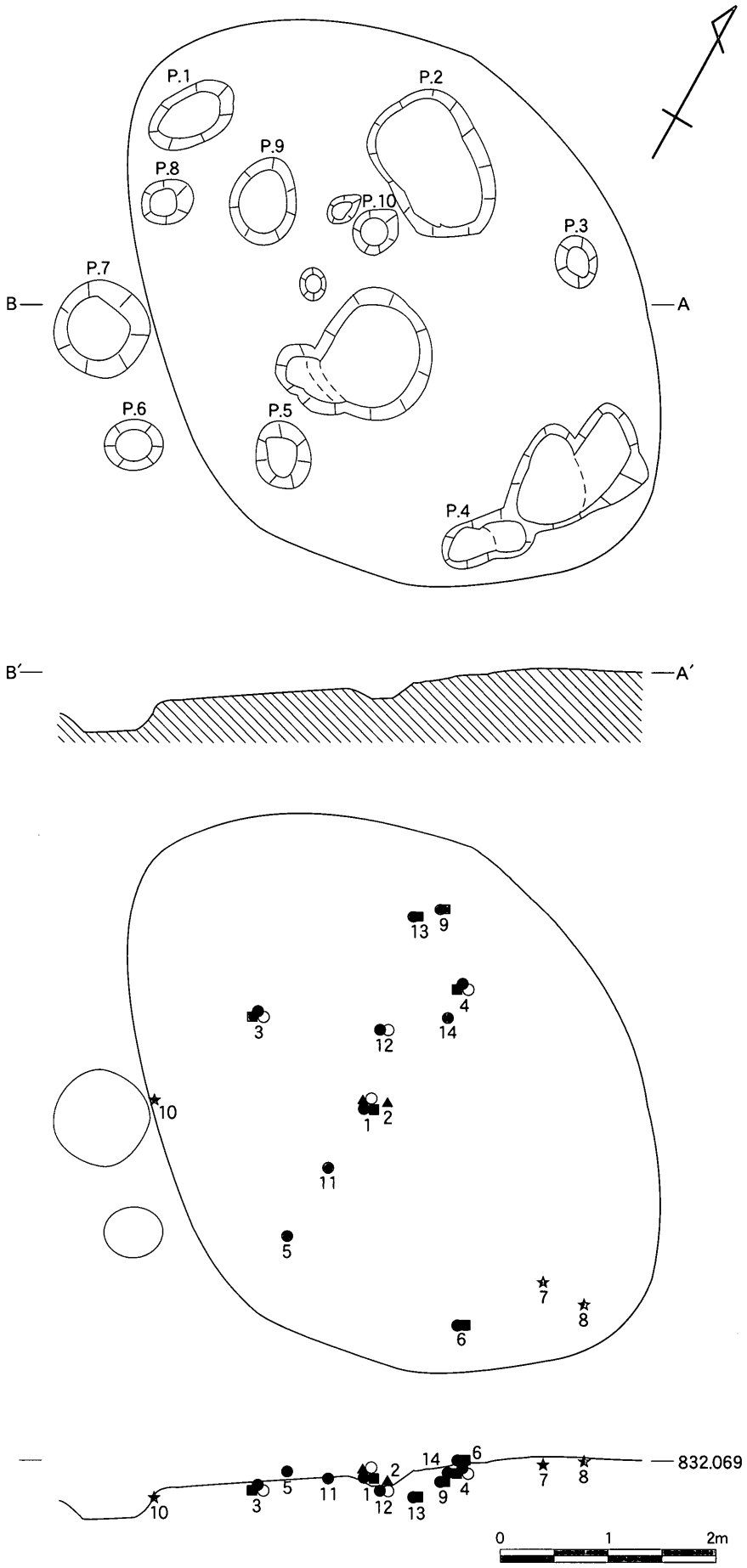
第１号址

（第39図・図版８上）

本址は遺構分布図Ｊ・Ｋ-５に発見された遺構である。本址の規模は東西５ｍ、南北６ｍの楕円形。その内にはＰ.１～Ｐ.10の柱穴が認められた。形は不明であるが、何らかの建物址らしきものが存在していたようである。本址内の土壙の中から墨書土器が出土した。このことにより平安期の遺構であると考えられる。

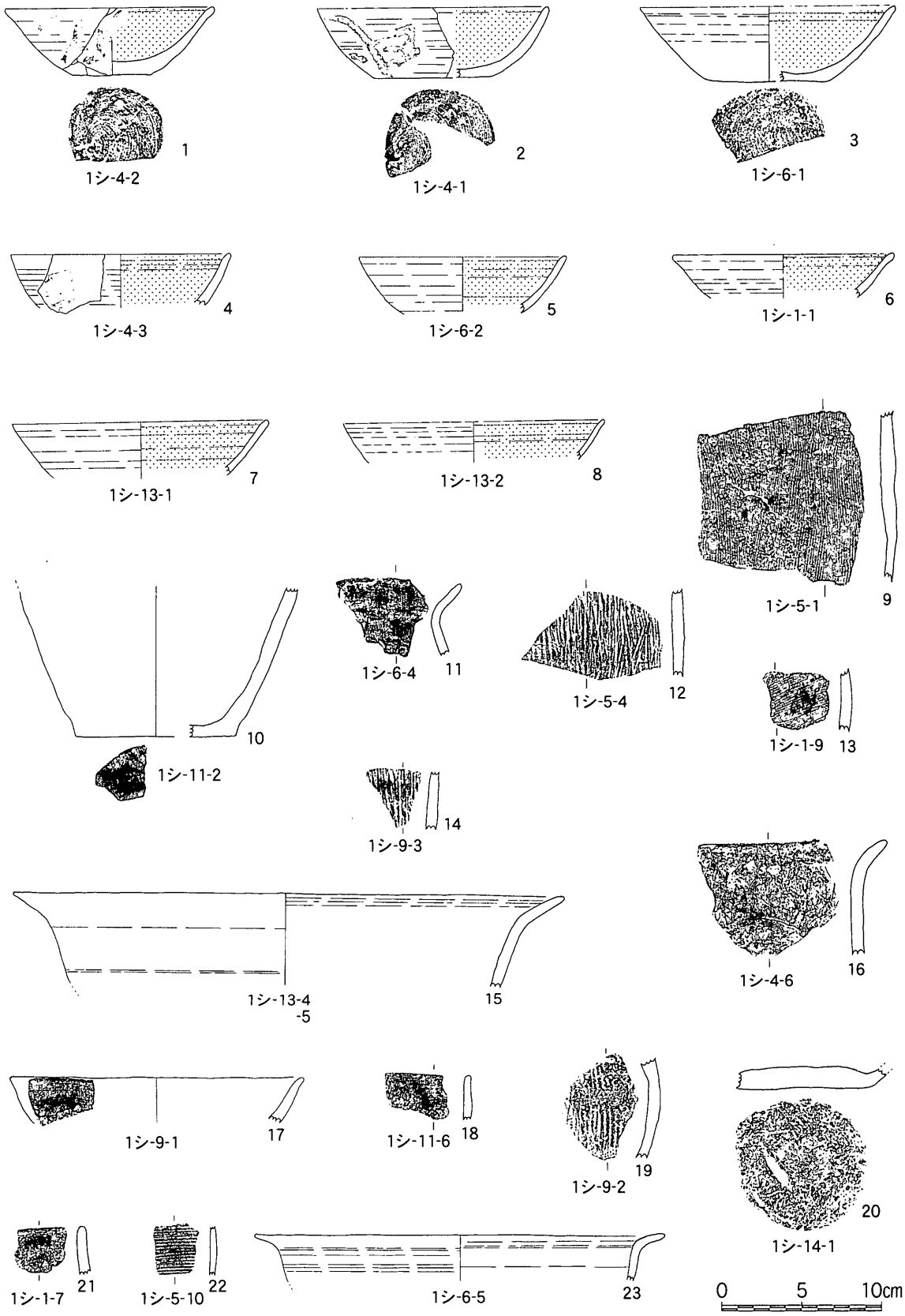
遺物（第40、41図・図版14下、15上）

１は内黒の墨書土器、口径11.8cm、高さ3.5cmを測る。底部は糸切底である。２は内黒の墨書土器、口径14.3cm、高さ4.0cmを測る。１、２の墨書については現在研究中である。３は内黒の土師器、口径14.3cm、高さ4.0cmを測る。底部は糸切底である。４は内黒の土師器、口径12.5cm、高さ3.0cmを測る。５は内黒の土師器、口径12cm、高さ3.2cmを測る。６は内黒の土師器、口径12.4cm、高さ2.5cmを測る。７は内黒の土師器、口径14.5cm、高さ3.0cmを測る。８は内黒の土師器、口径14.8cm、高さ2.2cmを測る。以上は全て平安時代頃と考えられる。９はかき目の甕形土器。10はかき目の甕形土器の底部。11はかき目の甕形土器の口縁部。12、13、14も同様にかき目の甕形土器。15は横なでの土師器の口縁部。16は横なでの土師器の口縁部。17は土師器の口縁部、口径16.6cmを測る。18は土師

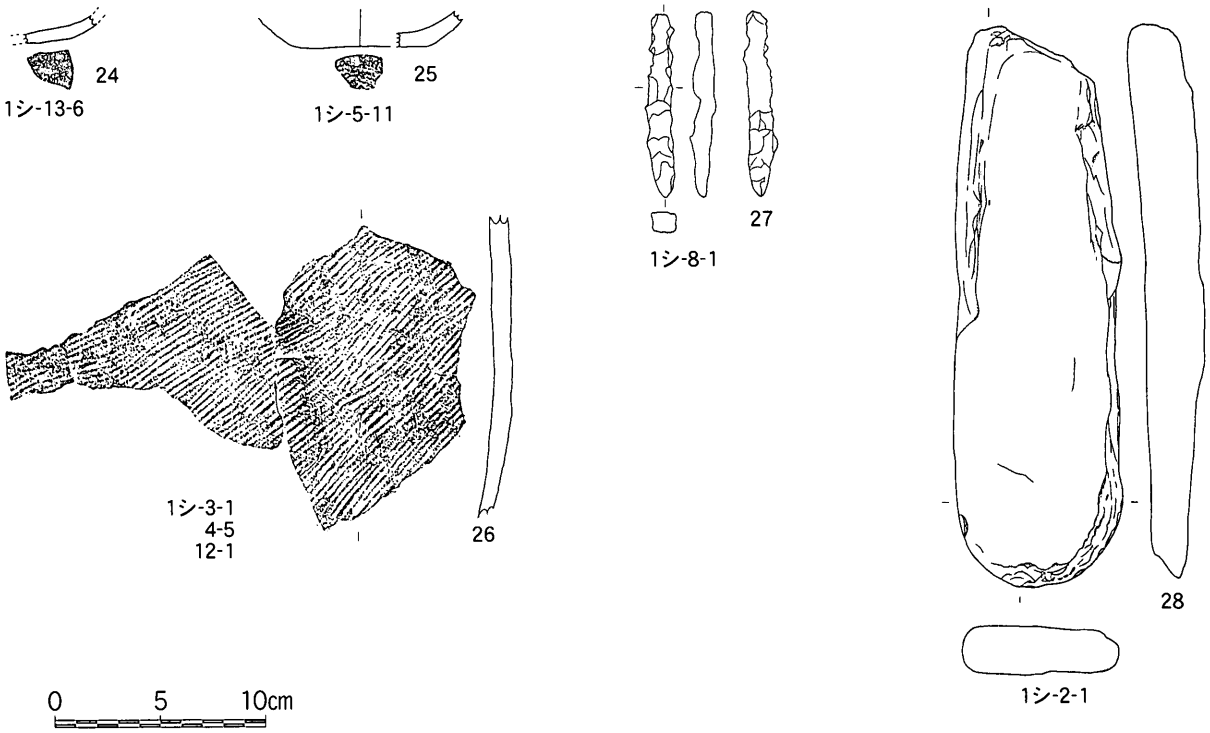


第39図　第１号址実測図・遺物分布図

器の口縁部。19は文様不明の土器。20は甕形土器の底部、あと削りが見られ、土師器でも古い方。21は土師器皿の口縁部。22は土師器の横削り。23は土師器の甕の横削り。24は土師器の底部、器形は不明。25は土師器皿か、器形は不明。26は須恵器の甕形土器。27は鉄鏃か、時期は平安時代頃。28は長さ23cm、巾7cm、厚さ2.2cmの保色岩石。



第40図　第１号住居址遺物実測図



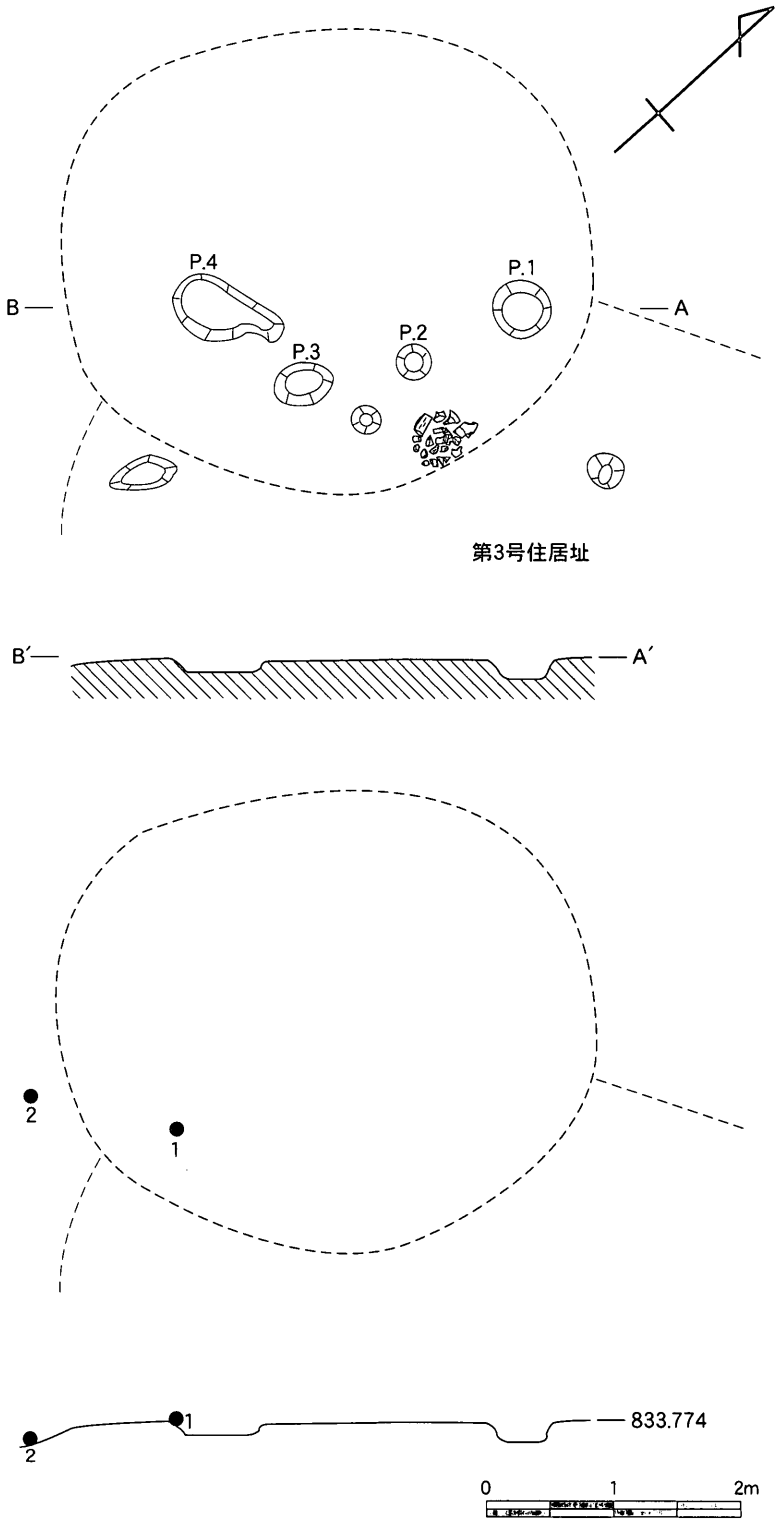
第41図　第１号住居址遺物実測図

第２号址（第42図・図版８下）

本址は遺構分布図のⅠ・J-6・7に発見された遺構である。本址の規模は東西4.2m、南北3.7mの円形。本址の内には集石が認められ、この集石は割られた石の破片を集めたもののように見えた。集石付近の柱穴P.1、P.2、P.3は間隔が0.8m、P.3、P.4は約１mであった。本址は出土した遺物から、中世の建物址と考えられる。

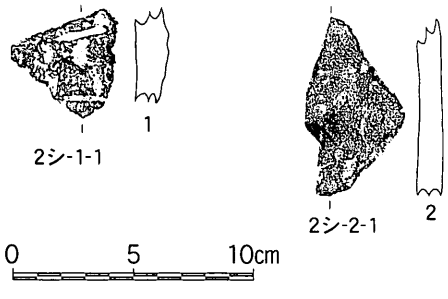
遺物（第43図・図版15上）

１は縄文中期後葉の土器。２は内耳土器、時期は室町～鎌倉時代頃。



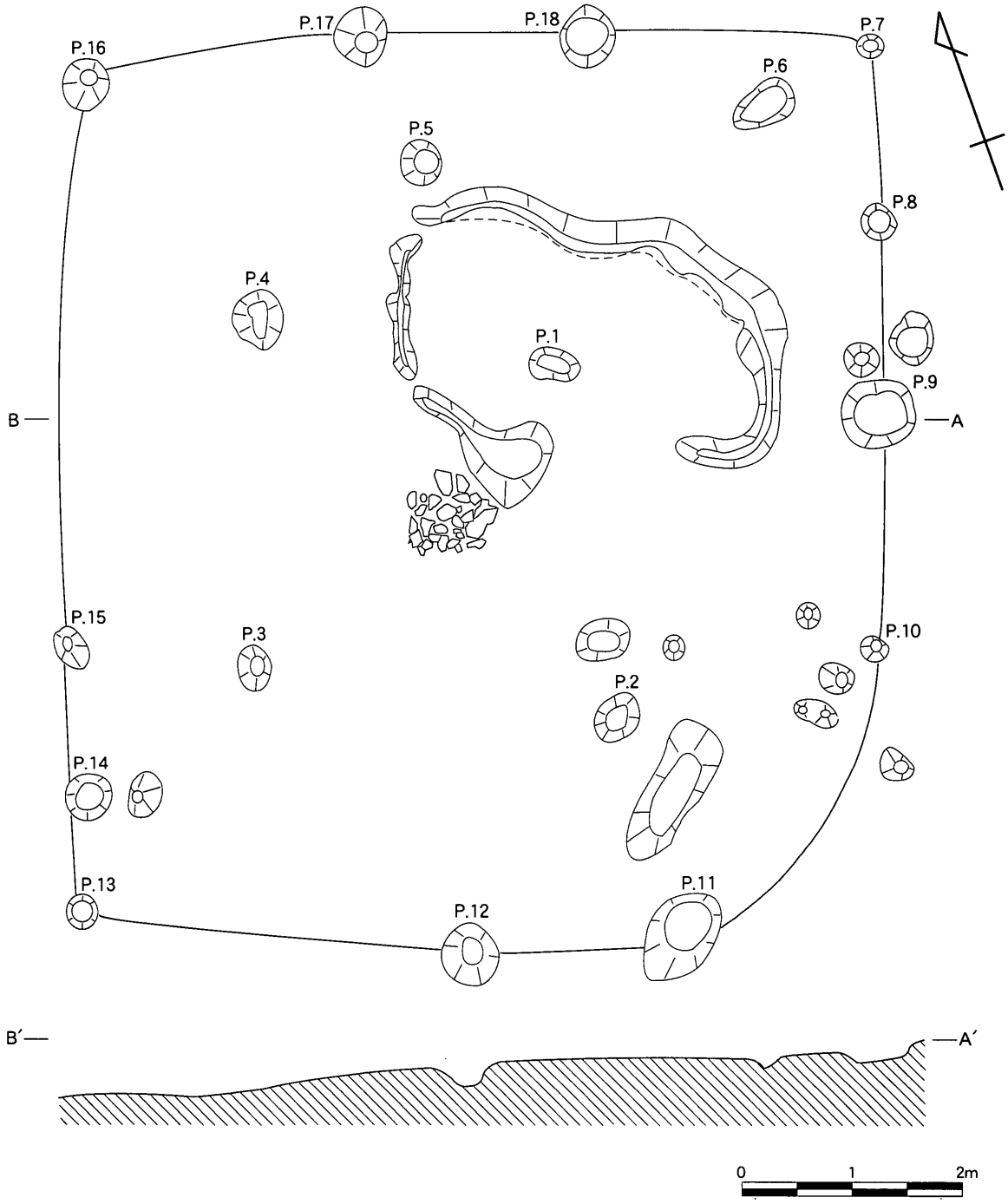
第3号住居址

第42図　第２号址実測図・遺物分布図



第43図　第２号址遺物拓影実測図

第３号址（第44、45図・図版９上）

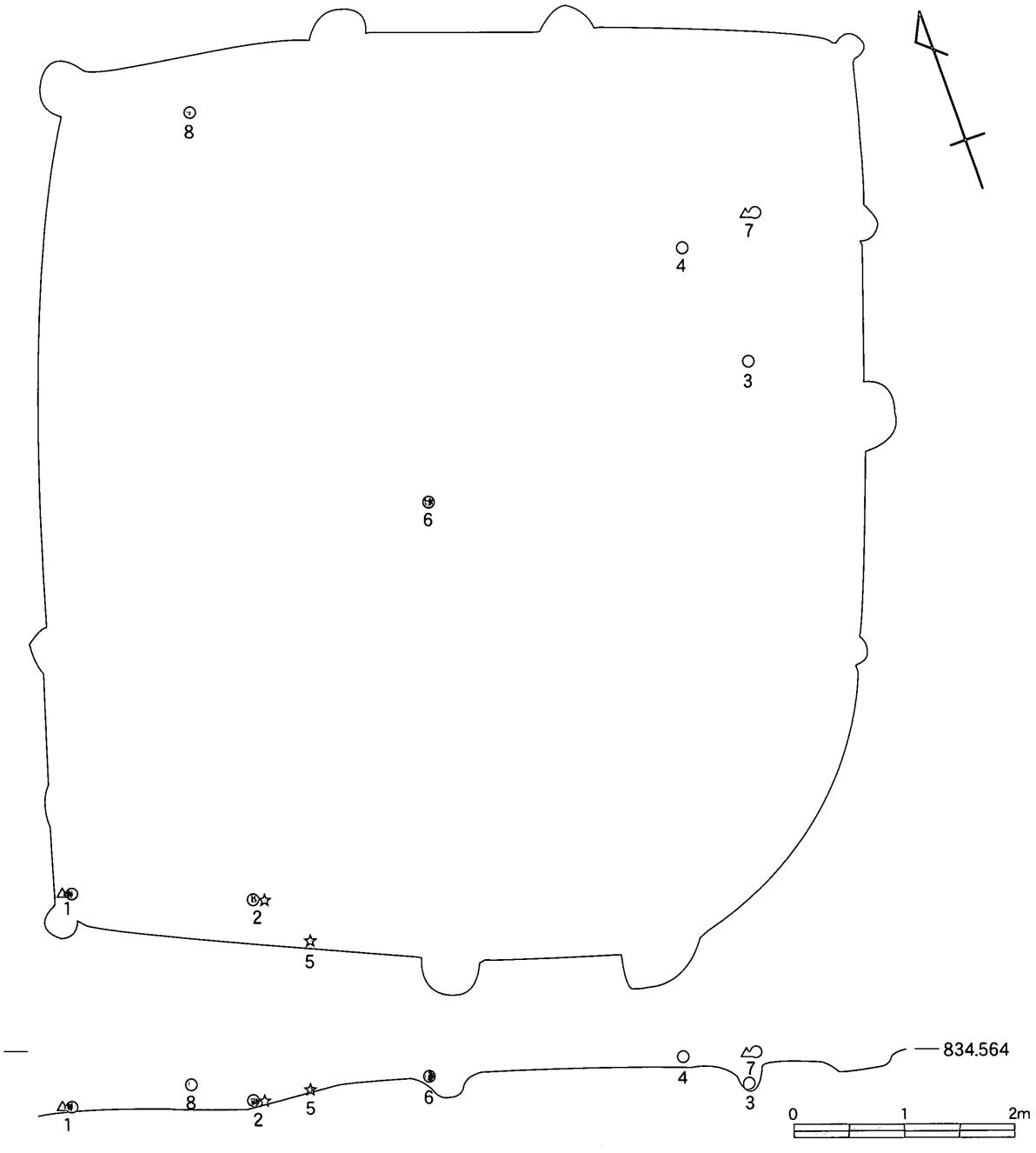


第44図　第３号址実測図

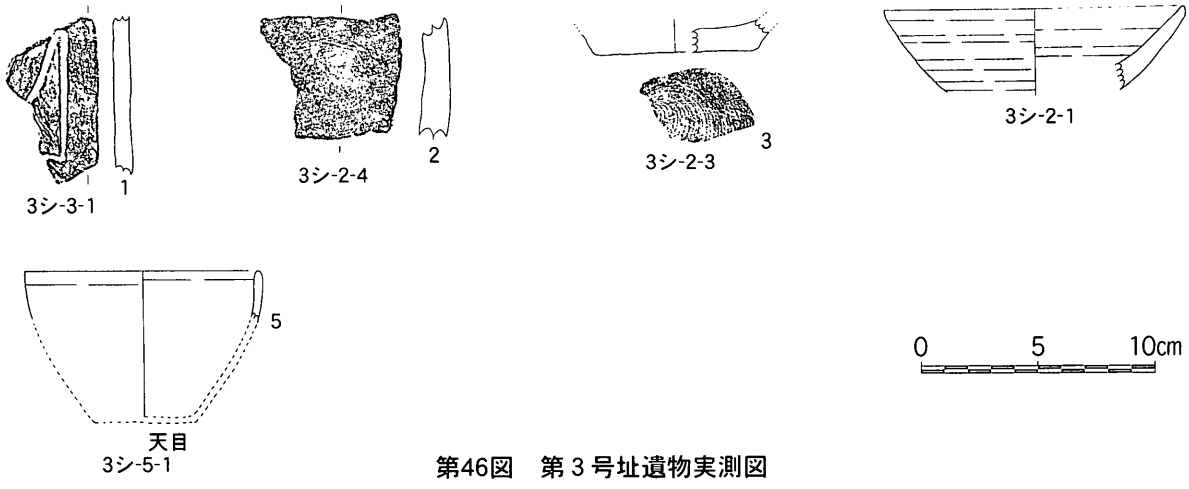
本址は遺構分布図H-７に発見された遺構である。本址の規模は東西7.5m、南北8.3mの長方形。周囲に母屋柱と考えられる柱穴が認められた。本址の主柱穴はＰ.２、Ｐ.３、Ｐ.４と考えられる。その間隔はＰ.２～Ｐ.３は3.4m、Ｐ.３～Ｐ.４は３mである。その他については不明である。本址は出土した遺物から中世の建物址と考えられる。その内部の遺構は後世に作られたものと考えられる。

遺物（第46図・図版15上）

１は縄文後期の土器片。２は縄文後期の土器か。３は土師器の底部、糸切底。４は土師器の口縁部、口径12.8cmを測る。時期は平安時代頃。５は天目茶碗の口縁部、時期は室町時代。

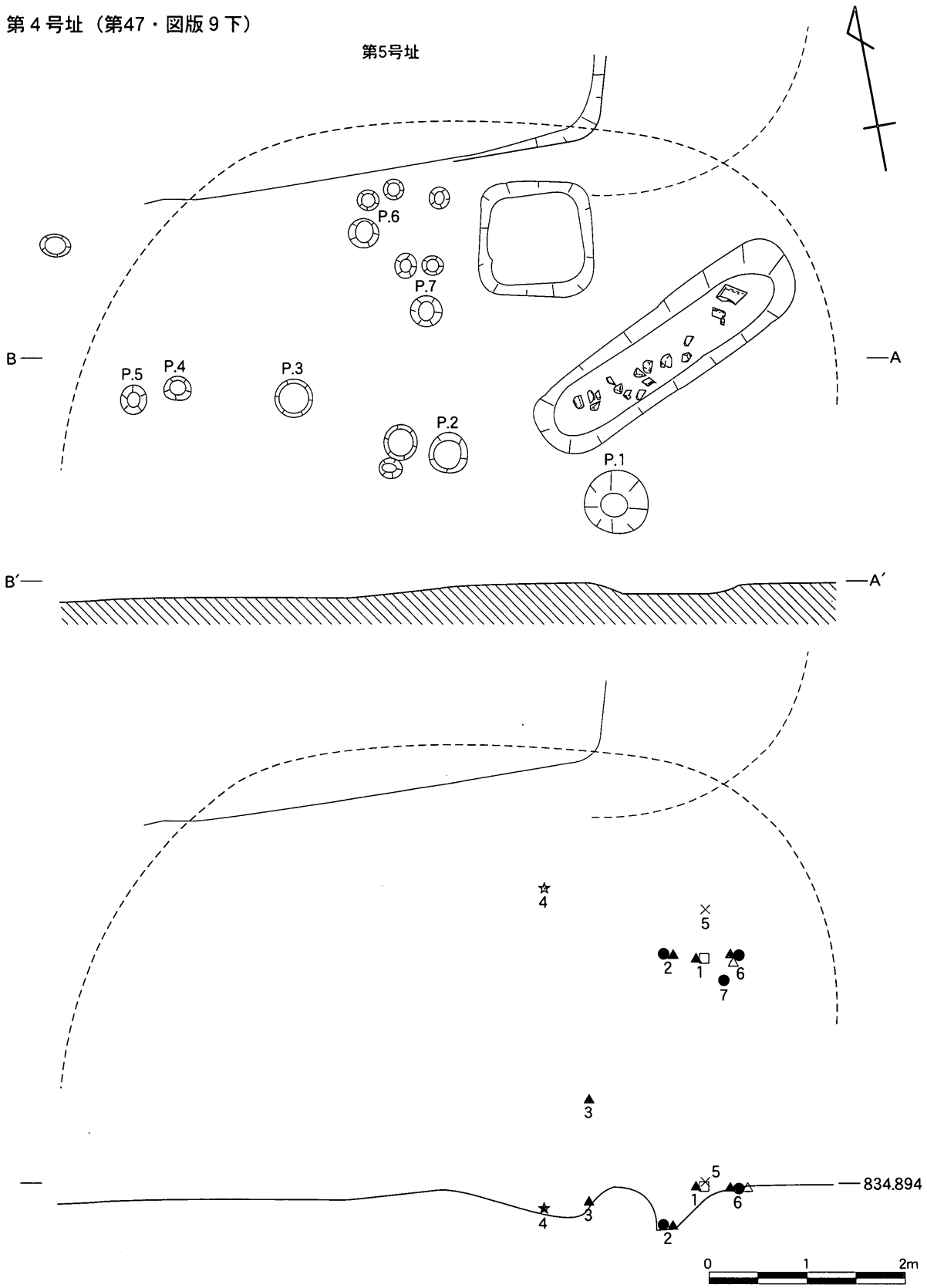


第45図　第３号址遺物分布図



第46図　第３号址遺物実測図

第４号址（第47・図版９下）

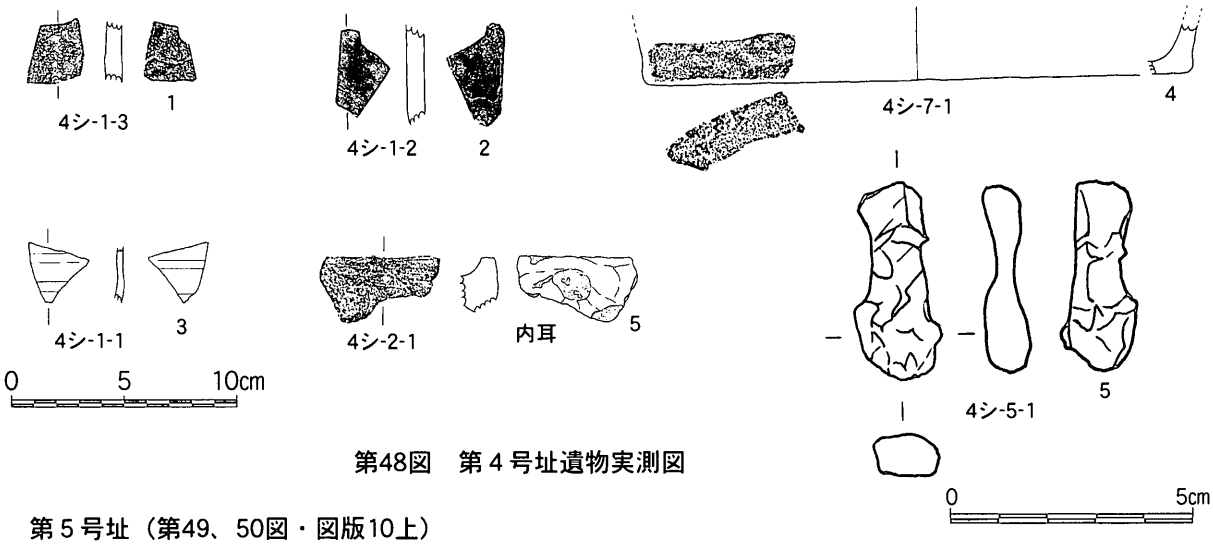


第47図　第４号址実測図・遺物分布図

本址は遺構分布図Ⅰ・Ｊ-９に発見された遺構である。本址の規模は東西7.6m、南北はこれまでに行われた土地改良工事で切り取られており不明である。本址の内部には第２号址同様に集石が見られた。本址の主柱穴はＰ.１、Ｐ.２、Ｐ.３でその間隔は1.6mである。その他については不明である。床面は大方硬かった。本址は出土した遺物から中世の建物址と考えられる。

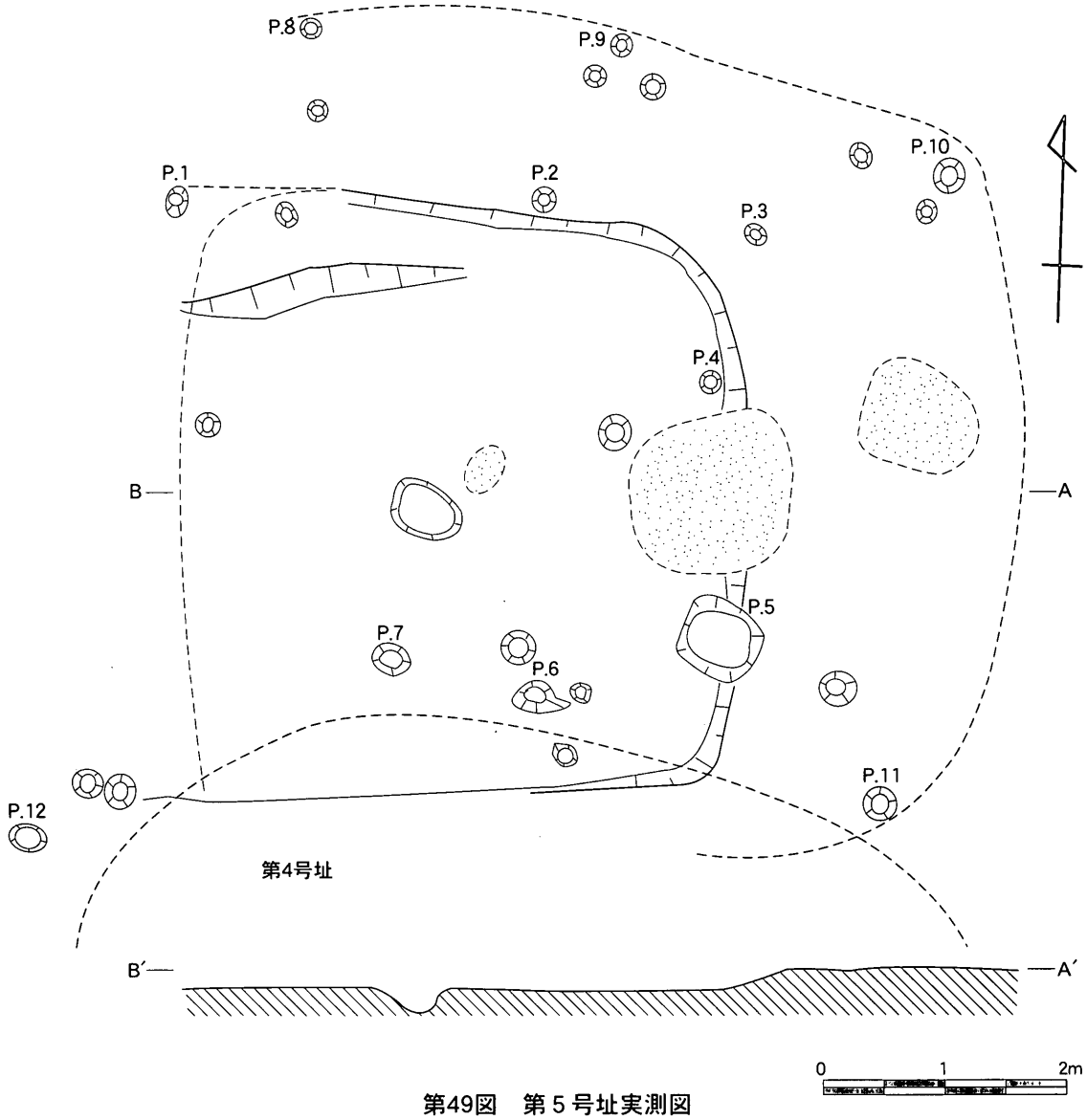
遺物（第48図・図版15下）

1は須恵器。2は須恵器。3は灰釉陶器、灰釉はわずかに見える程度。4は内耳土器の底部、時期は室町時代頃。5は内耳土器の耳の箇所、時期は室町時代頃。5は鉄鏃と思われる。時期は2と同時期。

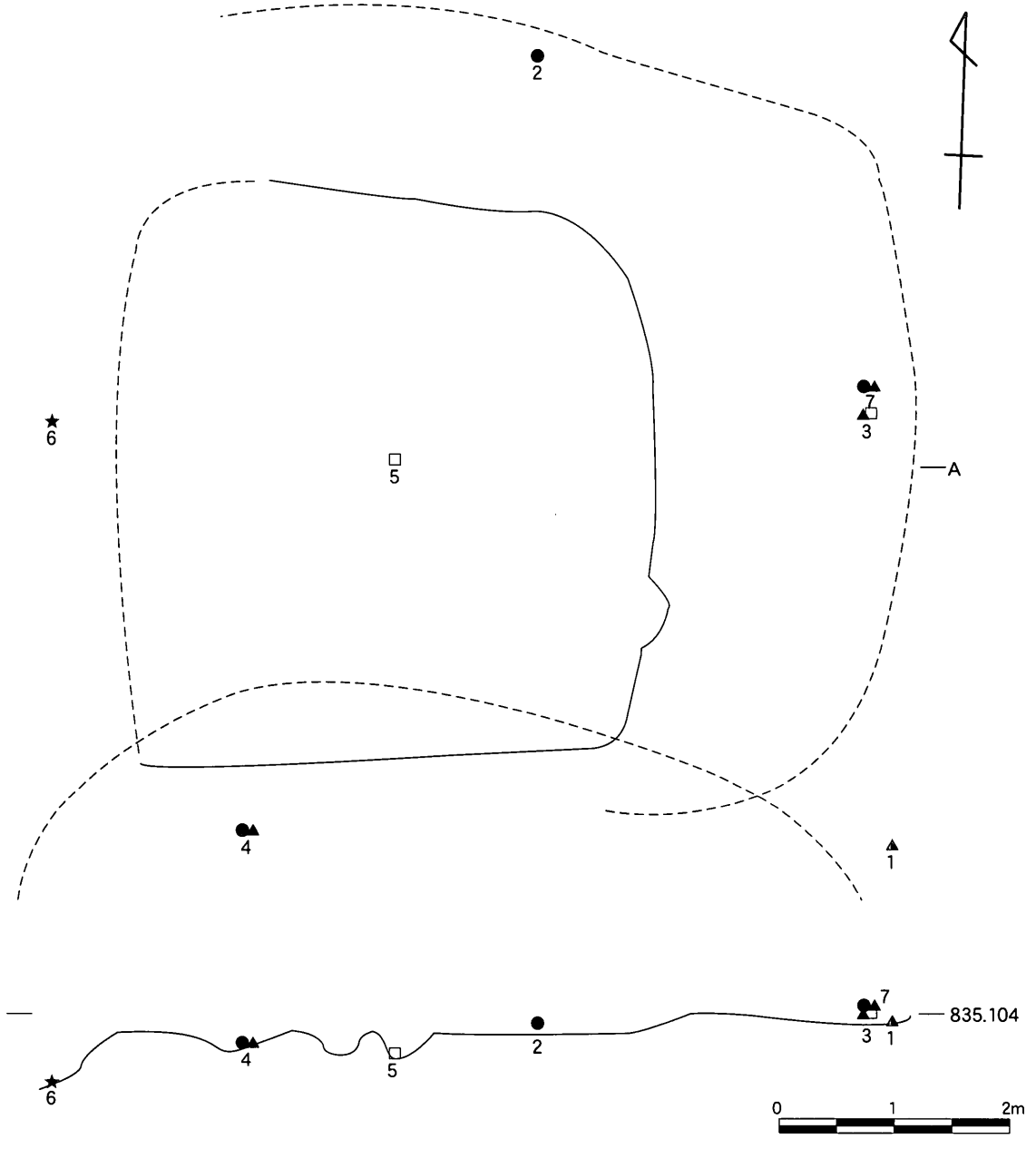


第48図　第4号址遺物実測図

第5号址（第49、50図・図版10上）



第49図　第5号址実測図

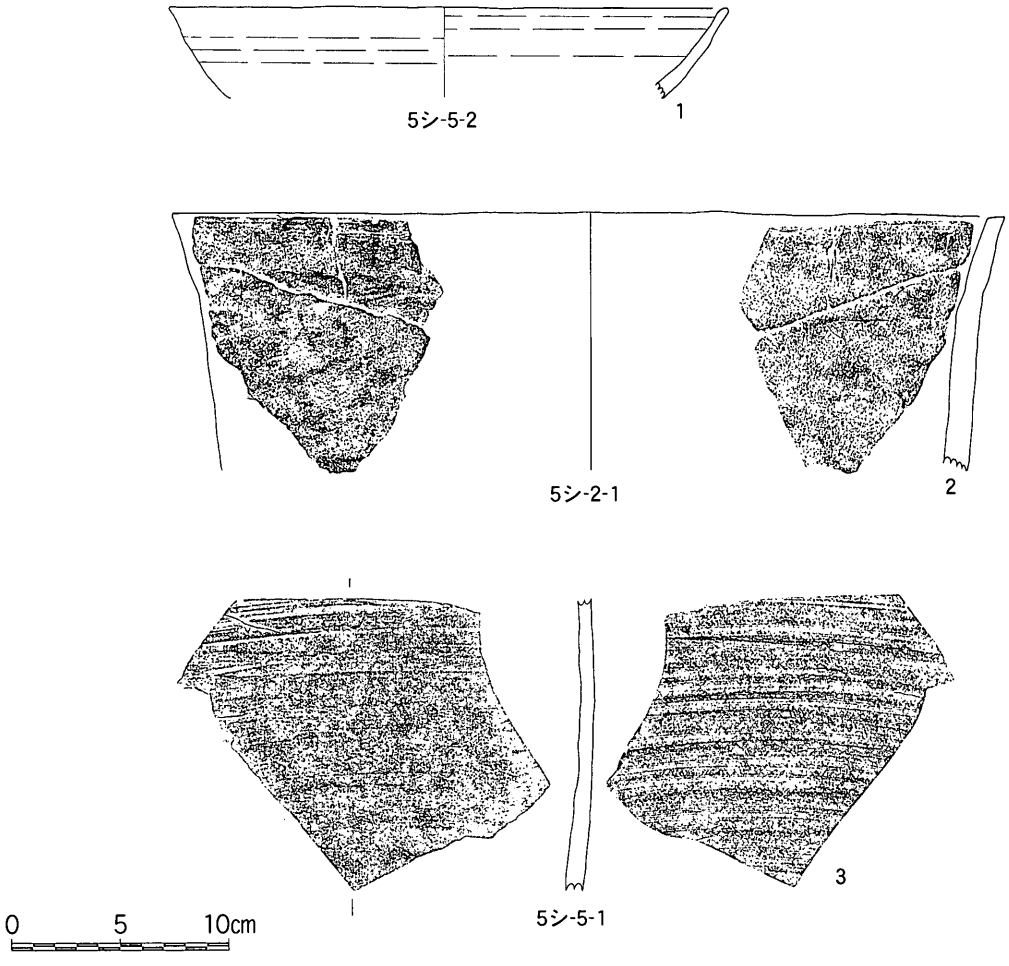


第50図　第５号址遺物分布図

本址は遺構分布図Ⅰ-９・10に発見された遺構である。本址の規模は東西約７m、南北6.0m内外と考えられる。本址も土地改良工事のため壁は北側と東側にわずかに残っただけであった。床面には東に炉址らしきものが確認された。本址の外側にはP.８、P.９、P.10、P.11の母屋柱の穴が残っていたため、本址は平安の住居址と考えられる。

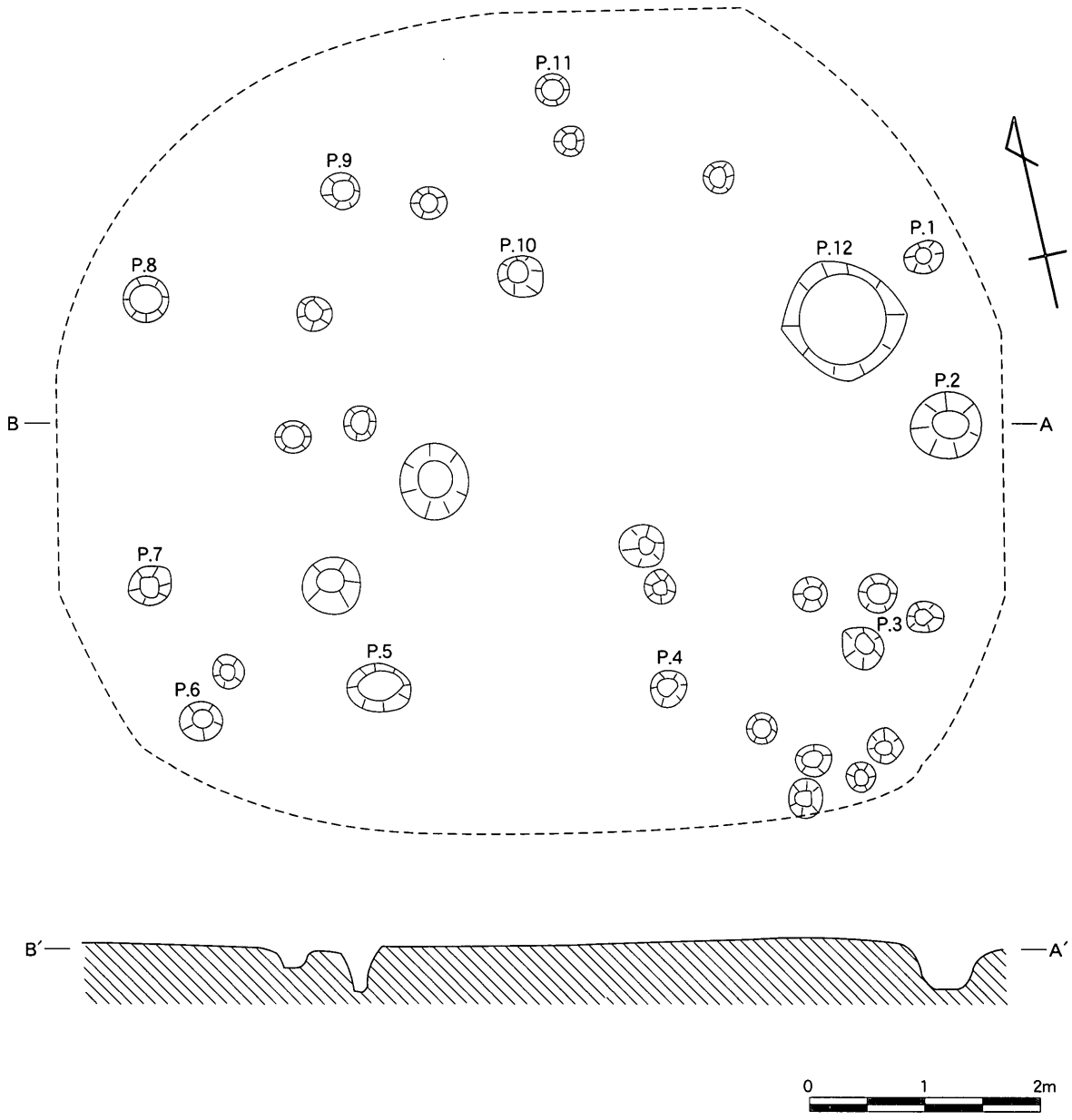
遺物（第51図・図版15下）

１は灰釉陶器碗の口縁部。２は内耳鍋の口縁部、時期は室町時代頃と考えられる。３は灰釉陶器、時期は2と同時期。



第51図　第５号址遺物実測図

第６号址（第52、53図・図版10下）

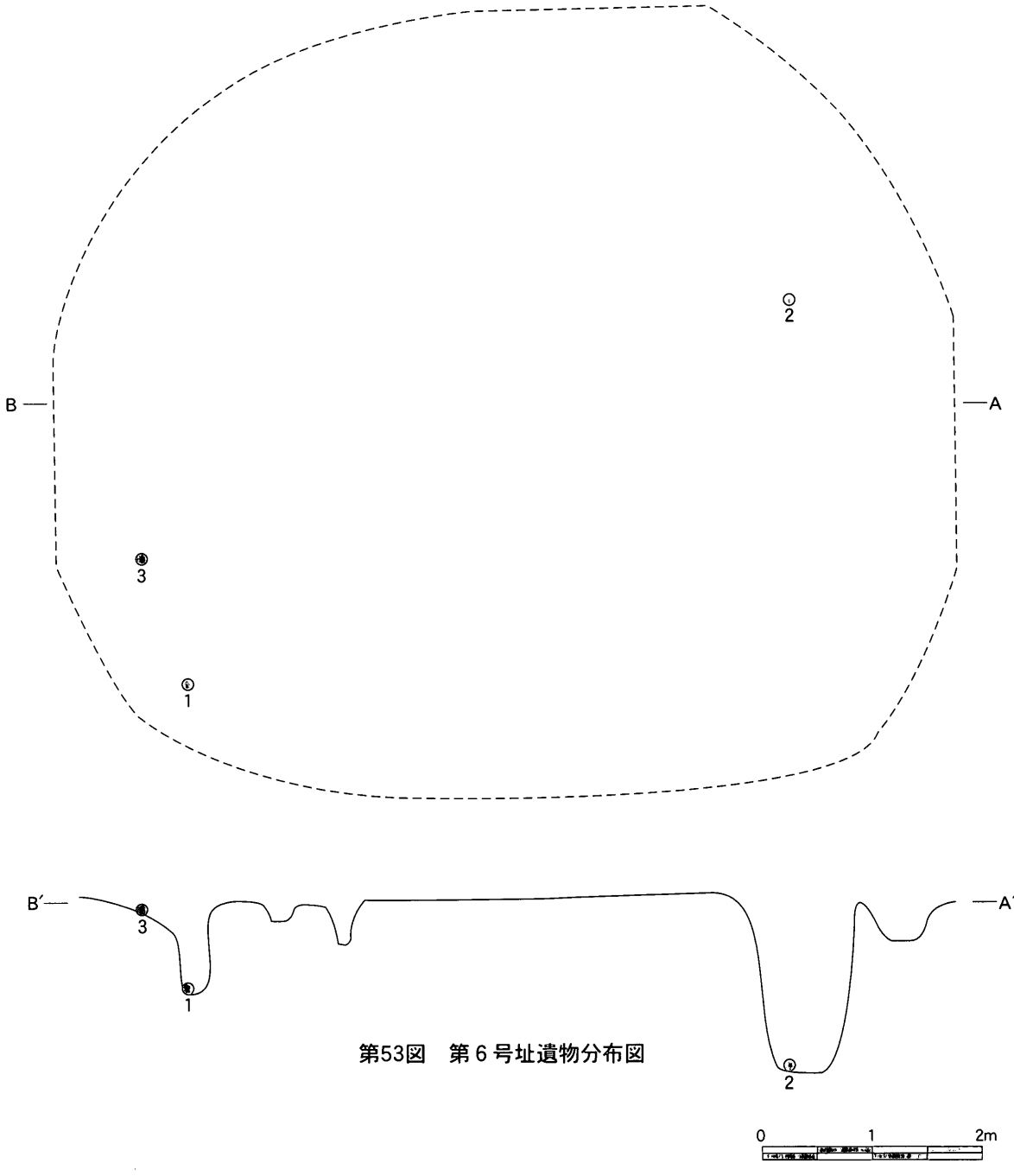


第52図　第６号址実測図

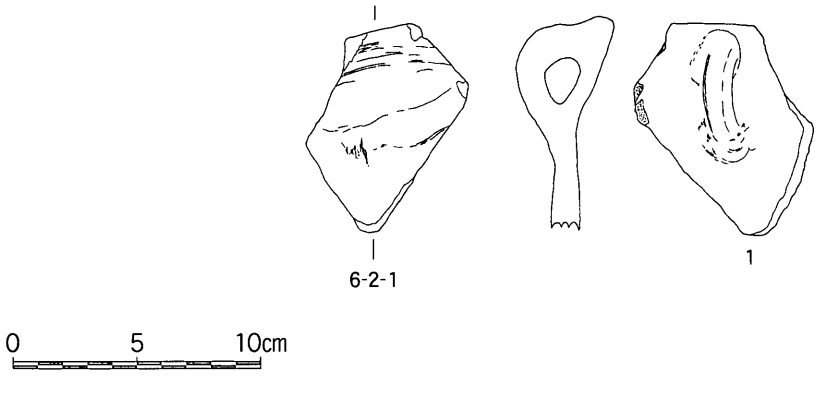
本址は遺構分布図のＨ・Ｉ-12に発見された遺構である。本址の規模は東西8.3m南北７mに広がっていると考えられる。また本址も今までの土地改良工事のため、破壊され一部しか残っていなかった。残っていたもので建物址と考えられるのはＰ.１～Ｐ.８である。その間隔はＰ.１とＰ.２の間が1.5m、Ｐ.２とＰ.３の間が1.6m、Ｐ.３とＰ.４の間が1.8m、Ｐ.４とＰ.５の間が2.5m、Ｐ.５とＰ.６の間が1.6m、Ｐ.６とＰ.７の間が1.3m、Ｐ.７とＰ.８の間が2.5m、Ｐ.８とＰ.１の間が6.8mを測る。この間隔は中世の建物址と考えられる。

遺物（第54図・図版15下）

１は内耳鍋口縁部の内耳の箇所、時期は室町時代頃。



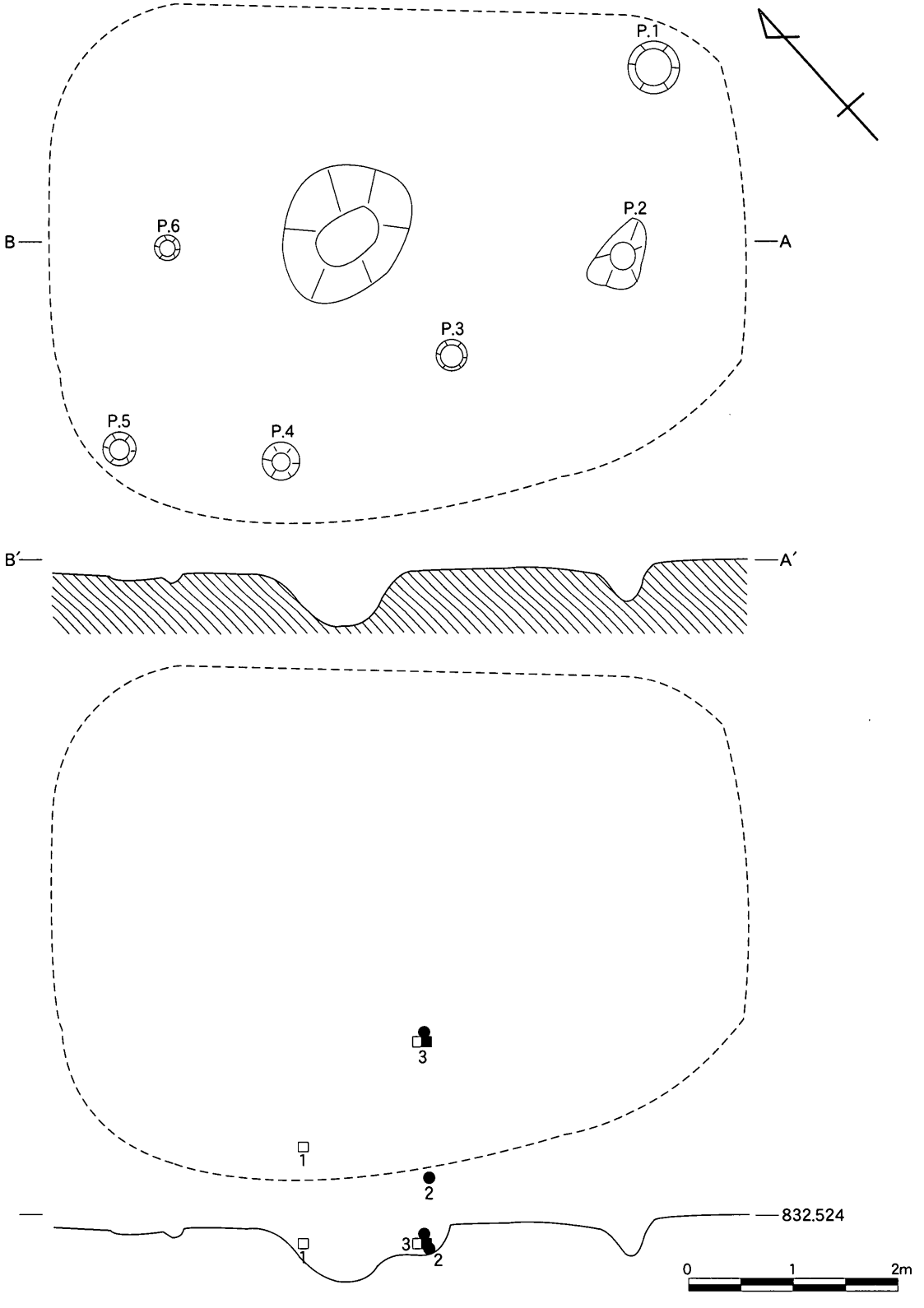
第53図　第６号址遺物分布図



第54図　第６号址遺物実測図

第７号址（第55図・図版11上）

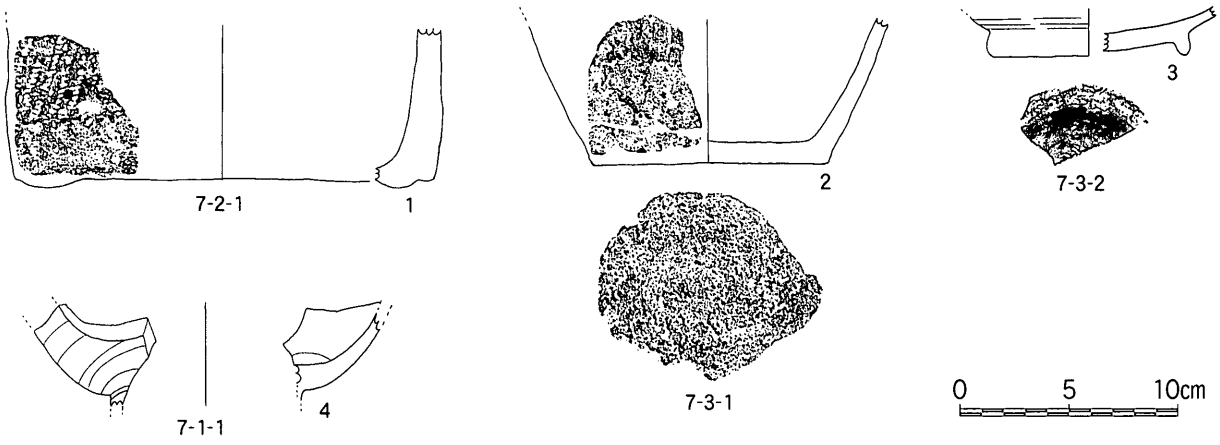
本址は、遺構分布図のＫ･Ｌ-９に発見された遺構である。本址も他の遺構同様にこれまでの土地改良工事において破壊されていた。今回測量できたのはＰ.１～Ｐ.６と土壙であった。本址の規模は東西6.7m、南北4.8mの中に見られる。Ｐ.１とＰ.２の間は1.7m、Ｐ.２とＰ.３の間は1.8m、Ｐ.３とＰ.４の間は1.8m、Ｐ.４とＰ.５の間は1.6m、Ｐ.５とＰ.６の間は1.8mであった。以上の事柄から中世の建物址と考えられる。



第55図　第７号址実測図・遺物分布図

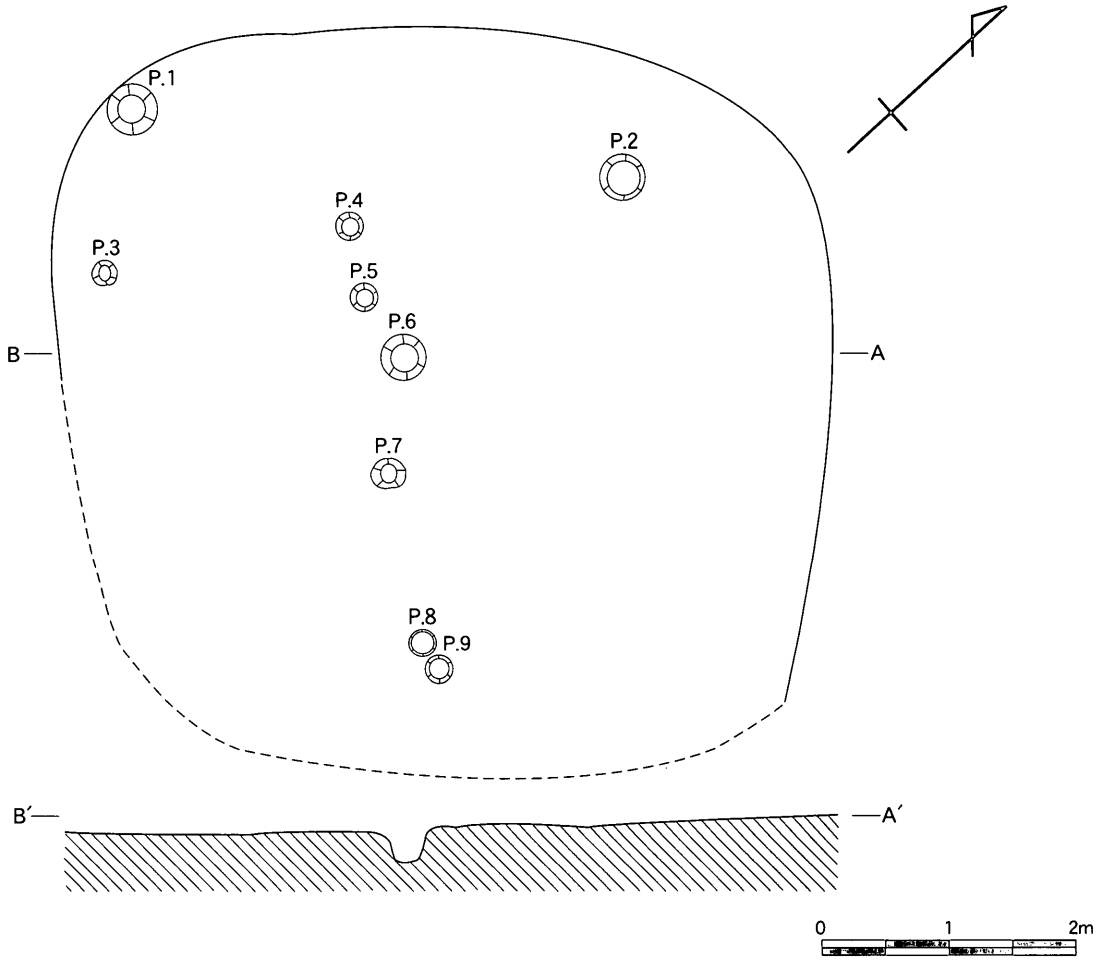
遺物（第56図・図版16上）

1は縄文中期後葉の甕の底部。2はかき目土器の底部。3は付高台の灰釉陶器の底部。時期は平安時代。4は碗、時期は現代。

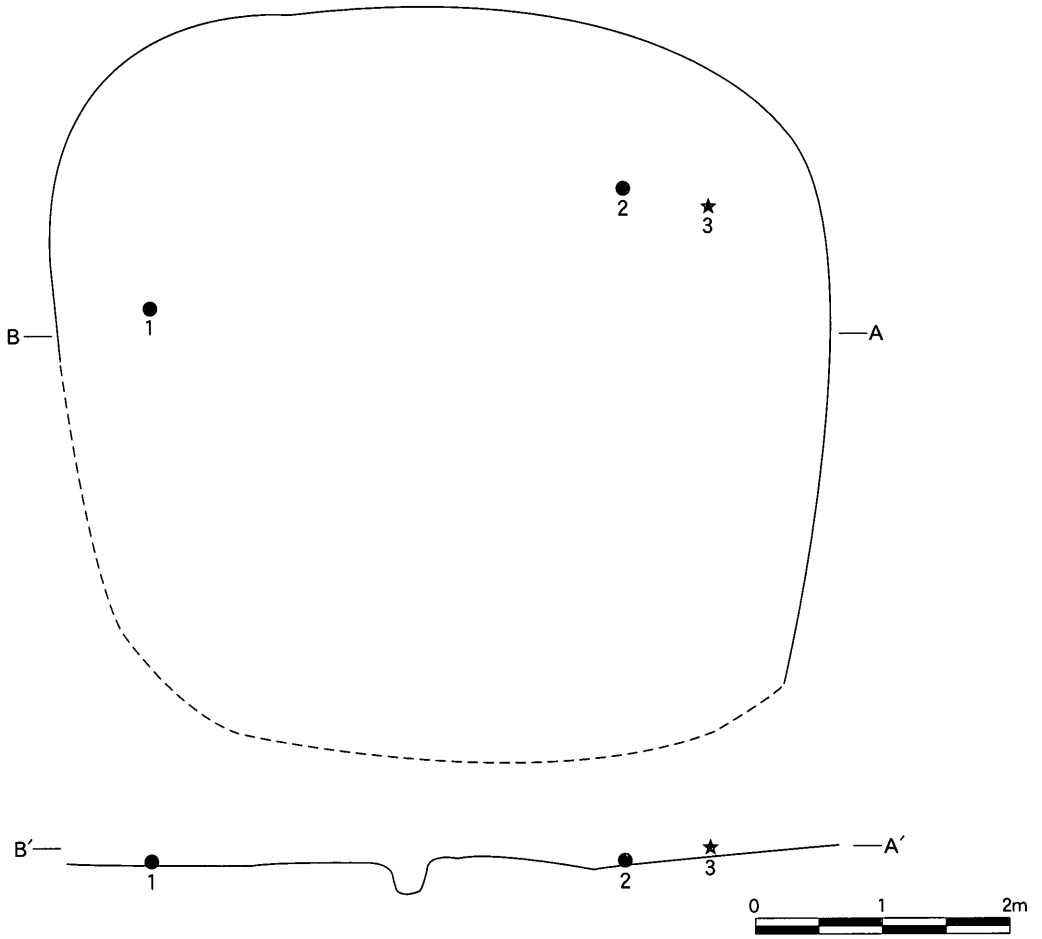


第56図　第７号址遺物実測図

第８号址（第57、58・図版11下）



第57図　第８号址実測図

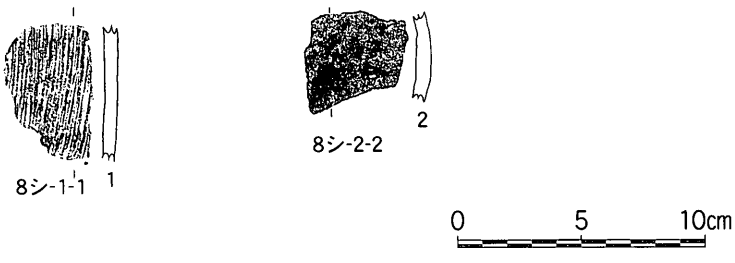


第58図　第８号址遺物分布図

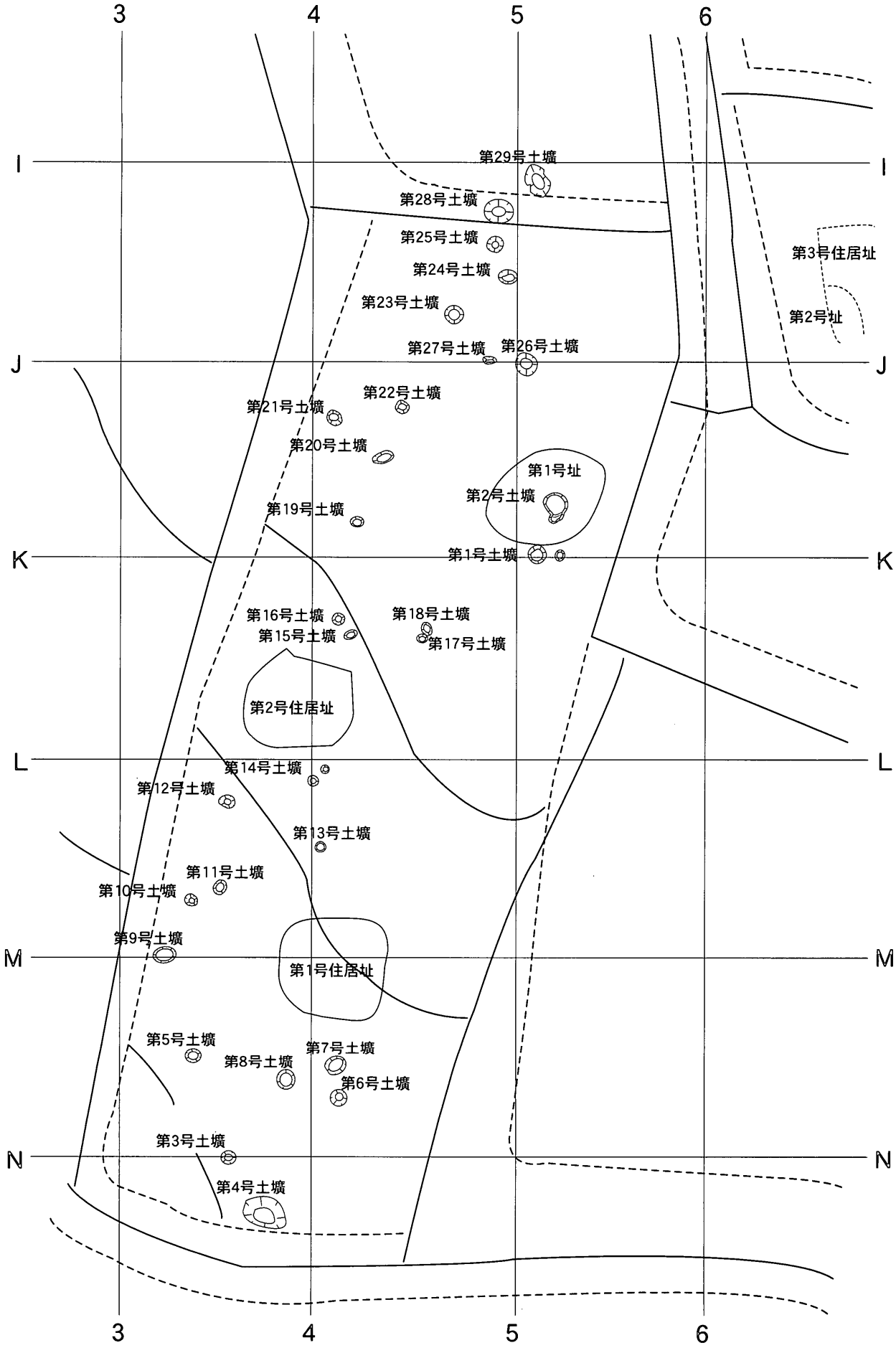
本址は遺構分布図K・L-8・9に発見された遺構である。本址の規模は東西、南北共に約６ｍとなったが、その形は今までの土地改良工事の折に変形してしまいその遺構の形をとどめていない状況となってしまった。現在ではピットとピットの間の寸法から判断するより仕方がない。P.３とP.４の間は1.8m、P.４とP.５の間は0.6m、P.６とP.７の間は0.9mを測定できるため、本址は平安の住居址と考えられる。

遺物（第59図・図版16上）

１はかき目の甕、時期は平安時代頃。２は１と同様の土器。



第59図　第８号址遺物拓影実測図



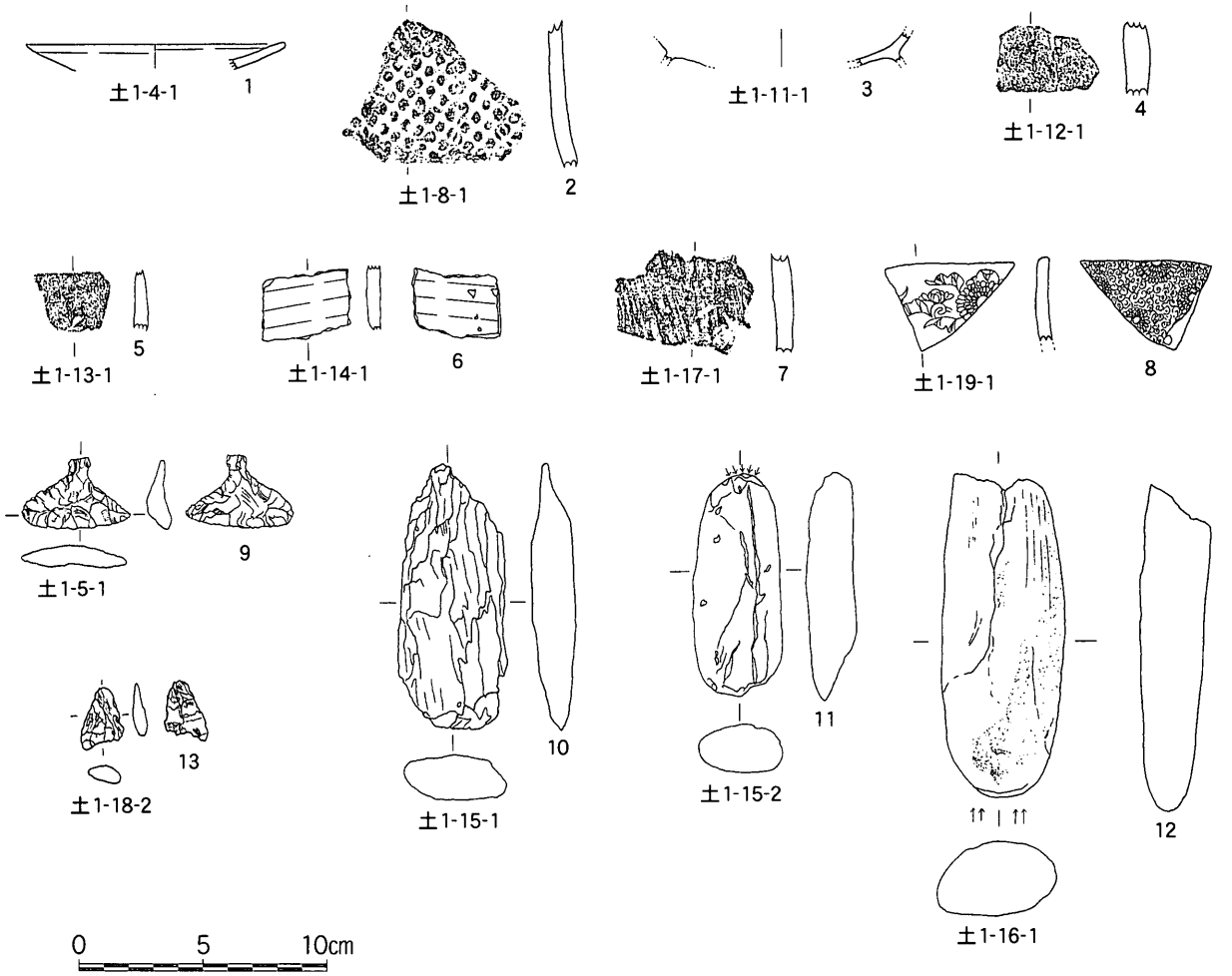
第60図　土壙群実測図（縮尺1/250）

土壙群（第60図）

本遺跡の土壙群は遺構分布図のH～O-3～5に渡って分布している。土壙の規模は直径25cm～60cm、深さ20cm～40cmにわたっている。実測した数は1～29号までである。これらの土壙は地形に沿って分布していた。その内には第1号住居址、第2号住居址、第1号址が存在していた。また、近くには秋葉街道が通じている。

遺物（第61図・図版16下）

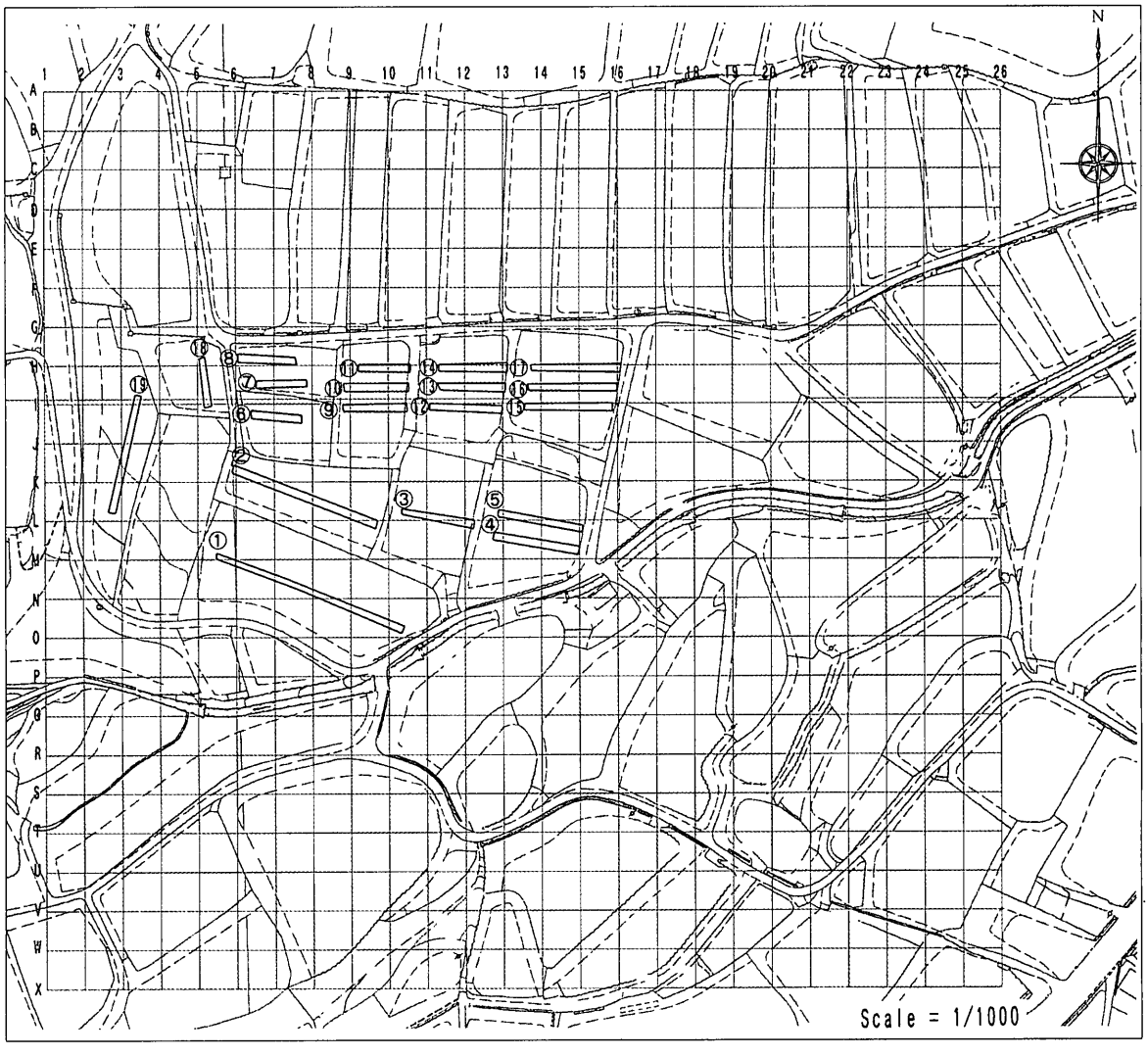
1は磁器で時期は現代。2は押型文土器、時期は縄文早期。3は台付の石釉の皿か、時期は不明。4は内耳土器、時期は室町時代頃。5は内黒の土師器、時期は奈良・平安時代頃。6は鉄釉の甕、時期は江戸時代。7は文様に斜線文のある縄文土器。8は染付の碗か、時期は現代。9は横型石匙。10は打製石斧。11は打製石斧。12は打製石斧。13は黒曜石の石鏃。



第61図　土壙群遺物実測図

トレンチ調査

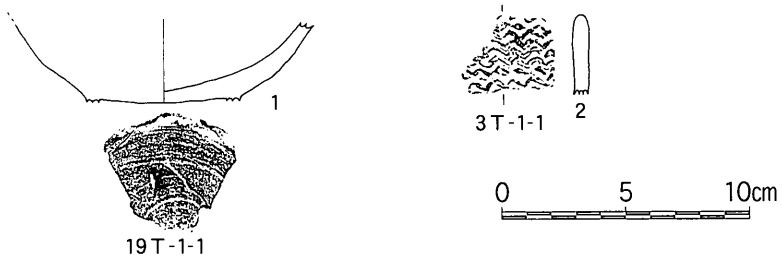
今回の一本木遺跡発掘調査をはじめるにあたってトレンチ法により遺構分布の範囲を特定する作業を行った。調査対象範囲に巾２ｍのトレンチを19本あけ、多数の遺物を回収することができた。トレンチ内から出てきた遺物の中で、どの遺構にも含まれないものは下記のとおりである。



第62図　トレンチ調査図

遺物（第63図・図版16下）

１は付高台の灰釉陶器。時期は平安時代。２は押型文土器。時期は縄文早期。



第63図　トレンチ調査遺物実測図

ま と め

県営圃場整備事業担い手育成型非持山地区工事にあたり当該地区内にある下ノ中原遺跡及び一本木遺跡が消滅してしまう恐れがあるため、平成12年７月24日より１週間下ノ中原遺跡を、同年10月24日より６週間にわたり一本木遺跡を緊急発掘調査を実施した。その結果を要約すれば以下のとおりである。

１．本発掘事業は下ノ中原遺跡については長谷村非持3389-1番地ほか約2,000㎡を、一本木遺跡については長谷村非持2270-1番地ほか約14,000㎡を実施した。

２．発見された遺構は下記のとおりである。

下ノ中原遺跡

縄文時代中期後葉の土壙	12基

一本木遺跡

縄文時代の竪穴式住居址	２軒
平安時代の竪穴式住居址	４軒
平安時代の建物址	３軒
中世の建物址	５軒
土壙	29基

３．検出された遺物は下記のとおりである。

下ノ中原遺跡

縄文時代の土器	１点
石器	２点
遺物合計	３点

一本木遺跡

縄文時代の土器	83点
弥生時代の土器	３点
中世の土器	12点
土師器	92点
須恵器	９点
灰釉陶器	９点
石器	86点
その他（黒曜石破片など）	24点
遺物合計	318点

下ノ中原遺跡は非持山地区内に存在する遺跡で、縄文時代の遺跡である。本遺跡は遺物の分布状況より南北20m、東西40mの範囲であると考えられる。今回の調査地では残念ながら今までに行われた改田工事において、殆どの遺構が壊されてしまったようであった。その為今回の調査では土壙を12基発見するだけであった。また本遺跡で発見できた遺物はわずかに３点のみであった。

一本木遺跡も下ノ中原遺跡同様に非持山地区内に存在する遺跡で、本遺跡は縄文時代、平安時代、中世の複合遺跡である。本遺跡は遺物の分布状況から南北70m、東西100mの範囲であると考えられる。本遺跡も下ノ中原遺跡と同様にこれまでに行われた改田工事の際に殆どの遺構が壊されてしまったようであった。同様に遺物の出土も少なく、遺構の時代を判別するのに苦労をした。それでも縄文と平安の住居址や中世の建物址を検出することができたのは幸いであった。遺物においても少ないながらも縄文早期の押型文土器や墨書土器、内耳土器、天目茶碗の破片等貴重な遺物が検出された。これは今後の研究をするにあたって貴重な資料になると考えられる。

<下ノ中原・一本木遺跡発掘調査、遺物整理にご協力を賜った方々について>

今回の発掘調査におきましては、東部建設の社長をはじめ、重機のオペレーターを勤めてくださった安藤さんには発掘当初より埋め戻しに至るまで丁寧な作業を心掛けてくださりありがとうございました。峰コンサルの保科さん、赤羽さんには細かい指示にも対応いただき心より感謝申し上げます。高遠町よりご足労願った奥田静子さん、鈴木和恵さんには遺物整理において図版作成や報告書作成に尽力していただきありがとうございました。同じく高遠町の鈴木岬さんには、多くの遺物復元を通して古代のロマンを教えていただきました。また、信州大学の井上先生には多くのご意見、ご指導をいただき心より感謝申し上げます。

最後に多くの方々のご尽力を賜り下ノ中原・一本木遺跡発掘調査を無事に終えられたこと、ならびに報告書の発刊ができましたことに改めて厚く御礼申し上げます。

《参考文献》

「先史及原始時代の上伊那」	1921	鳥居龍蔵
「上伊那郡史」	1922	上伊那郡教育会
「魏志倭人伝」	1951	石原道博編
「信濃史料 1巻上下」	1956	信濃史料刊行会
「上伊那郡誌 2巻」	1965	林 茂樹
「いわゆるおせんべ土器 信濃Ⅲ29」	1977	増子康真
「どるめん12号」	1978	友野良一・赤羽義洋
「埋文土器編年 世界考古学事典 上巻4号」	1979	江坂輝弥
「中央道理文報告書 原村その5」	1982	笹沢 活
「中央道理文 諏訪市」		樋口昇一
「高遠町誌 上巻歴史」	1983	高遠町誌刊行会
「埋文土器大観1」	1989	宮下健司
「日本地名事典(長野県)」	1990	「角川日本地名大辞典」編集委員会編
「宮田村誌 資料編」	1995	宮田村
「日本土器事典」	1997	大川清・鈴木公雄・工楽善通
「伊那谷の自然」	1997	建設省中部地方建設局天竜川上流事務所
「古代出雲の文化」	1998	島根県古代文化センター
「卑弥呼の幻像」	2001	富田徹郎

遺跡発掘調査遺物一覧表

遺構 No.	遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種 土器	器種 石器	縄文 前期	縄文 中期 初頭	縄文 中期 中葉	縄文 後期 後葉	縄文 後晩期	弥生	古代 土師器	古代 須恵器	古代 灰釉	中世	近世	その他	備考
下ノ中原遺跡																		
土1	1	10	12		○													
	2	10	12		○													
土2	1	12	12	○					○									曽利Ⅱ
一本木遺跡																		
1	1-1																○	黒曜石
	2-1	24	12	○										○				付高台
	3-1																○	炭
	5-1				○												○	
	2				○												○	
	3	24	12		○													打製石斧
2	1-1			○														
	2	26	12														○	染付（碗）
	3				○												○	
3	1-1	30	12														○	染付
	2																○	
	3				○												○	
	2-1			○					○									
	2																○	炭
	3-1			○					○									
	4-1	30	12		○													石英
	5-1	30	12		○													石斧
	2	30	12		○													すり石
	3				○													
	4				○													
	5				○													
	6-1			○							?							
	2				○													
	3	30	12		○													玉（装飾品）
	7-1	30	12	○							○							
	2	30	12		○													黒曜石
	8-1	30	12	○							○							
	9-1				○													黒曜石
	10-1	30	12		○													打製石斧
	2																○	炭
	11-1	30	12	○								○						
	2				○												○	
	3				○												○	黒曜石
4	1-1			○														時期不明
	2			○								○						内黒破片
	3	33	13		○													打製石斧
	4				○													
	5				○													すり石
	6	33	13		○													すり石
	7				○													すり石
	2-1	33	13	○								○						内黒
	2	33	13	○								○						かき目
	3	33	13	○								○						かき目
	4	33	13	○								○						かき目
	5			○								○						かき目
	6			○								○						
	7			○								○						
	3-1			○								○						内黒
	2			○								○						内黒
	4-1	33	13	○								○						内黒
	2	33	13	○								○						内黒
	3	33	13	○								○						内黒
	5-1	33	13	○					○									
	6-1	33	13	○					○									底部
	7-1	33	13	○					○									
	2			○								○						内黒
	3			○								○						内黒
5	1-1	35	13	○								○						内黒底
	2	35	13	○										○				
	2-1	35	13	○					○									
5	3-1	35	13	○								○						内黒破片
	2	35	13	○												○		
	3	35	13		○													すり石
	4-1	35	13	○									○					底部台付
	5-1	35	13	○														時期不明
	2	35	13	○					○									
	6-1	35	13	○										○				
	2			○								○						内黒
6	1-1	38	14	○					○									
	2	38	14	○					○									
	3			○					○									
	2-1																○	炭
	3-1	38	14		○													石匙
	2	38	14		○													打製石斧
	4-1																○	炭
	5-1	38	14	○					○									
	2			○					○									
	3			○					○									
	4	38	14	○					○									
	5			○					○									
	6			○					○									
	7	38	14	○					○									
	8	38	14	○					○									
	9	38	14	○					○									
	10			○					○									
	11	38	14	○					○									
	12	38	14	○					○									
	13	38	14	○					○									
	14			○					○									
	15	38	14	○					○									
	16	38	14	○					○									
	17			○					○									
	18				○													
	19				○													
1址	1-1	40	14	○								○						内黒
	2			○									○					
	3			○									○					
	4			○					○									
	5			○					○									
	6			○					○									
	7	40	14	○								○						かき目
	8			○								○						かき目
	9	40	14	○								○						かき目
	10				○													
	2-1	41	15		○													
	3-1	41	15	○					○									
	2			○								○						内黒
	3			○								?						
	4-1	40	14	○								○						墨書
	2	40	14	○								○						墨書
	3	40	14	○								○						墨書
	4			○								○						
	5	41	15	○									○					
	6	40	14	○								○						
	7			○								○						
	8			○								○						
	9			○								○						
	10			○								○						
	11			○								○						
	12			○								○						
	5-1	40	14	○								○						かき目
	2			○								○						かき目
	3			○								○						かき目
	4	40	14	○								○						かき目
	5			○								○						かき目

遺構 No.	遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種 土器	器種 石器	縄文 前期	縄文 中期 初頭	縄文 中期 中葉	縄文 中期 後葉	縄文 後晩期	弥生	古代 土師器	古代 須恵器	古代 灰釉	中世	近世	その他	備考
1址	5-6			○								○						かき目
	7			○								○						かき目
	8			○								○						かき目
	9			○								○						かき目
	10	40	14	○								○						かき目
	11			○								○						かき目底
	6-1	40	14	○								○						墨書
	2	40	14	○								○						
	3			○								○						
	4	40	14	○								○						かき目
	5	40	14	○								○						かき目
	6			○								○						
	7			○								○						
	8			○								○						
	7-1																○	炭
	8-1	41	15														○	鉄鏃
	9-1	40	14	○								○						
	2	40	14	○									?					
	3	40	14	○								○						かき目
	4			○														時期不明
	5			○														時期不明
	6			○														時期不明
	10-1																○	炭
	11-1			○								○						
	2	40	14	○								○						
	3			○								○						
	4			○								○						
	5			○								?						
	6	40	14	○								?						
	7			○								?						
	8			○								?						
	9			○														
	10				○													
	12-1	41	15	○									○					
	2			○									○					
	3			○								○						かき目
	4			○								○						かき目
	5			○								○						
	6			○								○						
	7			○								○						
	8			○								○						
	13-1	40	14	○								○						内黒
	2	40	14	○								○						内黒
	3			○								○						内黒
	4	40	14	○								○						甕？
	5	40	14	○								○						甕？
	6			○								○						甕の底部
	7			○														
	8			○														
	14-1	40	14	○								○						甕の底部
	2			○								○						かき目
2址	1-1	43	15	○			○											平出Ⅲ A
	2-1	43	15	○											○			内耳
3址	1-1			○														時期不明
	2				○													
	2-1	46	15	○								○						
	2			○								○						
	3	46	15	○								○						
	4	46	15	○						○								
	5			○														時期不明
	6			○														時期不明
	7			○														時期不明
	8			○						○								
	9																○	黒曜石
	3-1	46	15	○						○								

遺構 No.	遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種 土器	器種 石器	縄文 前期	縄文 中期 初頭	縄文 中期 中葉	縄文 中期 後葉	縄文 後晩期	弥生	古代 土師器	古代 須恵器	古代 灰釉	中世	近世	その他	備考
3址	3-2			○					○									
	3			○														時期不明
	4-1			○														時期不明
	2			○					○									
	5-1	46	15												○		○	天目茶碗
	6-1			○														時期不明
	2			○														時期不明
	7-1			○					○									
	2			○					○									
	3				○													
	4				○													
	8-1			○					○									
4址	1-1	48	15											○				
	2	48	15		○								○					
	3	48	15		○								○					
	4																○	木炭
	2-1	48	15	○											○			内耳
	2			○											○			内耳
	3			○											○			内耳
	4			○											○			内耳
	5			○											○			内耳
	6			○								○						かき目
	7			○														時期不明
	8			○											○			内耳
	9			○											○			内耳
	10			○														時期不明
	11				○													
	3-1				○													
	4-1																○	木炭
	5-1	48	15														○	鉄鏃
	6-1			○														
	2				○												○	黒曜石
	3				○													長石
	4				○													長石
	5				○													長石
	6				○													長石
	7				○													長石
	7-1	48	15	○											○			内耳（底）
5址	1-1				○													
	2				○													
	3				○													
	4				○													
	5				○													
	6				○													
	7				○													
	2-1	51	15	○											○			内耳（縁）
	2			○														
	3-1			○														灰釉？
	2				○													黒曜石
	4-1			○								?						
	2			○														時期不明
	3				○													
	4				○													
	5-1	51	15	○											○			釉の付いた
	2	51	15	○											○			甕か壺
	6-1																○	炭
	7-1			○					○									
	2				○													
	3				○													
	4				○													
	5				○													
	6				○													
	7				○													
	8				○													
	9				○													

遺構 No.	遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種 土器	器種 石器	縄文 前期	縄文 中期 初頭	縄文 中期 中葉	縄文 中期 後葉	縄文 後晩期	弥生	古代 土師器	古代 須恵器	古代 灰釉	中世	近世	その他	備考
5址	7-10				○													
	11				○													
	7-12				○													
6址	1-1			○					○									
	2-1	54	15	○														内耳
	3-1			○					○									
7址	1-1	56	16	○										○				碗（室町）
	2-1	56	16	○				○										底
	3-1	56	16	○				○										
	2	56	16	○										○				台付
	3			○								○						内黒
8址	1-1	59	16	○								○						かき目
	2			○								○						かき目
	2-1			○								○						内黒
	2	59	16	○											○			内耳
	3-1																○	木炭
土壙	1-1			○								○						内黒
	1-2-1			○								○						
	2				○													黒曜石
	1-3-1				○													凹石
	2				○													敲石
	3				○													黒曜石
	1-4-1	61	16														○	碗（現代）
	2				○													
	3				○													
	1-5	61	16		○													石匙(チャート)
	1-6-1				○												○	
	2				○												○	
	1-7-1				○												○	
	2				○												○	
	3				○												○	
	4				○												○	
	1-8	61	16	○		○												押型文(早期)
	1-9-1				○												○	
	2				○												○	
	3				○													黒曜石
	1-10				○													
	1-11	61	16	○														付高台
	1-12-1	61	16	○														内耳？
	2				○													
	3				○													
	1-13-1	61	16	○								○						内黒
	2				○												○	
	3				○												○	
	1-14	61	16	○														鉄釉(平安頃)
	1-15-1	61	16		○													打製石斧
	2	61	16		○													打製石斧
	1-16-1	61	16		○													打製石斧
	2				○													黒曜石
	1-17	61	16	○					○									
	1-18-1				○												○	
	2	61	16		○													黒曜石矢じり
	1-19	61	16														○	皿(江戸中頃)
3T	1-1	63	16	○		○												押型文(早期)
	2																○	黒曜石
9T	1-1	63	16	○										○				平安

遺構 No.	遺物 No.	挿図 No.	写真図版 No.	器種 土器	器種 石器	縄文 前期	縄文 中期 初頭	縄文 中期 中葉	縄文 中期 後葉	縄文 後晩期	弥生	古代 土師器	古代 須恵器	古代 灰釉	中世	近世	その他	備考

図　版

図版　1

下ノ中原遺跡　第1号土壙

下ノ中原遺跡　第2号土壙

下ノ中原遺跡　第3号土壙

下ノ中原遺跡　第4号土壙

下ノ中原遺跡　第5号土壙

下ノ中原遺跡　第6号土壙

図版　3

下ノ中原遺跡　第7号土壙

下ノ中原遺跡　第8号土壙

下ノ中原遺跡　第9号土壙

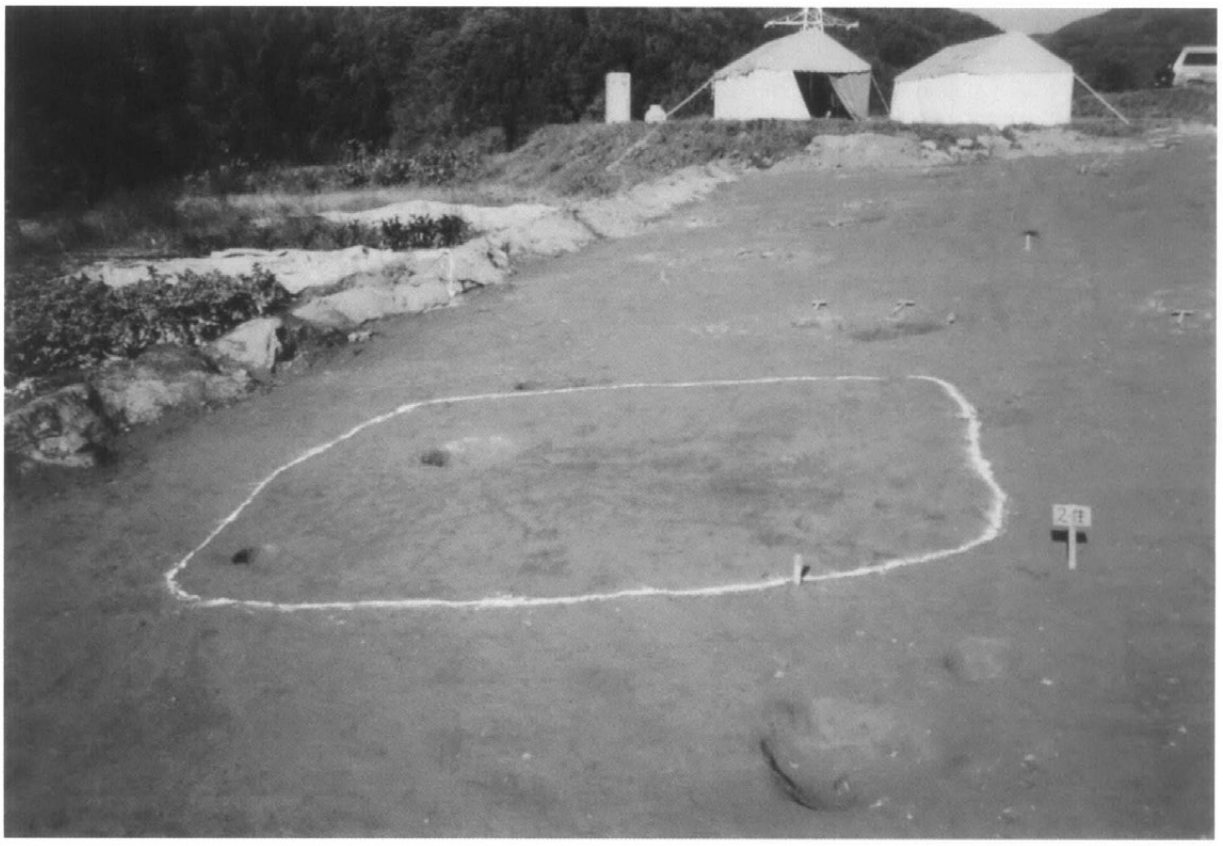
下ノ中原遺跡　第10号土壙

下ノ中原遺跡　第11号土壙

下ノ中原遺跡　第12号土壙

図版　5

一本木遺跡第１号　住居址



一本木遺跡第２号　住居址

一本木遺跡第3号　住居址

一本木遺跡第4号　住居址

図版　7

一本木遺跡第5号　住居址

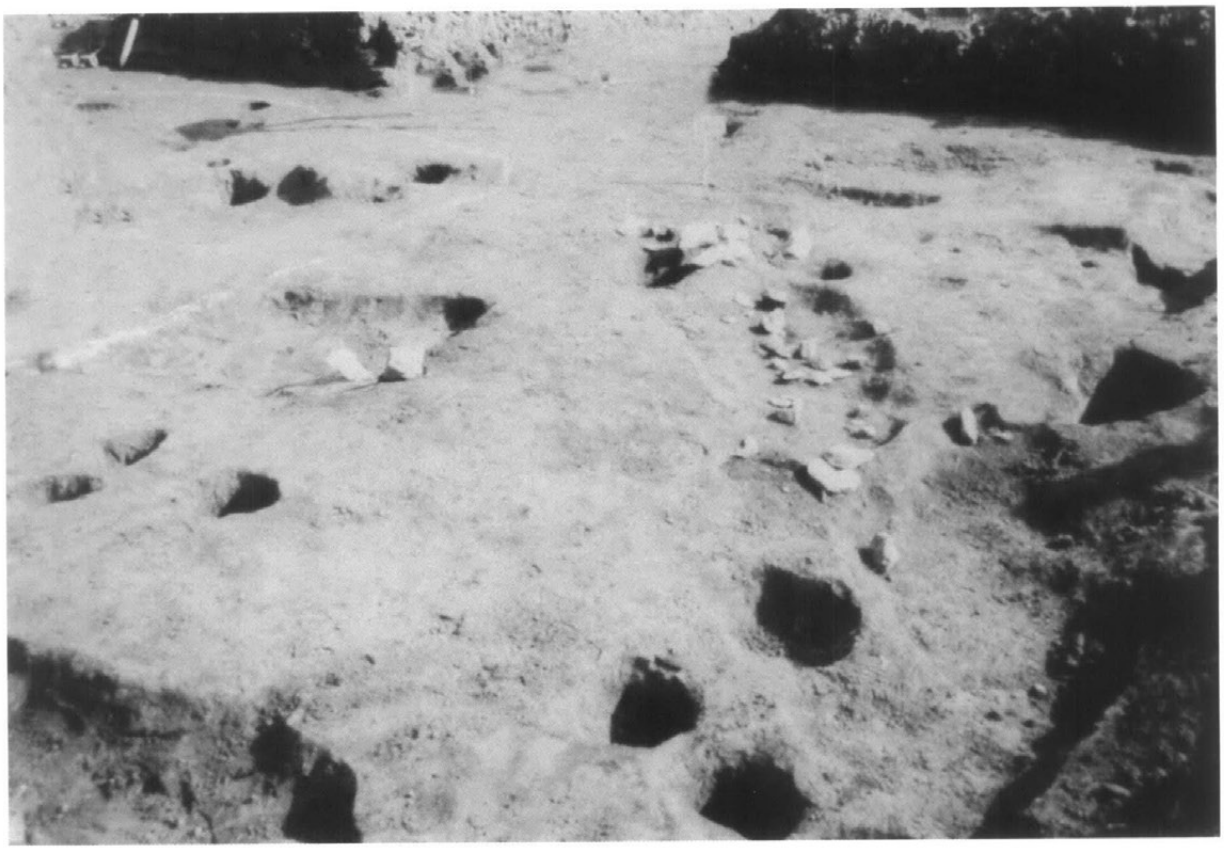
一本木遺跡第6号　住居址

一本木遺跡第１号址

一本木遺跡第２号址

図版　9

一本木遺跡第3号址



一本木遺跡第4号址

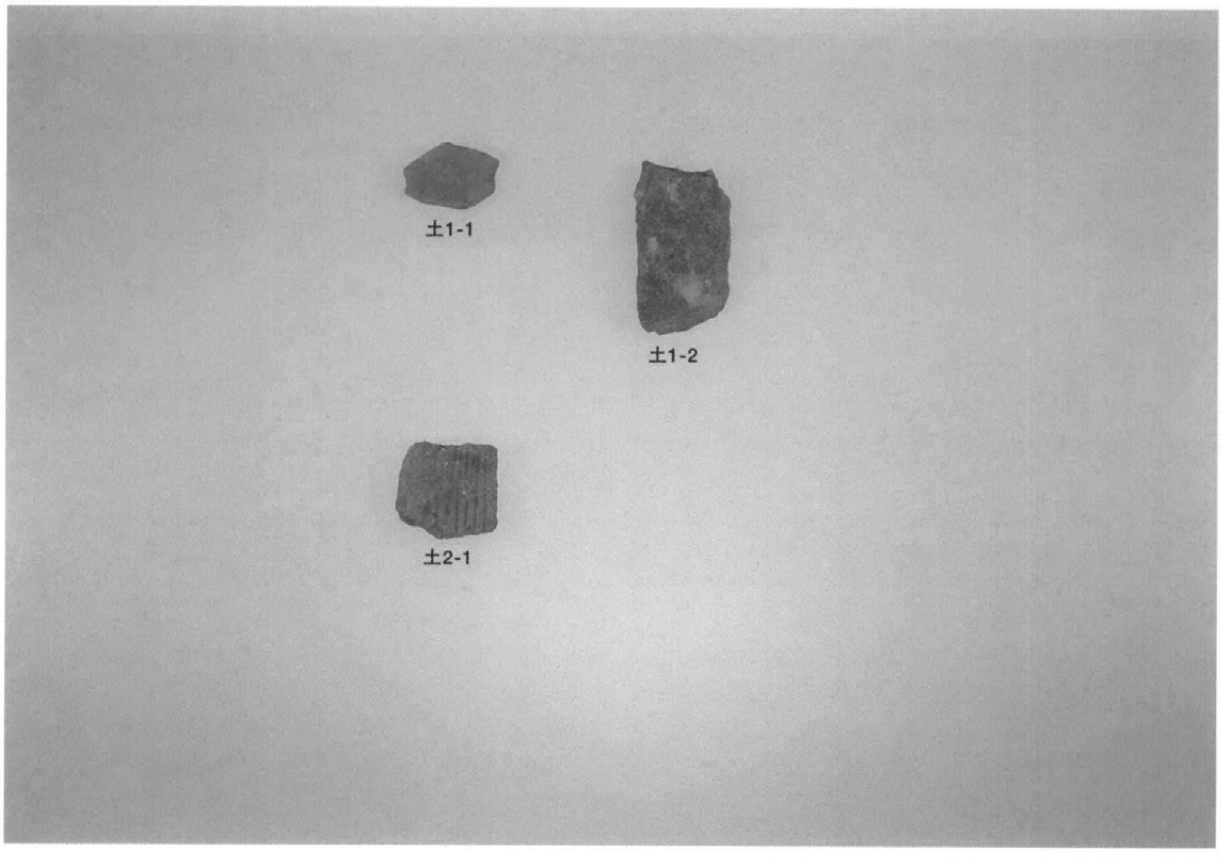
一本木遺跡第５号址

一本木遺跡第６号址

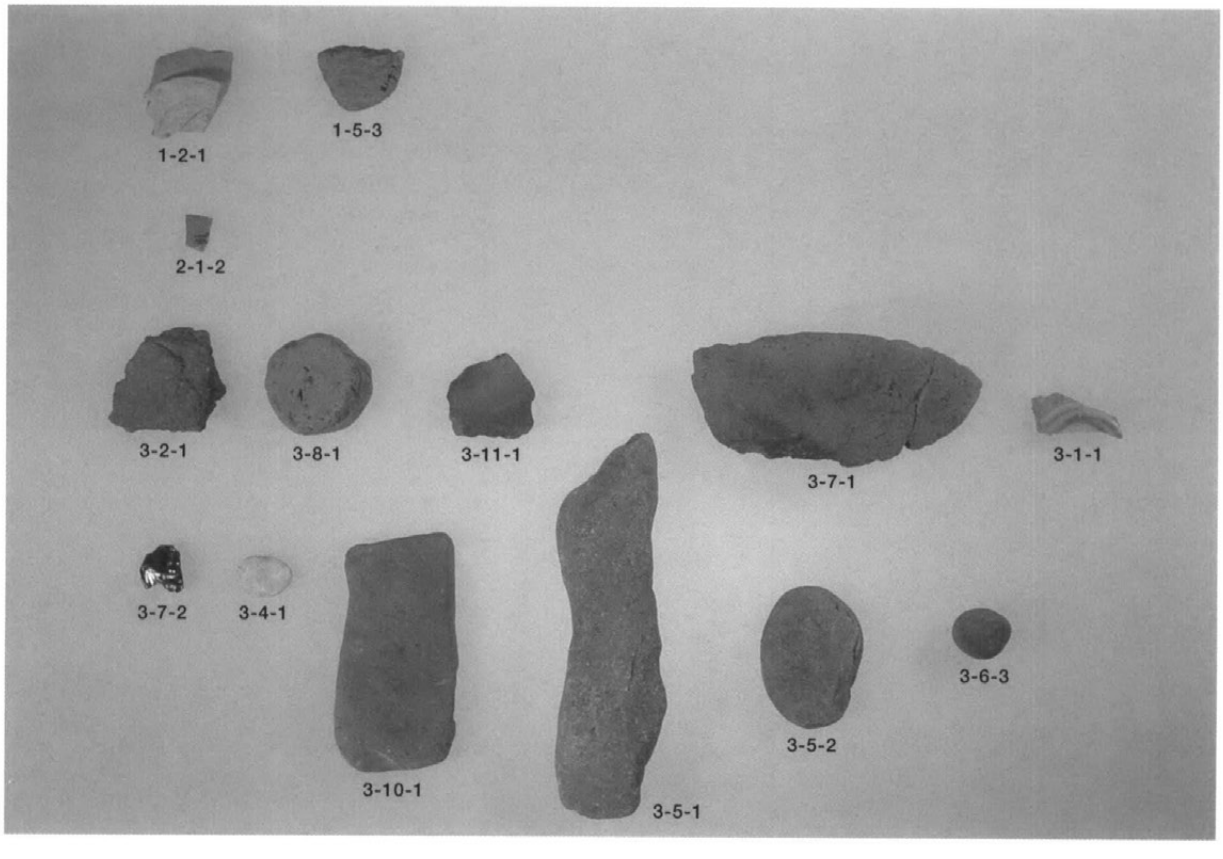
図版　11

一本木遺跡第７号址

一本木遺跡第８号址

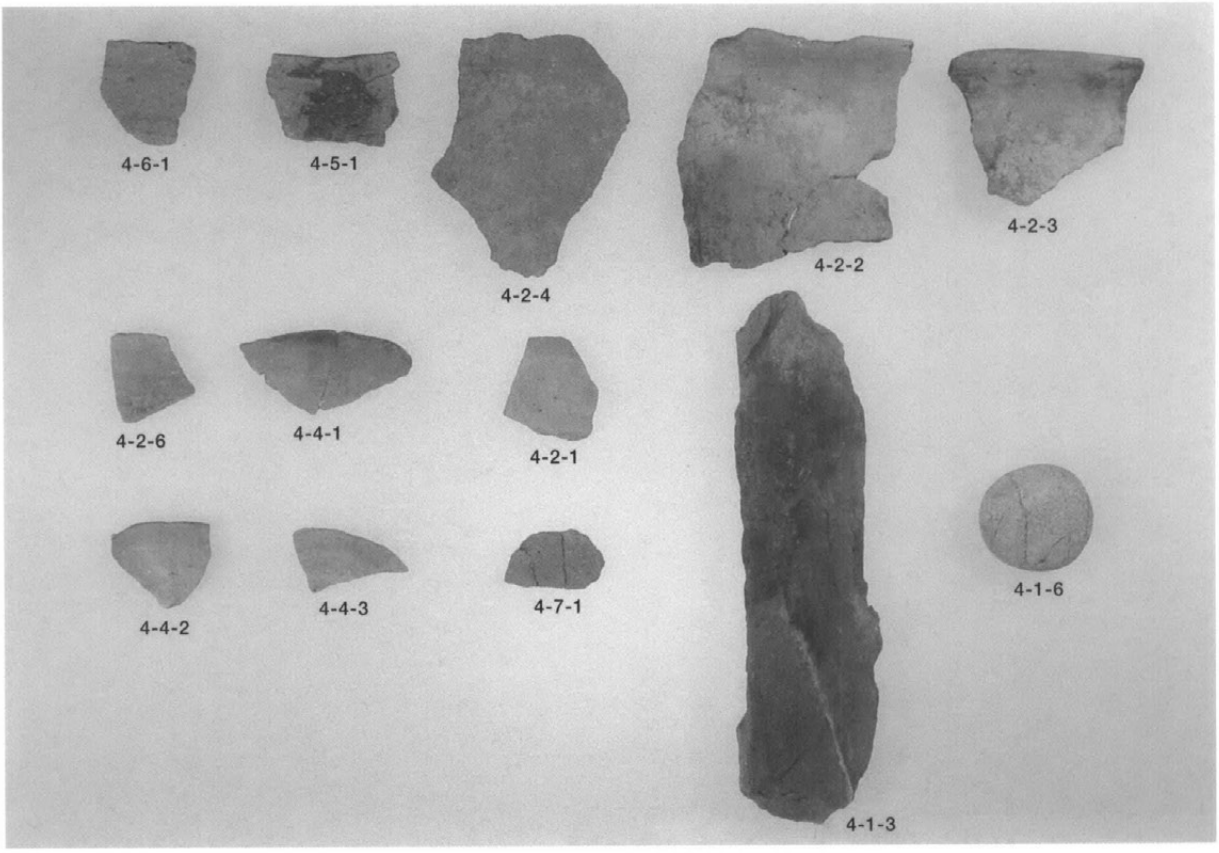


下ノ中原遺跡土壙遺物

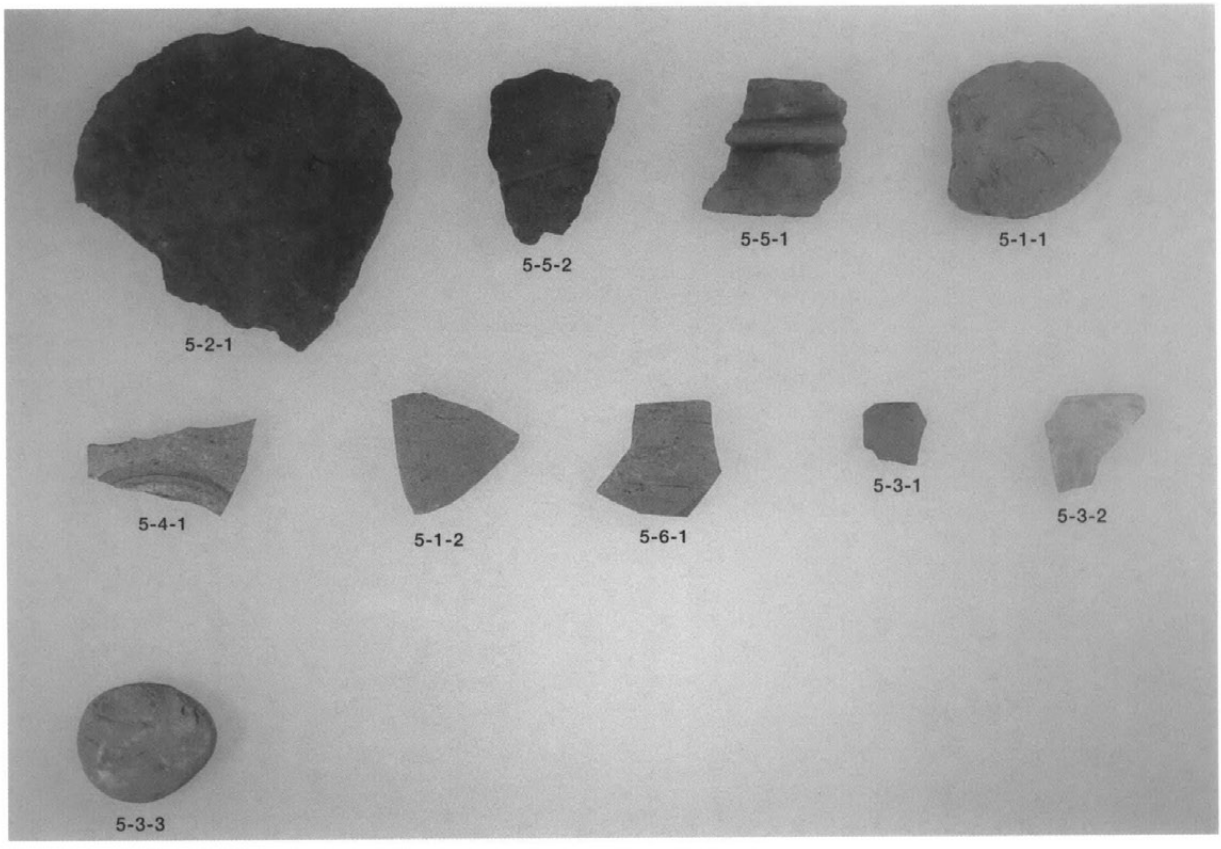


一本木遺跡第1、2、3号　住居址遺物

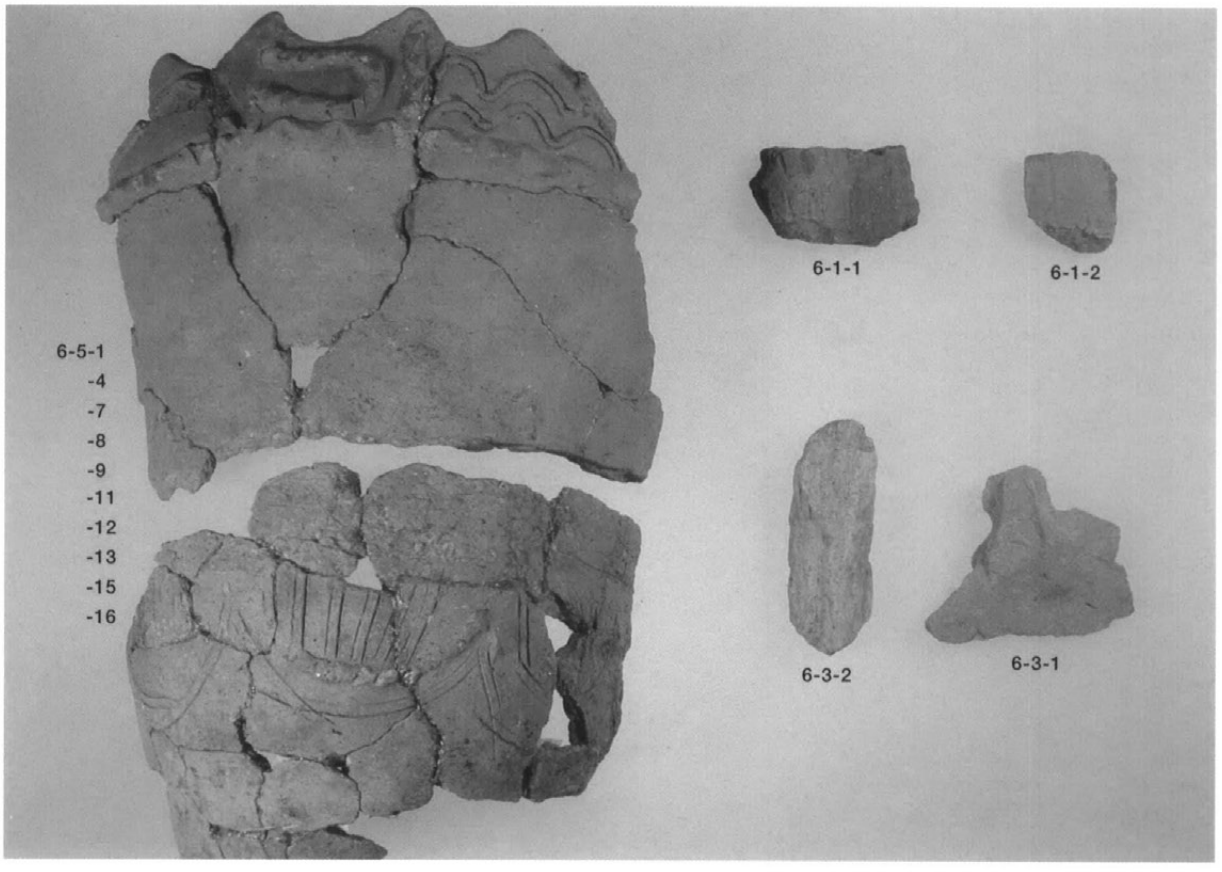
図版　13



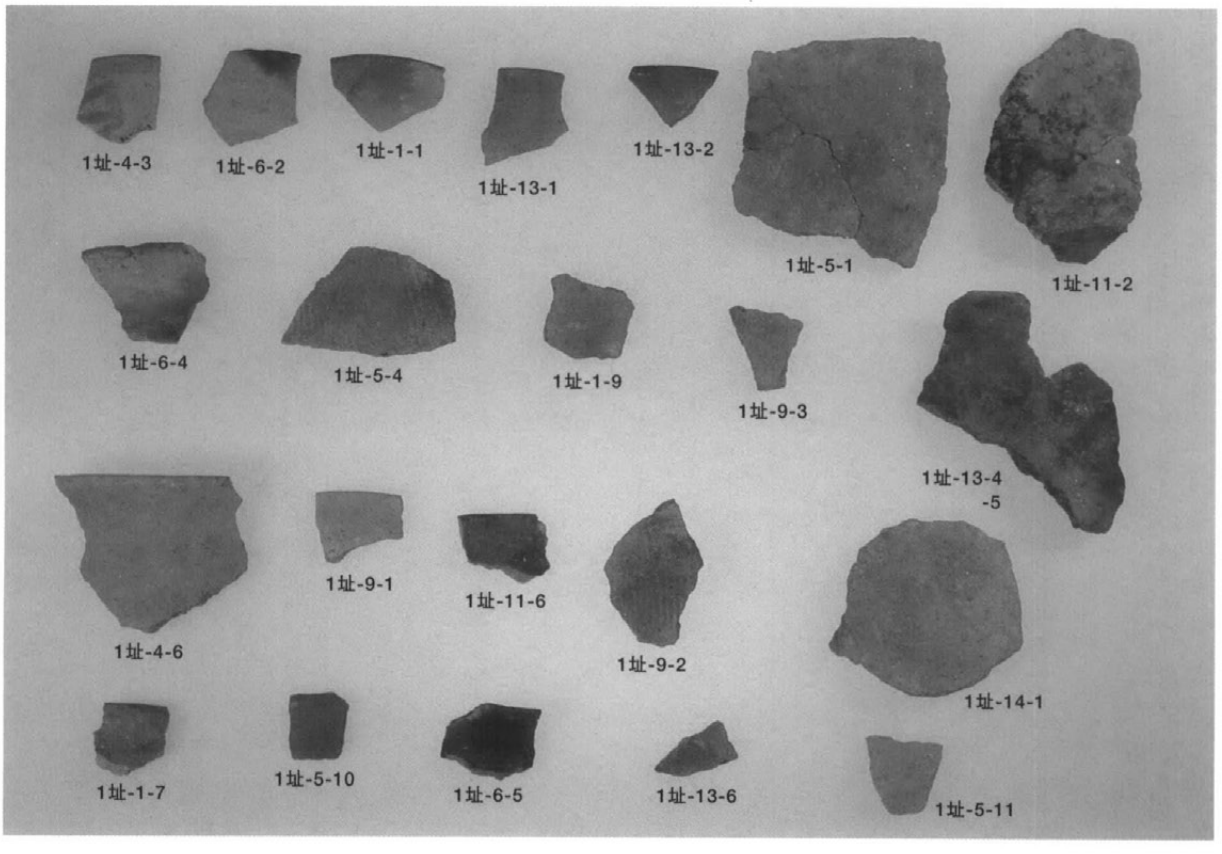
一本木遺跡第4号　住居址遺物



一本木遺跡第5号　住居址遺物

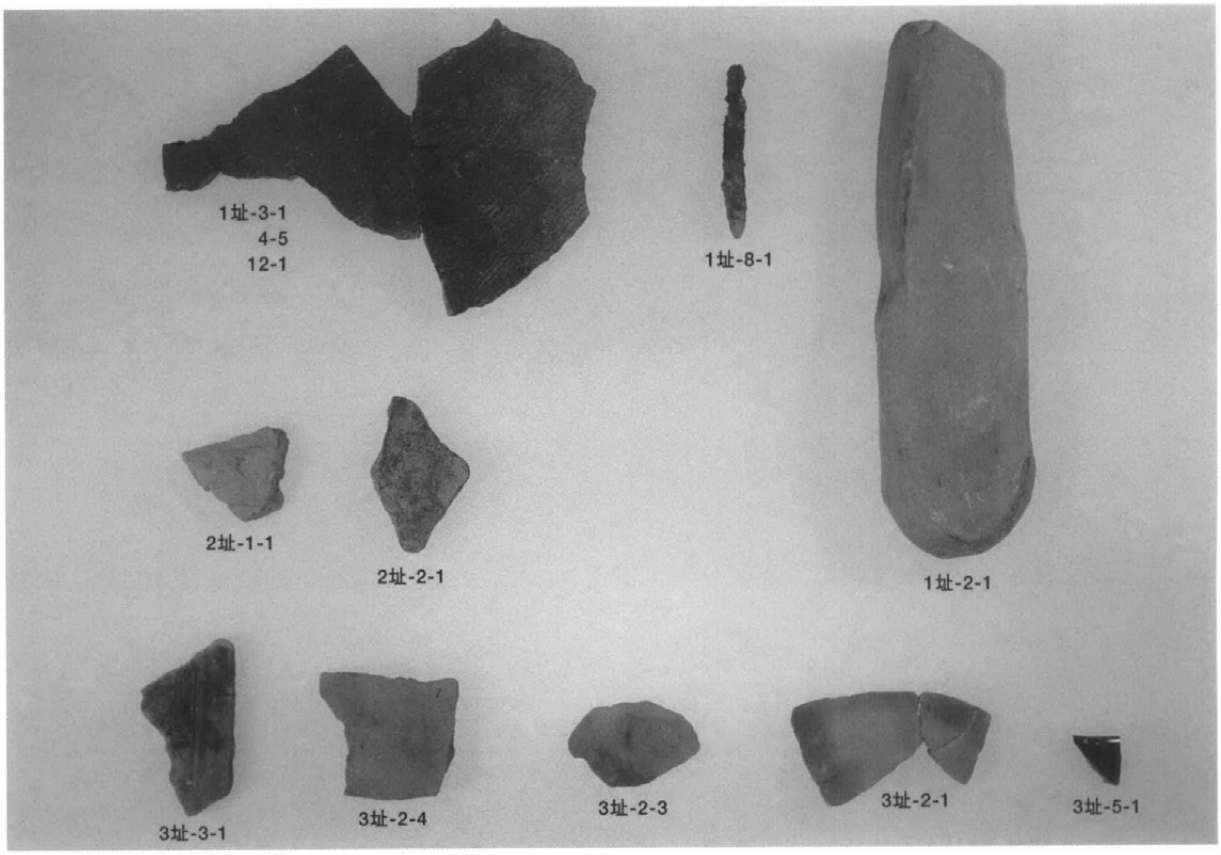


一本木遺跡第６号　住居址遺物

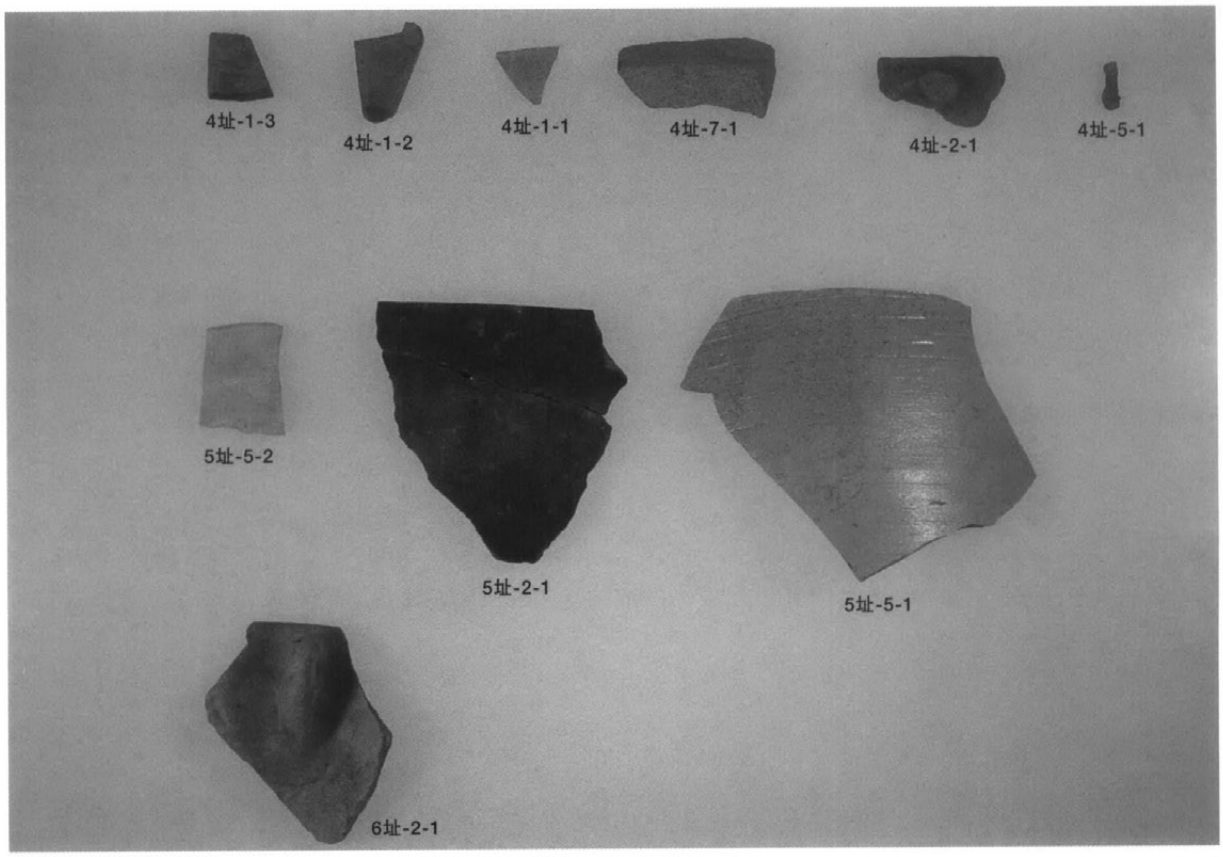


一本木遺跡第１号址遺物

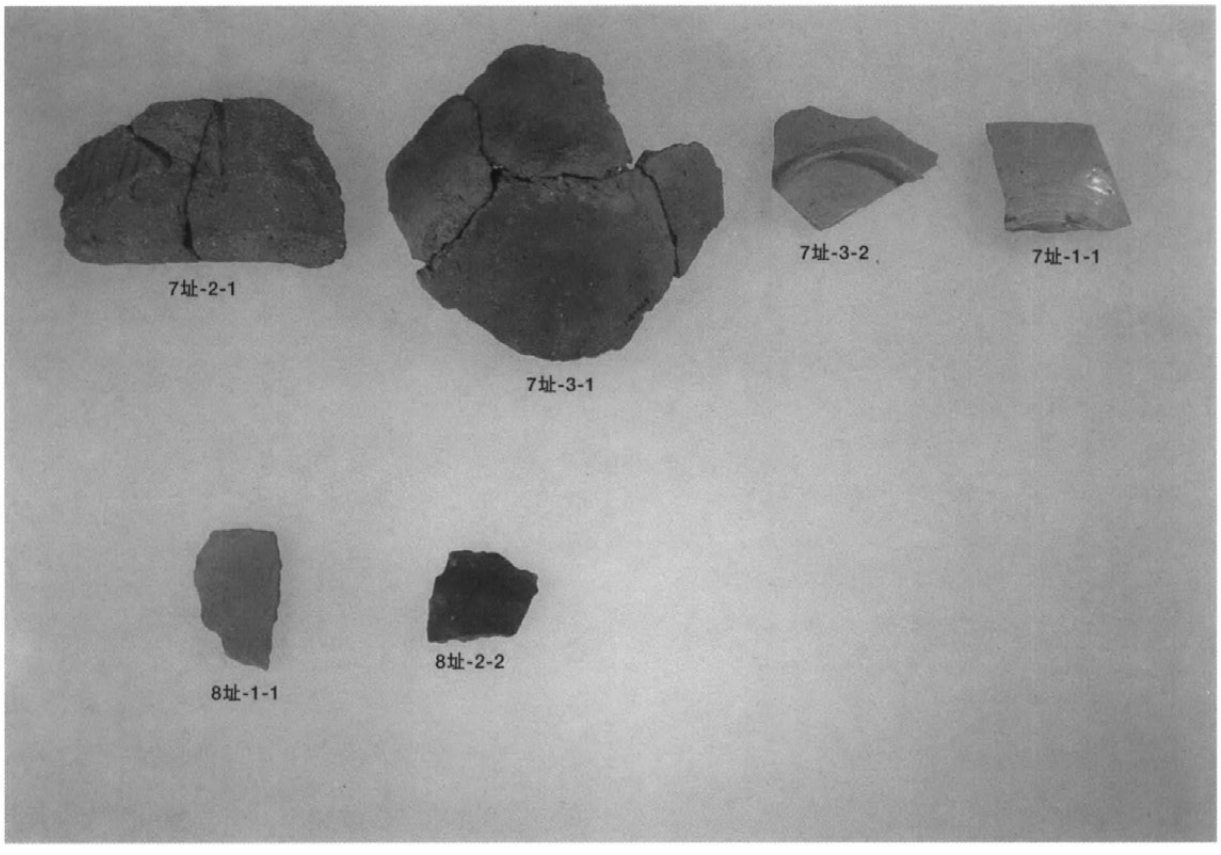
図版　15



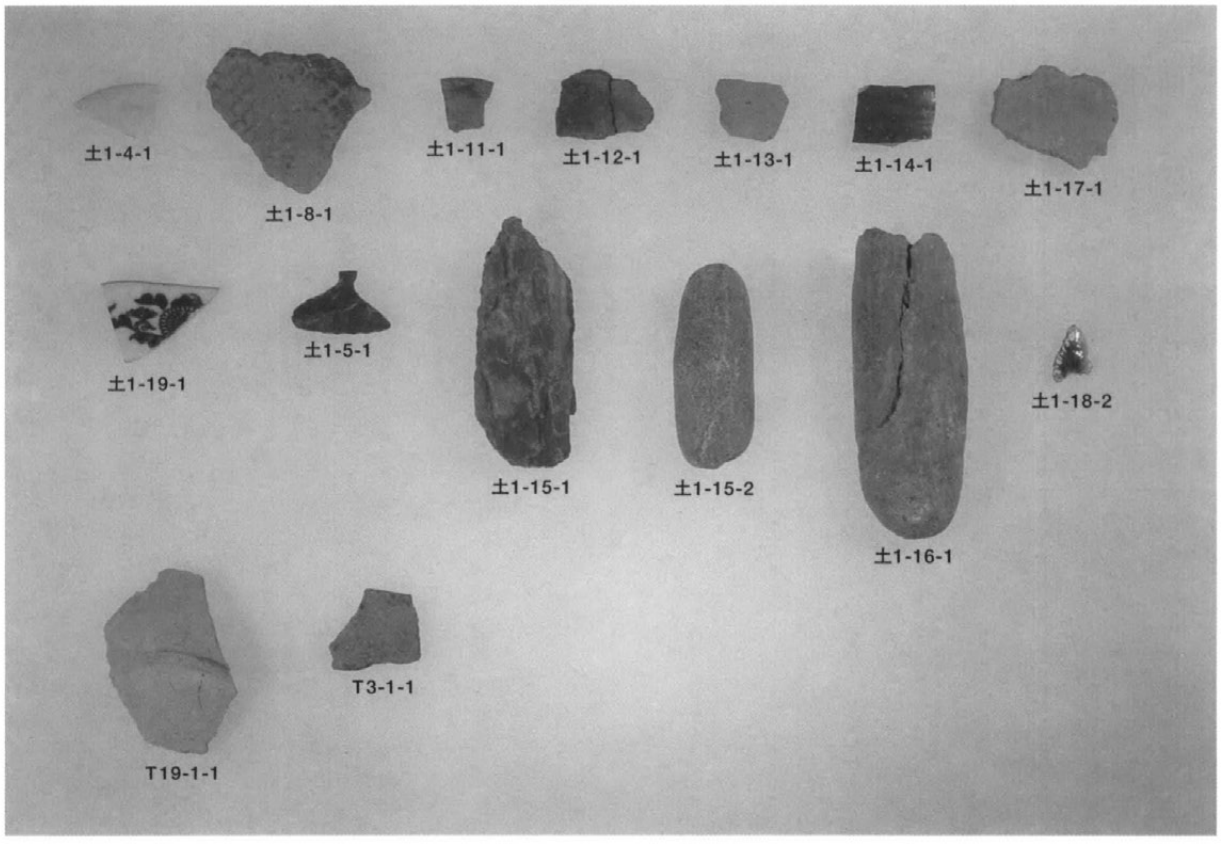
一本木遺跡第1、2、3号址遺物



一本木遺跡第4、5、6号址遺物



一本木遺跡第7、8号址遺物



一本木遺跡土壙、トレンチ遺物

図版　17

発掘状況

発掘状況

発掘作業に参加いただいた皆さん

報告書抄録

ふりがな	しものなかはらいせき、いっぽんぎいせき
書名	下ノ中原遺跡、一本木遺跡
副書名	平成12年度県営圃場整備事業担い手育成型非持地区工事
巻次	
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	友野 良一
編集機関	長谷村教育委員会
所在地	〒396-0402 長野県上伊那郡長谷村大字溝口1188-1　TEL0265-98-2009
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しものなかはらいせき 下ノ中原遺跡	ながのけんかみいなぐんはせむら 長野県上伊那郡長谷村 おおあざひじ 大字非持3389-1ほか	387	35° 49′ 17″	138° 05′ 47″	2000.7.24 ～ 2000.7.29	6,200㎡	圃場整備事業に伴う発掘調査
いっぽんぎいせき 一本木遺跡	ながのけんかみいなぐんはせむら 長野県上伊那郡長谷村 おおあざひじ 大字非持2262-1ほか	387	35° 49′ 11″	138° 05′ 21″	2000.10.24 ～ 2000.12.4	14,000㎡	圃場整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下ノ中原 一本木	集落跡	縄文時代 平安時代 中世	縄文時代の 竪穴式住居址2軒 平安時代の 竪穴式住居址4軒 中世の 掘立建物址3軒	縄文時代後期の土器 平安時代の土器 土師器 須恵器 灰釉陶器	各時代の遺物が出土しており、複合遺跡の位置付けが確証された。

下ノ中原遺跡
一本木遺跡

長野県上伊那郡長谷村大字非持

県営圃場整備事業担い手育成型非持地区工事
に伴う埋蔵文化財緊急発掘報告書
2001年

発行　長谷村教育委員会

印刷　株式会社オノウエ印刷
〒392-0015　長野県諏訪市中洲586
TEL 0266-52-8020(代)